

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

An Essay on the Logo Syllabic Kanji Kana Writing System

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003936

漢字仮名交じり表記考

八 杉 佳 穂*

An Essay on the Logo-Syllabic *Kanji-Kana* Writing System

YASUGI Yoshiho

ローマ字入力漢字仮名交じり変換という画期的な方法とコンピュータの技術進歩のお蔭で、自由に日本語が書けるばかりか、検索も自由に行われるようになり、書記法の問題は解決された感がある。しかし日本語の書記法については、難しいとか、国際化に適さないというような否定的な見解がいまだに多い。それらはアルファベットが一番進化した文字であるという進化思想や、西欧の基準を無理やり日本に適用させたことに起因している。

本論では、マヤ文字とかアステカ文字など中米の文字体系から得られた知見をもとにして、漢字仮名交じりやアルファベットの文字体系にまつわる「常識」を検討している。文字の本質は、意味ある単位をいかに表わすかということ、すなわち、表語である。一見やさしくみえるアルファベットも、表語という観点からみると、漢字となんらかわるところはない。

漢字仮名交じり表記法は、世界ではかになく珍しい書記体系だから、国際標準と信じられているアルファベットにかえなければならないのではなく、唯一無二であるから、学び磨き伝えていかなければならないという思想こそ大切である。

The Japanese writing system is logo-syllabic, using logographic *kanji* and syllabic *kana*. Though the system is said to be complex and difficult, we can now write Japanese freely by means of a word processing program. We input Japanese using letters of the Roman alphabet and it is transformed into the *kanji-kana* system. Before the development of computers, Japanese language reformists criticised its complex system and suggested replacing it with a Roman alphabetic system. We tend to apply western standards to our sys-

*国立民族学博物館民族文化研究部

Key Words : logographic, syllabic, writing system, cultural bias, Mesoamerican script
キーワード : 漢字, 仮名, 表語, 表音, 文字体系, 文化的偏向, 中米の文字

tems and deny our valuable culture. However, Japanese writing has survived for more than 1000 years, although *kanji* and *kana* reforms have been carried out many times.

The essence of writing is to express the meaningful elements of a language, that is, words. We combine letters to form words when we use an alphabet. Although each component is simple, the combination of letters is just as logographic as *kanji*. The *kanji-kana* system does not meet western standards but seems appropriate for the agglutinating Japanese language. Even if it is not the best, we cannot deny our long history of employing it. It is unique and therefore we have a duty to maintain it and pass it down to posterity.

1 はじめに	4 書きとめる工夫—漢字考
2 文字の常識	5 音を表わす文字—仮名とローマ字考
3 アルファベットの無理	6 おわりに

1 はじめに

いまやインターネットでどんなことでも調べることができるようになってきた。長い間、漢字は機械化も検索もできない、時代遅れで非効率な文字といわれてきたことが嘘のような時代となった。しかし歴史をたどれば、ローマ字であれば26文字覚えればすむのに、漢字は何万字も覚えなければならないといったレベルを混同した議論をはじめ、漢字や漢字仮名交じりの書記法を呪う議論が、新井白石以来ずっと続いてきた。漢字は難しい文字であるというのは、常識にさえなっている。

皮肉なことに、そうした主張も漢字仮名交じり文でなされるのがふつうで、この文もワープロでローマ字入力して漢字仮名交じり文に変換している。ローマ字で入力するのなら、ローマ字論者が主張してきたように、ローマ字で表わせばいいのに、なぜこんな面倒と語り続けてきた漢字をいまも棄てずに使っているのだろうか。

戦後、漢字仮名交じりにかえてローマ字を使うようにとアメリカ教育使節団により勧められ、1000年以上続いてきた書記法をローマ字にかえてしまおうとする危機があった¹⁾。しかし賢明にも、漢字仮名交じりの書記法を棄てることはなかった。そして、漢字を制限して、誰もが2000字あまりを覚えれば、日常生活に不便のない書記法が確立された。漢字仮名交じりという書記法が守られたのは、漢字が音と意味の両

方を兼ね備えた表語文字であり、漢字仮名交じり文は、語根と語尾をもつ日本語のような言語にはたいへんよく合った文字体系だからに違いない。もちろん長い伝統を否定することに忍びなかったことも大いにある。一度棄ててしまえば、営々と築いてきた文化遺産に簡単に接することができなくなることを賢明にも理解していたからでもあろう。

もちろん日本語の表記のために、何も漢字仮名交じりが日本語をしるす唯一無二の書記法であると思う必要はない。もし漢字ではなく、アルファベットが最初に出合った書記法であったなら、アルファベットを用いたであろう。しかし、もしそうだとすると、日本語の表記ばかりでなく、日本語そのものもかわったに違いない。おそらく日本語の単純な音韻組織は複雑になっただろうし、同音異義語は少なくなり、現在の漢語に大きく依存している日本語とは似ても似つかない言語になったことであろう。しかし日本人にとって、漢字が最初に出合った文字であった。それを不幸とするのは、西洋に合わせて近代化を始めた明治から続く議論の一つであるが、我々は漢字に出合って以来の2000年あまりの歴史を否定することはできない。日本人は漢字をうまく取り入れ、日本語の表記にふさわしいようにさまざまな工夫をしてきた。そこに日本人のすばらしい知恵がある。

文字は伝達の手段である。それも空間ばかりでなく時間の制約を超えて伝えられるものである。文字がなければ『古事記』や『日本書紀』がしるす神話や歴史は伝わることはなかったであろうし、新井白石がいったことなども知るよしもなかったであろう。まさに「文字ナケレバ知(ル)ベカラズ」「書(キ)ノコサザレバ知ル人ナシ」である。ところが、伝える中身が文化的なものだからであろうか。非効率な漢字を使っている限り、西欧文明と競争できないといった、本来文字とは関係ないことが大まじめに論じられてきた。文化的なことと結びつけて論じられるのは、文字が文化を蓄積する役目を担ってきたからと思われる。「文字ノ出来ルハ国ノ開クルナリ。文字ナケレバ開ケザル也」である(山片蟠桃 1976: 278-279『夢の代』神代第3)。

漢字仮名交じりの日本の書記体系は複雑であり、とても機械化できない時代遅れの書記体系という考えは、技術が発達していなかった時代にはやむを得ないことだったかもしれない。しかしコンピュータが発達して、ローマ字入力漢字仮名交じり文変換という画期的なアイデア、そしてその後の技術革新のお蔭で、日本人はその問題を解決してしまった(古瀬 1992)。テクノロジーが思考を変えたわけである。それは、逆に言えば、思考が技術の制約を受けていたことになる。あまり意識はしないが、文化や言語も我々の思考を制約している。人間は自由であらねば、と思っても、そうし

た制約のもとに生きている。

特に近代に入って、日本人は外国のものを崇拜し、自国のものを蔑んできたように思われる。西欧の基準に合わせることに忙しく、自分たちのものを深くみようと思わず、よいものが見過ごされてきた。そのため、漢字をうまく日本語表記のために取り入れてきたことや、さまざまなものを取り入れて創意工夫し改良していく才もあまり賞賛されることはなかった。そして、日本は何でも取り込み、出すことはないブラックボックスのような国だと批判されてきた。

「取り込む」ということは入力ということであるから、これは出入力の問題に置き換えて考えることができる。その観点からみると、入力側にばかり力を注いできたということになる。確かに、その伝統は現在でもいたるところにみられる。たとえば、ローマ字論者は、ローマ字で「書く」という入力のことばかり考えており、出力である「読む」ことについての考慮が著しく欠けていたということが理解されてくる。また、国際理解教育が最近盛んになっているが、それは外国のことをよく理解することだと解されている。しかしこれは入力に過ぎない。自分たちを他の国の人たちに理解してもらおうこと、自己表現すること、すなわち出力も考えなければならない。両者がそろってはじめて国際理解といえるものなのに、その視点が欠けている。このように、入力にばかり力を入れ、出力のほうは考慮外ということがたくさんある。

日本人は自己の基準をもたないかのようにいわれるが、歴史を振り返ると、宦官とか科挙、防壁など、日本に合いそうにないものは、賢明にも取り入れなかった。確かに、西洋の発達を目の前にして、あまりの後進性に日本人が自己否定的になったのも無理ないことである。しかし、否定も肯定も教育や考え方次第のところがあり、すべて知識や心の問題である。

我々は、西欧を基準にして物事をみることにあまりに慣れすぎている。本論では、日本の文字体系について考察するのであるが、そこにおいても西洋の基準で文字がみられてきた嫌いがある。そのため、まず中米の文字を材料にして、これまでの知識が偏っていることを指摘しようと思う。

これまで文字に関する論議は旧大陸の文字が中心であった。しかし中米の中心域のメソアメリカと呼ばれている文化領域では、マヤ文字をはじめ、たくさんの文字が使われていた。ところが、文字学や文字論では、まだまだメソアメリカの文字から得られた知見が取り込まれていない。そのためメソアメリカからみると、これまでの常識が非常識に思えるようなことがたくさんある。そうしたものを扱って「常識」というものがいかに西洋中心的で、正しくないものであるかということを第2章で考えてい

きたい。それは日本語の書記体系の問題に深く関わるからである。

16世紀に発見されたアメリカ大陸は、新大陸と呼ばれることがある。旧大陸を中心に考えられてきた枠組みを検討する際に、この上ない材料をたくさん提供するところであり、だからいまでも新大陸といってもよいところである。そうした知識をもとに、日本語の文字体系を考えることにしたい。

マヤ文字を研究していて、日本の文字体系との類似に気づいたのはもう20年以上も前のことである。何とか日本の文字体系から得られる知識が応用できないかと考えているうちに、日本の文字についてもいろいろ考えてきた。そうしているうちに、日本の文字体系のなかに、日本の文化の型そのものがあることにも気づいた。呉音、漢音、唐音と、入りくる音を拒絶することなく、鷹揚に受け止めてきたことに、何事も大切にしてもったいないと思う心に通じる気持ちを感じたり、漢字から仮名を作り出したことから、ものを工夫して、そして改良して便利にしていく精神を感じとり、日本文化を特徴づけるいろいろな型が文字体系のなかにも見いだせることに気づいた。また仮名に漢字や草仮名を交ぜる書道の世界に、同じものばかりではつまらない、多様性を生かす精神をみつけた。さらに、漢字仮名交じりを時代遅れとして、ローマ字にかえなければならぬと100年あまり真剣に論じられてきたが、そこに外国のブランド製品をむやみにありがたがる一団と通ずるものがあると思った。外国のものをありがたがるその対極に、自己を卑下し、否定する系譜がある。これも日本文化の特徴の一つではなからうか。

文字は知識の蓄積を可能にするものであり、文化の凝縮物ともいえるものである。だから、文字に文化的な問題が集約するのも当然である。文字のことを扱っているはずが、文化の話になることもたくさんある。さらに、文字そのものの研究においてさえ、文化的な偏向がかかりがちである。一例として、マヤ文字の解読について挙げてみたい。欧米の学者はアルファベットで育ったためか、アルファベットを基礎において考えがちである。マヤ文字は、現在のところ、表語文字と音節文字の混合体系とみられており、日本語の表記体系とよく似ている。ところが欧米の学者にかかると、たとえば、liを表わす音節文字がilを表わす文字としても使われると平気で主張される。音節文字しか知らない日本人にとっては、liとilはりとイルとなり、まったく関係のない表記になるが、彼らは単にlとiが入れ替わっただけとみて、何の疑問も感じないようである。もしそうだとしたら、マヤ人もアルファベットを発明しているはずだが、現在のところ、音節文字はあってもアルファベットがあったという証拠はない(八杉2003b:第7章)。

本稿では文字についての見方、考え方を論じることを中心に据えている。なぜかといえば、それは第4章で引用しているが、我が恩師梅棹忠夫の文章にふれたからである。博士の書かれた本は、いつも蒙を啓かれることばかりであるが、日本語の表記はローマ字化以外に道はないという、文字についての論だけはどうしても納得がいかなかったからである。日本語の表記をローマ字にしなければならないということがおかしいことを考えるために、まず第3章で、アルファベットの無理という話題を取り挙げることにした。アルファベットであれば、簡単であるとか、誰もが読めるというのは間違いであることを論じた。アルファベットは文字の究極の形であり、万能選手のように思われているが、たった26文字で世界の言語を表わそうとすると、どうしても無理が生じる。

文字は単なる記号ではなく、人の考えや文学や歴史、法律など、さまざまな人間活動を伝えるものである。だからこそ漢字が時代遅れのもので、漢字を使っている限り、世界の進歩について行けないといった論が何の疑問もなく提出されてきたのではなかろうか。そうした問題についても考えることにした。しかしその議論の多くが技術の制約のもとになされてきたことは、コンピュータの発達のお蔭でそのほとんどすべてが解決された現在からみれば明らかである。漢字がローマ字入力漢字仮名変換という画期的な技術によって難なく入力できるようになったお蔭で、コンピュータにもならない文字であるとか、検索できない文字であるといったことはなくなった。そのため、それまでの議論が西洋中心主義であり、西洋に対する劣等感のせいであることが鮮明となってきた。にもかかわらず、いまだに漢字は難しいとか、時代遅れの書記法だという議論が見受けられる。

確かに日本語の表記をみれば、漢字あり、仮名あり、ローマ字ありとさまざまな文字が使われている。アラビア数字や α や β などのギリシャ文字などが混じることもある。さらに縦書きや横書き、音と訓、異体字、ルビなど、よくもこんな多様なものを含んだ文字体系を日本人は平気で運用しているものだと、外国人はもちろんのこと、おそらく当の日本人も思うことであろう。

こうした世界に類をみない多様な文字体系を無秩序な、雑多な寄せ集めのどうにもならない体系とみるか、それとも多様なものを拒否することなく取り込む豊かな包容力のある体系とみるかで、かなり違った考えや日本人観を生むことになる。ローマ字論者はどうも前者のような考えに違いない。卑屈な考えは、文字ばかりでなく、日本の歴史や日本人の業績の軽視など、いろいろなところに及んでいる。私の立場、考えは、後者のものである。日本文化を多様なものを難なく取り込む懐の深い文化とみる

と、21世紀にますます重要になってきた多文化、多言語主義に通じるすばらしい知恵がそこに込められていると感じるようになってきた。一見雑多とも思える日本語の表記体系も、見方を変えれば、豊かな多様性を含んだ書記法といってもいいのではなからうか。

脳のなかには同じ機能をもつ回路が重複しており、一見無駄と思える重複回路が、実は創造力を生む源泉となるものだそうである。複線思考を行なうことは、脳の機能とも一致しているし、安全を確保するものである。

書記法についての私の原点は、意味ある単位をどのように表わすかということにあるが、それは「表語文字であれ表音文字であれ、文字の根本的な言語的機能は究極には表語ということにある」という河野六郎が喝破したことばに出合ったことで、はっきりと形になって現れてきた（河野六郎 1977; 1994）。英語の綴り字も漢字も一緒ではないか、それなのに、かたや表音文字といい、かたや表語文字というのはおかしいと思うようになった。

日本の漢字仮名交じりの書記体系を頭においてマヤ文字の特徴を考えていたとき、両者の類似性に驚いたことがある。「食べる」「食う」や「行く」「行こう」などの漢字の後にある送り仮名が、文字学や文字論でいうところの決定詞や音声補助符と同じではないか気づいたとき、日本語の表記法に対する見方が違ってきた。しかし漢字と仮名というまったく違う体系の文字を交ぜて使うのは日本独特のものである。だから日本語の表記について考えるとき、漢字と同時に仮名についてもふれないわけにはいかない。それについては第5章で述べることにした。すでによく知られているように、仮名は漢字から生まれたものである。漢字の意味を棄て、音だけを利用した真仮名（真名）、いわゆる万葉仮名から平仮名と片仮名が生まれた。その過程はすでに多くの本で取り扱われているので²⁾、第5章では、仮名だけで日本語をしるすと、簡単には読めないことについて考えていきたい。

本論は、日本の書記体系とマヤ文字や中米の諸文字について考えたことをもとにしている。日本の書記体系については素人に過ぎないが、しかし、表音と表語のレベルの混同や、訓が意味であること、書くことと読むことは別であることなど、いくつか当たり前のようでありながら、見過ごされてきたことにふれたつもりである。ローマ字論やカナモジ論などの表音論者は、書くことに重点をおき、文字の本質ともいえる「読む、読まれる」ことへの配慮が欠けているように思われる。「書くこと」と「読むこと」は「読み書き」といって対にされることが多いが、まったく別物であり、それを区別することが書記法の問題を考える上で重要であることについても考えてみた。

その最上の解決法がローマ字入力、漢字仮名交じり変換と思われる。

日本の文字は、孤立無縁の文字体系であるので、世界のほとんどで使われているローマ字にかえなければならないという考えになりやすいのも、日本人の特徴といえよう。他の基準に合わせるのは日本人の優しさかもしれないが、そのために1000年以上も続いた文字伝統をいとも簡単に捨て去って何とも思わない人々を生み出してきた。

孤立しているというのなら、日本語も孤立無縁である。そのためか、英語やフランス語を国語にしようとした人もいた。しかし母語を自ら棄てるような発想をもつのもおそらく日本人だけではなからうか。征服され、母語以外の言語を強制され、必死に母語を守ろうとしてきた多くの民族の歴史にふれると、そのような考えが、いかに人間の心を知らない軽薄なものかがわかるに違いない。

日本の文字体系は難しいとよく言われる。こんな時代遅れの文字を使っているのはだめだという声をいまでも聞く。しかし文字の本質は語を表わすことである。その観点から日本の文字体系をみると、いままでの「常識」がおかしいことにいろいろ気づく。日本語の複雑な表記法は、アルファベットを基準にした文字論の枠を超え、西洋の基準のおかしさを考える上でも、とてもふさわしい素材である。しかし、日本人の自虐的な考えが現れているところでもあり、文字を超えて、どうしても文化的なゆがみを考えざるを得ず、そうした文化の型についても、ふれていきたいと思う。

2 文字の常識

この世界に言語がいくつあるか正確な数を出すことはできないが、エスノローグによると、6912言語と数えられている (www.ethnologue.com)。もっともそこでは日本の言語は15と数えられているので、我々の常識とは少し違った数え方がなされていることを考慮しなければならない。また私が研究している中米の言語は、エスノローグでは、412言語であるが、ふつうは100前後と数え、残りは方言としているので、いかに細かく数えられているかがわかるだろう (Yasugi 1995)。世界の言語を網羅した三省堂の『言語学大辞典』5巻に収録された言語総数は3698であるから、それくらいかもしれない。しかし、方言とされているものや異名も数え上げると、17,876 (和文索引)、28,104 (欧文索引) となり、とてつもない数である。どちらにしても、文字の数に比べると、言語の数は、段違いに多いことは間違いない。文字の数は、有史以来300ほどしかない (三省堂『言語学大辞典文字編』には272)。現在日常に使わ

れているのは40あまりなので、いかに多くの民族が文字をもたなかったかがわかる。

文字ということばは、文と字からなっている。文とは「日」や「月」のように、それ以上分解すると意味をなさないものを指し（すなわち文字素）、字とは文を組み合わせてできるものをいうが、そうしたものを全部含めて、文字ということばをここでは使いたい。文字とは「ことばの単位を一定の約束のもと置き換えて記録する記号である」ことは間違いないが、体系全体を指したり、体系の中から一つをとりだしている場合もあり、多義的な使われ方をする術語である（西田編 1981; 河野 1994 等）。言語の定義と同じように、厳密な定義をしようとすると、かえって不具合が生じるように思われ、また文脈で理解されるものなので、これ以上定義せずに使うことにする。

文字はふつう、(1) 物の絵、(2) 抽象的な概念を表わす絵、(3) 語を示す記号、(4) 音節文字、(5) アルファベット、という道筋に従って発達していくと考えられている。しかしこれは西欧人たちが使うアルファベットが一番進化した形であるという進化論に影響された図式に過ぎない。確かに単音文字であるアルファベットは、仮名のような音節文字より分析的である。だからアルファベットが一番発達した体系であるという見方が支持されてきた。しかし文字の本質を考えると、文字とは言語をしるすことであり、その言語に合った形がもっともふさわしい文字の形といえよう。

単音文字が発達したのは言語の要請があったからである。アラビア語などセム系の言語では、子音の方が大切である。そうした言語では、子音が母音とは別に意識されるはずである。英語のように子音終わりが主で子音連続が許される言語でも、当然のことながら、アルファベットの方が言語を表わすにふさわしい文字ということになる。それに対して、日本語は開音節語である。つまり子音 (C) と母音 (V) で表わすと、CV または CVCV といった単純な形となり、母音終わりの言語である。こうした言語では、子音はあまり意識されることはない。だから仮名という音節文字が使われて当然である。

世界の文字は、絵図に近い具体的なものを描いた形から、表意型と表音型に分かれて発達してきた。表意型の代表は漢字である。しかし漢字も意味を表わすだけではない。必ず音をもっている。だから最近では表語という術語が使われている。一方表音型は、アルファベットのように、単音文字になったものと、仮名のような音節文字がある。仮名は音節以上に分析する必要のない言語を表わすのにふさわしい文字だが、西欧の基準をもってくると、音節止まりであり、単音文字になり損ないの文字という考えが出てくる。確かにアルファベットの方がより分析的である。しかし、たとえば「か」を表わす場合を考えてみれば、アルファベットのの一つであるローマ字では、k

と a をあわせて、ka としなければならない。2 字でもって表わすのに対し、音節文字では 1 字ですむ。開音節の言語からみると、分析しすぎであり、不要な分析ということになる。つまり、日本語からみると、アルファベットは行き過ぎということになる(八杉 1984)。

確かに研究のためには、分析的なアルファベットを使うことで、たとえば、「とめる」「とまる」、「さげる」「さがる」のような他動詞と自動詞の対は、ローマ字に直すと、*tomeru* : *tomaru*, *sageru* : *sagaru* のように、根の中心の母音交替で区別されるという、仮名では気づかないようなことがわかる。ところが、動詞の活用形でみると、少し違ってくる。5 段活用の動詞は、語根が子音終わりと考えれば、表 1 にみられるように、語根は一つの形 (*tomar*) で表わしうる。一方母音終わりとする、語根が、5 つの違った形 (*kika*, *kiki*, *kiku*, *kike*, *kiko*) になってしまう。ところが上 2 段や下 2 段活用であると、語根を子音終わりと考えても、母音終わりと考えてもあまりかわらない。表 1 にはそれぞれ両方の切り方 (a, b) を挙げてみた。子音終わりと考えると (a), 5 段活用との体系性がより増すが、*anai* 活用, *inai* 活用, *enai* 活用の 3 つの活用形があるといわなければならない。しかし k- とか m- が語根になる場合が生じる。一方母音終わりとする (b), 5 段活用も母音終わりとした方が、*-nai*, *-masu*……といった同じ語尾になって、活用語尾の方では体系性を獲得する。どちらにしても、新しい視点を得ることができるが、漢字仮名交じりの書き方による分析より優れたものになるといえるであろうか。文字は言語の分析のためにあるのではなく、言語を表わすためにあるのだから、その前提に立てば、アルファベットは決してふさわしい文字ということにはならない。

表 1 動詞活用をアルファベットで表わした例

(a) 止まる	<i>tomar-anai</i>	<i>tomar-imasu</i>	<i>tomar-u</i>	<i>tomar-utoki</i>	<i>tomar-eba</i>	<i>tomar-oo</i>	<i>tomar-e</i>
(b) 聞く	<i>kika-nai</i>	<i>kiki-masu</i>	<i>kiku</i>	<i>kiku-toki</i> ,	<i>kike-ba</i>	<i>kiko-o</i>	<i>kike</i>
(a) 挙げる	<i>ag-enai</i>	<i>ag-emasu</i>	<i>ag-eru</i>	<i>ag-erutoki</i>	<i>ag-ereba</i>	<i>ag-eyoo</i>	<i>ag-e</i>
(b) 食べる	<i>tabe-nai</i>	<i>tabe-masu</i>	<i>tabe-ru</i>	<i>tabe-rutoki</i>	<i>tabe-reba</i>	<i>tabe-yoo</i>	<i>tabe</i>
(a) 着る	<i>k-inai</i>	<i>k-imasu</i>	<i>k-iru</i>	<i>k-irutoki</i>	<i>k-ireba</i>	<i>k-iyoo</i>	<i>k-iro</i>
(b) 見る	<i>mi-nai</i>	<i>mi-masu</i>	<i>mi-ru</i>	<i>mi-rutoki</i>	<i>mi-reba</i>	<i>mi-yoo</i>	<i>mi-ro</i>

文字の究極の目的は、語を表わすことにある。表音文字であると、組み合わせで意味ある語を作らなければならない。一方漢字は語を表わすのでそのままでもいい。もちろん「文字」とか「意味」のように、2 文字を使って 1 語を表わすことも多いが、それぞれの文字自体に意味があるので、理解は容易となる。

文字はすべて表音文字に進化するという誤解

ところが大多数の人は、文字の歴史をみて、文字はすべて表音文字に進化するというのが法則だと思っているようである。そのため漢字を目の敵にする。たとえば、「我々が文章を書くに当たり漢字を用うるが為我が国運の進歩が直接間接に阻害せらるること」(山下 1920: 1) などとその代表的な意見であろう。こんな難しい文字を使っているのは進歩から取り残されてしまうというのである。

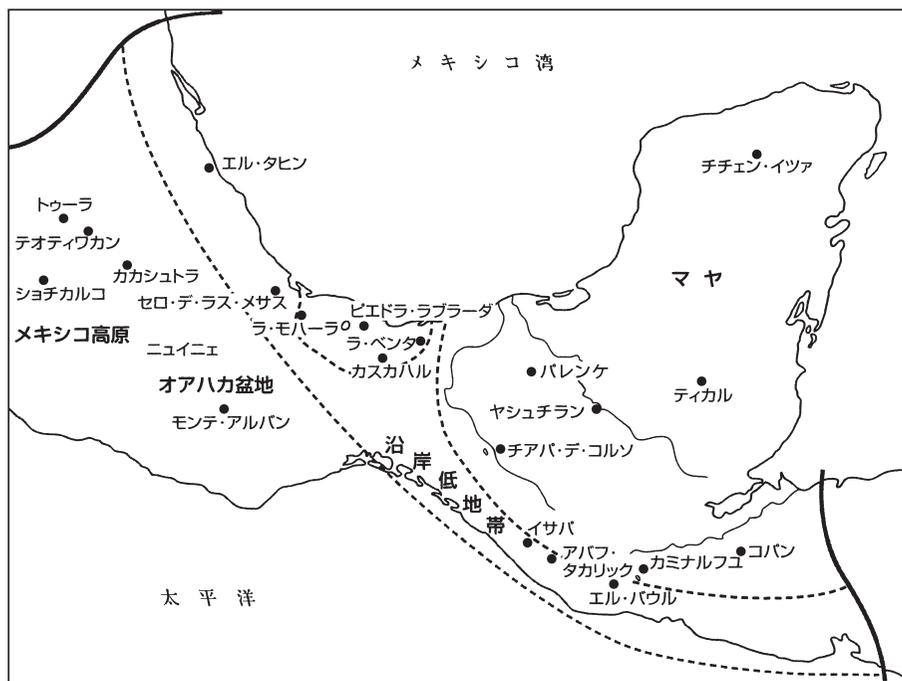
しかしいまや世界語となっている英語をみれば、文字というのは語を表わすためにあることが納得できるはずである。たとえば、knight と night はともに [nait] と読む。ところが nait とは書かない。なぜか。それはそれぞれが語を表わす単位となっているからである。これを nait と変えると、語として同定できなくなる。だから現在はもう発音しないアルファベットをたくさんつけたままである。部品はアルファベットであっても、語として一続きのものであり、その組み合わせには規則がある。その規則を覚えなければならない。それは漢字を覚えるのとそんなにかわりない。これについては第4章で詳しく述べるが、文字は音声文字に進化するというのが法則と思っているのは、間違った常識の一つであるということをまず述べておきたい。音声文字になったので、もう一度、語を作るためにそれらを意味ある単位に組み立てなければならない。綴り字を覚えなければ、意味ある単位ができないわけで、それは漢字のような語を表わす文字、すなわち表語文字と同じことである。

これから文字に関しての常識に間違いがあることを挙げていくが、その前に、こうした常識を崩す例がたくさんある中米の文字体系について概説しておきたい(八杉 1985a; 2001)。

文字の出現と発展

最初期の楔形文字は、穀物や家畜の数などをしるしており、経済的な理由から文字が生まれたという。一方漢字は吉凶の占いをしるすためにできたという。では中米の文字はどうかというと、どうも征服の歴史を刻むことから生まれたようである。

メキシコ市とマヤ地域の間におアハカ州がある(地図1)。中米の中心地といってよい高地おアハカ盆地の山上に築かれたモンテ・アルバンでは、紀元前6世紀頃より文字が出現した。紀元前500年頃より紀元前150/100年頃までのモンテ・アルバンI期に属する「踊る人」と名づけられた石板が300枚ほどある。人物像は猿のようでもあるし、踊っている人のようにもみえるが、いずれも裸で、なかにはペニスや内臓を



地図1 メソアメリカ

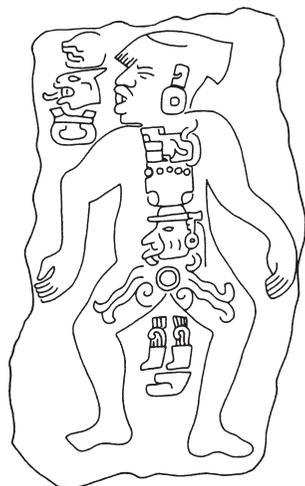


図1 躍る人55号 モンテ・アルバンI期 (Flannery and Marcus 1983: Fig. 4.7)

切り取られた人もいる。そうした石板のなかに、人物の体や足の間、人物の頭の前後に文字らしきものが刻まれているものがある (図1)。

モンテ・アルバンの北西10キロメートルほどのところにサン・ホセ・モゴテという小さな遺跡がある。そこで見つかった記念碑3号は、モンテ・アルバンI期より少し前のロサリオ期(紀元前700年～500年)のものだが、これも内臓を切り取られたのか、上半身から内臓あるいは血が出ている像が描かれている。そして人物の足下には、2文字が刻まれている。おそらく征服した土地の支配者に辱めを与えたことを表わしているに違いない(図2)。

なぜ人物の体や脚の間などに刻まれた絵のような記号を、あまり疑問に思うことなく、我々は文字とみな

すのだろうか。それはおそらく同じような大きさの記号が線形に並んでいるからに違いない。言語は線状的なものである。記号が線状的に並んでいるということは、言語の線状性を反映しているからではなかろうか。絵は大きさが自由だが、文字となると大きさがある程度そろっているはずであるというのも、文字に対して我々がもっている常識ではなかろうか。そうした思いが迷うことなく文字と言わせるのである。しかしあまりに短すぎるので、原初的な文字とか文字らしい記号と言うことになるのである。

モンテ・アルバン I 期には、文字だけの石板もある。ここに挙げた石碑 12, 13 号には、動詞や人物の名を表わしているに違いない文字のほかに、260 日暦と年を表わす暦の文字が刻まれている (図 3)。暦があるということは、歴史的な日を刻んでいるのだろう。これだけ記号が続くと、もう間違いなく文字が刻まれていると判断する。



図 2 サン・ホセ・モゴテ石彫 3 号 (Flannery and Marcus 1983: Fig. 3.10)

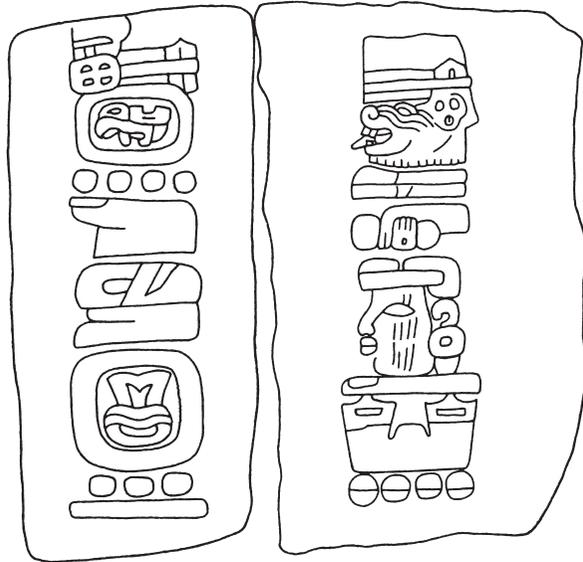


図 3 モンテ・アルバン 石碑 12 号, 石碑 13 号 (Flannery and Marcus 1983: Fig. 4.6)

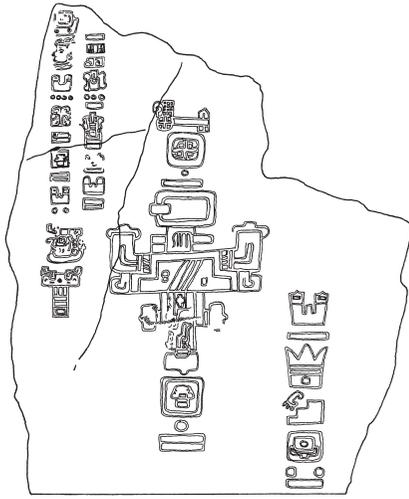


図4 モンテ・アルバンII期 石板14号
(Caso 1965: Fig. 12)

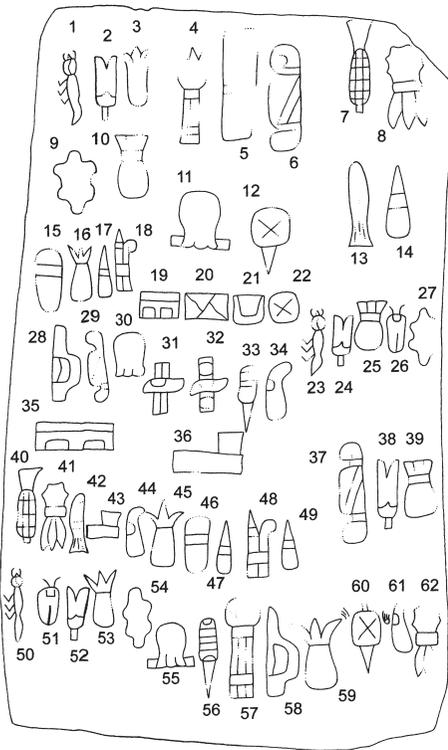


図5 カスカハル石塊(Rodríguez Martínez et al. 2006: Fig. 4)

モンテ・アルバンII期(紀元前150/100年～紀元後200年)になると、山を表わす記号の上部に地名を表わす文字があり、山の下には逆さにつけられた人の頭がみられ、その周辺に文字が刻まれる形式の石板が一般的になる(図4)。それが70あまりある。モンテ・アルバンがその周辺の町を征服した記録と思われる。このように、周辺の町を征服したことを記録したに違いない石板が最初にみられる。

ところが最近、メソアメリカ最古の文明で、メソアメリカの母なる文明と呼ばれているオルメカ文明が栄えた地に、さらに原初的な文字を刻んだ碑が発見された。オルメカ文明は紀元前12世紀頃より、テワンテペック地峡のメキシコ湾岸低地で栄えた文明だが、文字をまだもたない文明と考えられていた。カスカハル石塊(Cascajal block)と名づけられた石には、見慣れない文字が62もしるされている(図5)。

紀元前後に、現在ミヘ・ソケ文字、または湾岸低地帯の文字、イスマス(地峡)文字など、いろいろな呼び方がされている文字が発展していくが、それはオルメカ文明が減んだ後と考えられていた。もっとも長いテキストであるラ・モハーラの石碑1号には、500あまりの文字が刻まれている。長期暦があることで、156年に刻まれた碑文であることがわかる(図6)。それ以前の文字テキストは、

いずれも断片的で、中でももっとも古い日付を刻むのがチアパ・デ・コルソの石碑2号である(図7)。紀元前36年をしるすものだが、それ以前に文字があるかどうかは不明であった。それがここに示したような文字が刻まれていたことから、ずっと以前から文字使用の歴史があったことがわかった。その年代はまだ確かではないが、紀元前900年頃と推定されている(Rodríguez Martínez et al. 2006)。もしそうなら、それがメソアメリカ最古の文字ということになる。

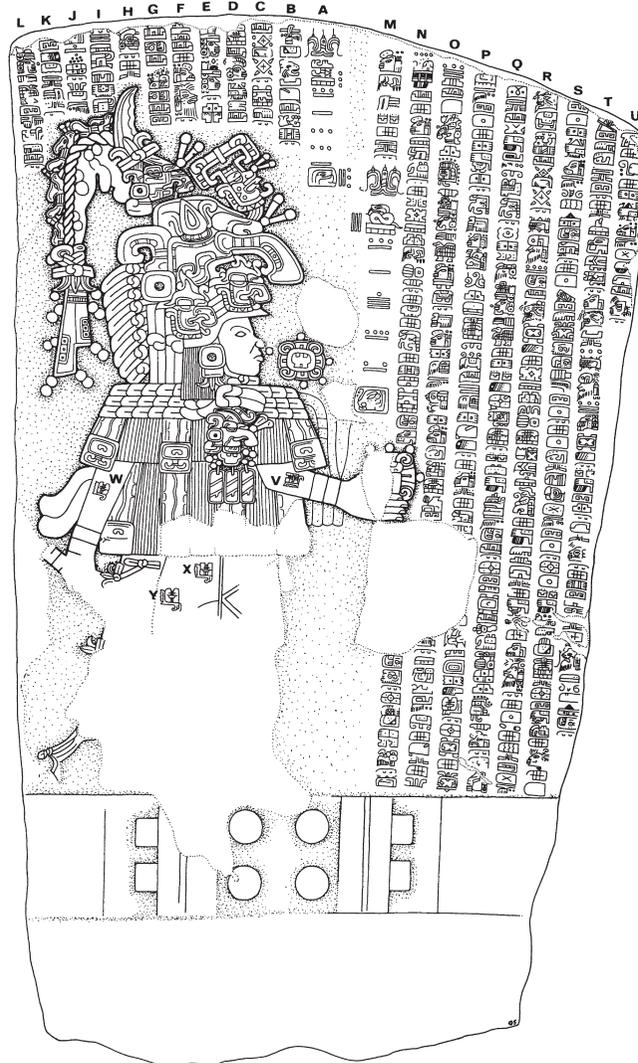


図6 ラ・モハーラの石碑1号 (Winfield 1988: Fig. 7)

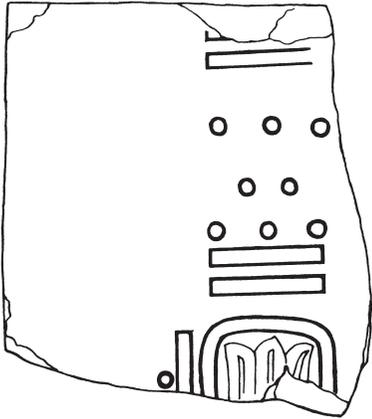


図7 チアパ・デ・コロソの石碑2号 (Coe 1976: Fig. 3)

これが征服の記録かどうか分からないが、興味深いのは、文字と思われる記号の大きさが一定でないことである。図5には虫のような図形が二つあるが(1, 23, 50と26, 51), それ以外はいずれも抽象的な形であり、何を表わしているのか即座にわからない。しかし同じ形(文字)が繰り返し現れるので、何らかの形で言語を反映していることがわかる。形の不揃いは、まるで甲骨文字を見ているようである。

それからだいぶ後に作られたラ・モハーラの石碑1号やトゥシュトラの小像(162年)には、たくさんの文字が刻まれており、文字の解読は

まだできないものの、名前を表わす文字や即位などの動詞を表わす文字があることや文字の運用法などがわかってきている。それらの文字と同じ文字はカスカハルの石塊にはないが、その幾何的な文字の形は何か似たものを感じることができる。

マヤ文字の場合は、解読が進んでいるお蔭で、歴史を刻むために文字が用いられたことがはっきりわかっている。これまで見つかった最古の日を刻むのは、ティカ

ルの石碑29号(292年)である(図8)。暦が刻まれているということは、歴史上のある一点を指定することである。それはマヤ人にとって歴史上重要なことが起こった日、すなわち、王の誕生や即位、結婚、征服、死などであり、石碑には、それらを表わす文字が暦の文字のあとにしるされる。

おそらくマヤ人は、マヤの西のオアハカ高地や沿岸低地帯に住む文字をもっていた人々と接触して、文字という概念を獲得したに違いない。その時期はちょうど日本が漢字と接触した時期とほぼ同じか、それより少し前と考えられる。

日本では、よく知られているように、「漢委奴国王」という金印が、光武帝から中元2(西暦57)年に受けた印綬に当たるものだと言われている。また8年から23年の新王朝時代に王莽によって鑄造さ

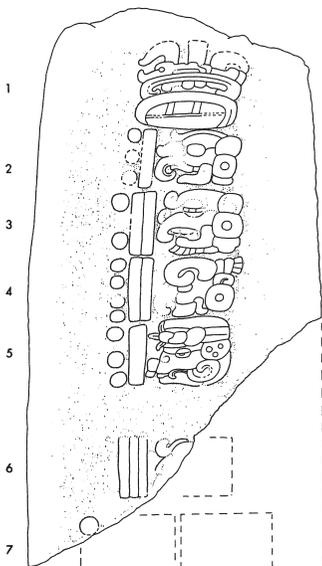


図8 ティカル石碑29号 (Jones and Satterthwaite 1982: Fig. 49)

れた「貨泉」が、弥生式の中期古墳から出土している。天理市櫛本の東大寺山古墳から発掘された「漢中平紀年命太刀」は184年から189年の中平のものである。こうしたものから、1～2世紀には、漢字文化が日本に流入していたことは確かである。石上神社の「七支刀」や、『古事記』や『日本書紀』にある阿直伎や王仁が典籍を百済からもたらしたという記述から、4世紀から5世紀はじめにかけて、漢字が理解できるようになってきたことがわかる。しかしながら漢字を学び、それが使えるようになるのは6世紀以後のことのようである（小松茂美1968; 林史典編2005等）。

これに対し、マヤ人は、西の人が使っていた文字に刺激を受けて、独自の文字を3世紀以前にすでに作っている。この違いは何だろう。日本の場合、海という、継続的な接触を妨げるものがあつたからだろうか。7世紀になると、いよいよ日本語を漢字で表わす万葉仮名のもとともいえる音借用が盛んになる。その頃マヤ文字は全盛期を迎える。そして9世紀の末から10世紀にかけて、仮名が発達して日本語が自由に書けるようになった頃、マヤ文明は衰退して、石碑に文字が刻まれなくなる。

メソアメリカには、そのほか、ニューネ、コツマルワパ、タヒンなど、たくさん異なる文字があるが、最後の文字は、アステカ文字である。これはアステカの東で展開したミシュテカの絵文書の文字伝統を受けついでいる。彼らは暦の文字の他に、音節文字やよく知られた表語文字を使って、地名や人名をしるした。図9はアステカ（メシカ）族が放浪の末テノチティトランにやってきた歴史をしるした絵文書の最初の部

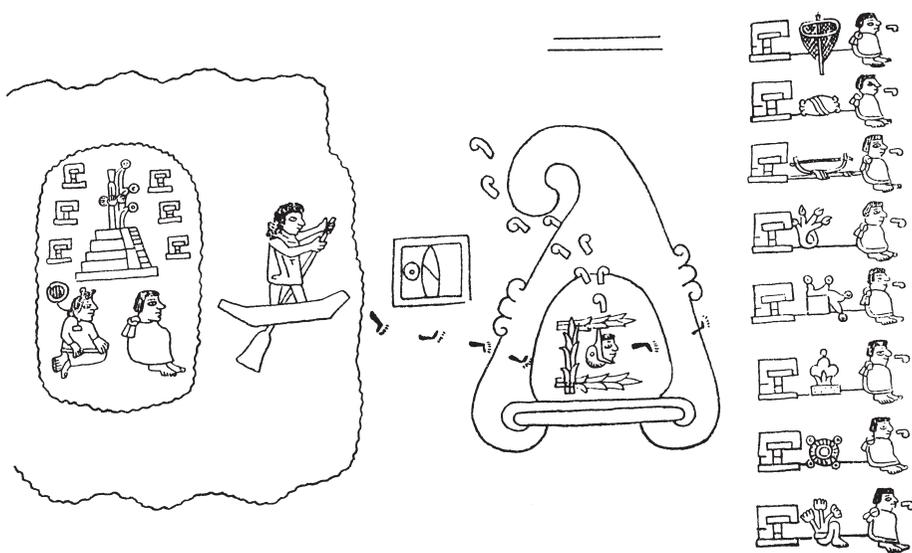


図9 アステカ「巡礼絵巻」(Calnek 1978: Fig. 4)



tochtli



tochtlan



tochpan

図 10 アステカ文字
(八杉2001: Fig. 28)

分である。

アステカ文字もマヤ文字と同じように、表語文字と表音文字を使った。文字の運用としては当たり前で、文字で表わしたいものを表音文字で表わすのは、当然のことである。図 10 では、ウサギの文字がある。それが Tochtli (ウサギ) を表わすことは自明である。この文字が、「ティソックの石」では、地名を表わす文字として用いられている。しかし、それだけではトチトラン Tochtlan という地名なのか、トチパン Tochpan という地名なのか曖昧である。そのため、-tlan や -pan を表わす文字を添えてはっきりさせるようになった。

マヤ文字の例を挙げてみよう。図 11 はカワックという 260 日暦の 1 日を表わす文字である。その場合通常カマエがつく。しかしカワックの文字だけでも日を表わすことができた。これに ni という音節文字をつけると、トゥン tun となる。おそらく tun の最後の -n を表わすためにつけたものと思われる。それは一見不思議な工夫のように思われるが、「行く」「行く」という場合を考えてみればわかる。二つの区別は、送り仮名によっており、その前の「行」という字の読みが送り仮名で確定する。それと同じである。つまり ni という文字は、音声補助符または音声決定符の役目を果たすもので、送り仮名もそうだとすることができる。ちなみに、カワックの文字は音節文字としてク ku も表わす。

曖昧な表現をより確実に読まれるよう工夫する例は、日本語にもある。送り仮名もそうであるし、いわゆる万葉仮名表記など、初期の書記法にはたくさん例がある。

にぎたつにふなのりせむとつきまてばしほもかなひぬいまはこぎいでな
熟田津尔船乗世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝乞菜 (巻 1, 8)

万葉仮名を平仮名に直すと、「熟田津に船乗せむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎいでな」となり、ほほいまの漢字仮名交じりに近い表記になる。

しかしまったく送り仮名をつけない表記法も許されていた。

こひするにしにするものにあらませばわがみはちたびしにかへらまし
戀為死為物有者我身千遍死反 (巻 11, 2390)

「恋をすると死ぬものであるなら、私の身は千たびも死んでは生き返ることであろう」。「る」「に」など、活用語尾や助詞を補わないと日本語にすることはできない。とても我々素人にはルビなくしては読めないものである。そのため不完全表記法といっている。

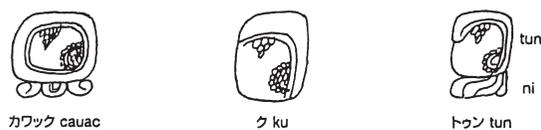


図 11 マヤ文字 トゥンとカワック (八杉 2003a: Fig. 10)

一方次の句は、一字一音節で書かれていて、一見完全表記法にみえる。しかし、多麻河泊が多摩川であるとは、研究者でなくてはわからないであろう。

なまがはにさらすてづくりさらさらになにそこのこのここだかなしき (巻 14, 3373)

「多摩川に手づくりの布をさらすが、そのように何でこの上もなくこの児が可愛く恋しいのであろうか」(久松 1976; 佐竹・木下・小島 1963)

一般に完全表記といわれる表記法でも、アクセントやイントネーションなどはしるされることがない。日本語や中国語のように、高低の区別をする言語では、声調は大切な要素にもかかわらず、ふつうしるされない。英語にしても、アクセントの落ちる位置が不規則だから、いちいち知らなければ正しく読めない。スペイン語のように、最後の母音に規則的にアクセントがおかれる以外はすべてアクセント記号がつけられるようになっていたら問題ない。しかし英語では、不規則きわまりないアクセントがしるされることはない。だから完全表記と思っているものも、言語表記という観点からみると、決して完全に言語音が復元できる表記ではない。文字による表記は、読めて意味が理解できればこと足りるものである。理解できる人の間では不完全表記でも十分であるが、場所を超え、時を超えて文脈が理解できない人の間では、理解できるように工夫することが必要になってくるわけである。

日本語では、漢字で書くことも仮名で書くこともできる場合がたくさんある。万葉仮名で、花や人を「波奈」や「比登」と書いたのと同じように、マヤ文字でも表語文字の代わりに音節文字で語を表わすことができた。図 12 は楯 **pakal** という語を表わす文字である。これは漢字に当たる。これを音節文字で **pa-ka-la** と書いたものが図 12 の 2 の文字である。楯という漢字を「たて」と書いたようなものである。楯を表わす語はそのほかにもあるので、図 12 の 1 では、楯を表わす文字が **pakal** と間違いなく読まれるように、**la** という決定詞を下に添えたと考えられる。それは送り仮名と同じ原理である。ちなみに楯の文字だけで、**la** という決定詞がない場合も許される。

最近は少なくなったが、我々は原稿用紙の升目を字で埋めていた。四角な升目のなかに文字を取めるという気持ちは、コンピュータが普及した現代でも、たぶん続いて

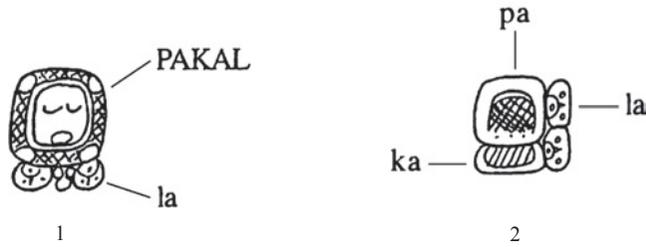


図12 パカル (八杉 2005: p. 64)

いるのではなからうか。同じように、マヤ人も四角な升目のなかに文字を刻んでいた。ところがパカルという音節文字で書かれた文字（厳密には文字素）の一つ一つを見ると、文字の大きさが異なる。また一つ一つが独立しておらず、つながっている。仮名は、現在は大きさが同じで、それぞれ独立して書くが、以前は、いくつかをつなげて書いていたし、大きさも異なっていた。たとえば「耳」から作られた「に」は、「可」から作られた「か」の何倍も長い文字だった。こうしたところにも、仮名とマヤ文字の似通いを感じ取ることができる。

アステカ文字でも音節文字だけで地名を書いた例がある。たとえば図13に示したように、読み通りに書いた例のほか、順序を無視したかのような例もある。先のトチパンの例にしても、トチトランを上から下に読んだのなら、パンの方を先に読みそうだが、そうではない。あとにつけるのは、-pan というのが地名につく接尾辞であるこ

とをみんな知っているからである。pan-te-tlan-te と順番に読まず、Tetepantlan であることは、我々にとっては理解しがたいことであるが、彼らにとっては別に問題なかったはずである。

文字による表現から絵による表現への移行

ふつう文字は、絵から徐々に文字に移行する。これが世界の常識である。しかし中米の文字のなかには、その逆をいった文字体系があった。

オアハカ盆地には紀元前6世紀頃より、文字が生まれたことはすでに述べた。最初は、図1や図2に見るように、「踊る人」と名づけられた人物像の体やその前後に数個の文字がしるされた。しかし紀元前150年

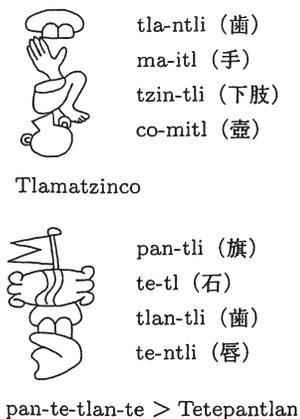


図13 アステカ音節文字 (八杉 2001: Fig. 28)

頃から始まるモンテ・アルバン II 期になると、長い文字列がみられるようになった(図4)。モンテ・アルバン III 期では、それほど長い文字テキストはないが、それでも文字列が人物像の前後にみられる。ところがモンテ・アルバン IV 期(700/750年～950/1000年)になると、文字で伝えるより、絵でもって伝えるようになる。

ここで挙げた石板は、サアチラとキラパンという町の間にあるノリエガの墓で見つかったものである(図14)。3つの場面からなるが、真ん中の左では、「2の水」の女性が「2の壺」という子供を生み、その子が成長し、上の段で成人式を迎えたこ



図14 ノリエガ石板 (Flannery and Marcus 1983: Fig. 7.5)

とが絵からわかる。それぞれの人物には数字と260日暦を構成する20の日の文字がつけられていて、それらが人物の生まれた日であり、人物の名前を表わしている。のちのミシュテカ絵文書と同じ手法である。子供の前に座る上段左と中段右の男性は同一人物であり、おそらく父親と思われる。下段は、通常は石板の上部に描かれる天の怪物の口であり、その両側に人物が描かれている。天の怪物の口の下にある丘の図柄とその両側にあるワニは場所を表わしている。全体でおそらく出身地の祖先を表わすものであろう。このように、絵から伝えたい情報が読み取れるようになる。

その後はサポテカ文明の栄えたすぐ西でミシュテカ文明が栄える。伝達手段は、石板ではなく、絵文書が主流になる(図15)。そこでは、260日暦と年をしるす暦の文



図15 セルデン絵文書11頁 (Caso 1964)

字以外、文字はほとんどなくなる。生まれた日で名前を表わすのが習慣であったので、人物像に結びつけられた260日暦の日が名前となる。さらにかぶり物や服装など、その人物に特徴的な飾りが、あだ名のような役目を果たした。結婚とか誕生とか戦争とか死とかの重要な出来事は、絵でもって表わされている。たとえば結婚は、男女が向かい合っている絵で表わされる。その後何人かの人物が描かれることがあるが、それらは結婚によって生まれた子供たちを表わす。ちなみに、例に挙げた『セルデン絵文書』の読み方は、左下から右に行き、上に進み、左にと、ガイドラインに従って、いわば牛耕式に読んでいく。

このように絵でもって歴史をしるすようになった理由は、おそらく多言語社会であったからだと考えられる。サポテカ文明はサポテカ語、ミシュテカ文明はミシュテカ語を話す人がその担い手であったが、ひと言でサポテカ語やミシュテカ語といっても、マヤ諸語と同じく、たくさんの言語（方言）から成り立っており、それぞれが通じない言語である。さらに、その周辺には、イシュカテコ語、トゥリケ語、アムスゴ語、マサテコ語、ポポロカ語などの、同じオトマンゲ語族に属する言語であるが、まったく通じない言語がたくさん現在でも話されている。当時でも状況はほとんどかわらなかったと思われる。だから言語に直接結びつく文字よりも、どの言語でも意味が理解できる絵による表現の方が効果的であったと思われる。表わされることが理解できなければ、書いたことにならない。書くことが無に帰すわけで、それは読まれることが本質の文字と同じである。

このようにサポテカ文明やミシュテカ文明が栄えたメキシコ高原では、時代が進むとともに、文字による伝達から、絵による伝達に変わっていった。それは文字の「常識」に反する例といえるであろう。

文字をもたない文明から文字をもつ文明への影響

紀元前後から7世紀にかけて、メキシコ市の北約50キロメートルのところにテオティワカンと呼ばれる大都市が栄えた。その文明は主に都市計画に精力を捧げたようで、「太陽のピラミッド」や「月のピラミッド」などの巨大な建築物をこしらえた。都市の真ん中には「死者の通り」と名づけられた巨大な通りが2キロ以上南北に走っており、その周辺には集合住居がたくさんあった。都市の人口は20万人と推定されている。その巨大都市の影響力は、メソアメリカ各地に及んだ。それは、たとえばベラクルス州のマラカタンやグアテマラ高地のカミナルフユ、太平洋岸のティキサテなどに、テオティワカン様式で作られた土器や建築などがみられることから裏づけられ

る。マヤの中心地のティカルやコパンなどにも、テオティワカン様式の土器や建築などがみられ、マヤも多大な影響をテオティワカンから受けていることがわかっている。ところがマヤは3世紀にはすでに文字をもち、歴史を刻み始めていた。一方テオティワカンには文字らしきものはあるが、マヤに比べると稚拙である（図16）。とてもマヤ文字に対抗できる文字体系とはいえない。ふつう文字をもった文化の方が優勢であり、文字をもたない文化に影響を与えるのだが、このように中米では4世紀頃より逆の現象がみられるのである。決して文字が文化的な優劣に結びつかないことを示している。

字形の変化

ものや概念を文字として成立させるためには何が必要であろうか。文字であるには、少なくとも図形的に他と区別できる特徴を備えていなければならない。文字は、「日」や「月」の文字の成り立ちを考えればわかるように、具体的なものを象ってできた象形文字をもとに発達したといわれている。しかし何をもとにしたのか、もとの形がわかる文字はそんなに多くはない。絵からできるのであれば、最初は複雑な形であったと想定できる。しかしそれを抽象化、単純化していかなければならない。そし



図16 テオティワカン文字 (Taube 2000: Fig. 10)

てそれに規則性をつけ加えなければ、文字として成立しない。文字テキストを見ればわかるように、言語を反映したものであるなら、必ず同じ形が繰り返し現れる。同じ形を再現できる規則性が必要なわけである。

さらに文字が確立したあとでの変化として、複雑な形から単純化した例がある。たとえば「藝」や「學」が「芸」や「学」にかわったことを挙げることができる。

しかし物事は単純な形から複雑な形へ、そしてまた単純な形へ循環的に変化しているように思われる。記録に現れた時点がたまたま複雑であった可能性もあるし、単純であった可能性もある。マヤ文字では、最古の日付をしるすティカルの石碑 29 号では、複雑な頭字体で暦の文字が書かれている (図 8)。しかし数字の方は、点と丸だけの単純な表記法である。ところがすぐ、暦の文字は単純な形の幾何体も用いられるようになった。数字は逆に頭字体という複雑な形が発明された。マヤ文明が成熟し始めた 6 世紀には、複雑な極みといわれる全身体が作られた。全身体の暦の文字をしるす最初の例であるヤシュチランのリンテル 48 号の日付は 526 年を刻んでいる (奉納日は 537 年と考えられる)。だから、少なくとも現存のマヤ文字を見る限り、文字の発展の歴史は、複雑な形から単純な形への変化、または逆の単純な形から複雑な形へ変化をたどるとはいえないことがわかる。

単純な字形と複雑な字形

日本の文字は漢字と仮名の混合体系である。形から見ると複雑な漢字と単純な仮名が共存しているようにみえるが、機能的には、意味をもつ漢字と音を表わすだけの仮名の二つが共存しているのであり、役目の違いが文字の違いになって現れている。ところがマヤ文字の場合、頭字体と幾何体というまったく同価の異体字が共存する。さらに日本の文字体系と同じように、意味を表わす表語文字と、音だけしか表わさない表音文字の両方が使われている。しかし漢字と仮名のように、字形が異なることはなく、同じ字形の文字が、あるときには表語文字として、またあるときには表音文字として使われている。それは楔形文字と同じである。その点で漢字と仮名という 2 種類の異なる体系の文字を交ぜて使う日本語の表記法は珍しい。しかし、読みという観点からみると、役目の違いで字形を変えているために、容易に意味がとれる日本の文字体系は、実にすばらしいといえるだろう。

漢字と仮名は表語文字と表音文字であり、その点ではマヤ文字体系と同じだが、頭字体と幾何体という同価でありながら形がまったく異なる文字が同じテキストに同時に現れるというのは、日本語の書記体系にはみられないものである。頭字体と幾何体

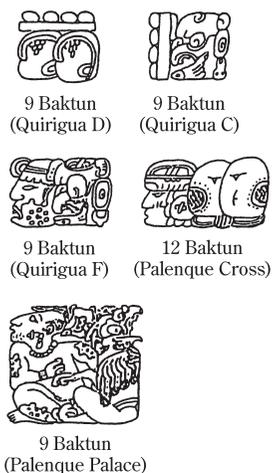


図17 頭字体と幾何体と全身体 (八杉2004: Fig. 1)

の違いに近い例を強いて挙げれば、繁体と簡体がある。たとえば、「藝」と「芸」、「廣」と「広」のような文字は、同価の繁体と簡体の例だが、同じテキストに生起することは、固有名詞を除いて許されない。歴史的にみて、古い、新しいという違いがある文字であり、同じテキストに出ることはない。ところが、マヤ文字の場合は、それらの文字を、同じテキストで、区別なく用いる。マヤ文字では、頭字体と幾何体が、あたかも同じ表現を避けるがごとく、同じ文字を使うことを嫌って使われる。さらに繁体の極みともいえる全身体でも書く例がある。図17では、9バクトゥンと12バクトゥンという期間を表わす文字を、頭字体、幾何体、全身体の3つの異なる字体で書いた例を挙げた(図17)。3つの同価の字体が、おそらく美的な見地から、自由に使われたのである。

日本の表記体系でそれに近いものを挙げると、いわゆる万葉仮名であろう。たとえば、「か」を表わす文字として「可」「加」「架」「香」「河」「歌」など、同じ音を表わす文字がたくさんあるうえに、「蚊」「鹿」のような訓読みによる漢字使用もあり、複雑さを増している。同じ漢字であるから、どれが音読みでどれが訓読みか、我々素人にはとても判断できず、近づきたい文字体系となっている。

同じ文字を使わないことを「変字法」というそうだが、これもマヤ文字に例を見いだすことができる。「4」、「空」、「蛇」のいずれもカン(正確には kan/ka'an)と読まれる。

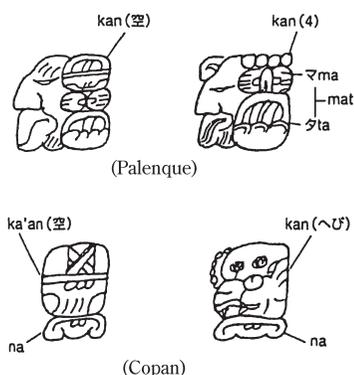


図18 変字法 (八杉2003a: Fig. 8; Fig. 9.3)

その音が同似であることを利用した交替だから、いわゆる音仮借といってもいい例である(図18)。

「木」の縦棒ははねると間違いだとか、「右」と「左」の文字に含まれる「ナ」の書き順がちがうことなどを学校で教わった。そうした教育の影響か、それとも活字の影響か、我々は、文字というものは、形の定まったものと思いがちである。しかし、文字とい

うものはもともと手書きだから、かなり自由

度の高いものであったはずである。2文字を1文字で表わしたり、文字の要素を上にも置いたり左に置いたりした文字を見ると、もっと自由な気持ちで文字に接してもよいであろう。

図19の1は、「着座する」という意味の文字と「年 (tun トゥン)」文字が1字ずつ書かれた例と、二つの文字が融合した例を挙げている。図19の2は、金剛オウムを表わす頭字体の左に黄色 (k'an カン) の文字がついているが、カンが目の中に入った文字が右の文字である。図19の3の左は、カンの文字を k'an-na とあたかも送り仮名をつけたような形で書いたもので、右の文字はカンをトゥンの中に取り込んだ例である。左右どちらの文字も同価である (図19)。

漢字で同じような例を挙げるとすると、2文字を1文字で書いた例として、麻呂を麿、久米を糸と書く例が思い浮かぶし、文字の要素をなかに取り込んだ例としては、鳥、嶋、寫といった異体字の漢字が挙げられる。嶋と寫は山という文字素が左と上にある例だが、峰と峯などもその例として挙げることができる。

頭字体と幾何体の交替には、何かユーモラスな感じを抱くことがある。視覚的な遊びであり、文字遊びに通じるものがある。万葉仮名でいうと、戯訓と呼ばれるものにも遊び心を感じることができる。たとえば、「色二山上復有山者」(万葉集9巻1787)を「いろにいでは」と読むそうだが、それは「出」が山の上に山を置いた文字であるところから「山上復有山」と書いて表わしている。また、二二、二五、十六、八十一では、かけ算の九九を利用した読み方をしている。視覚的な遊びやことば遊びを文字に反映させた例を見ると、文字というのは、視覚に訴えるものであることがよくわかる。そうした伝統が続いているのであろうか。我が国で作られた峠とか辻、鱈、鱈などの国字や、王にキングというルビを振ったり、視覚的にも楽しいいろいろな工夫がみられる。最近感心したものに、葬儀屋の電話番号に081059というルビを振ったものがあつた。

線形に書かれてあっても線形に読まない

文字というのは言語の線状性にあわせて、線形に書かれている。ところが書かれた

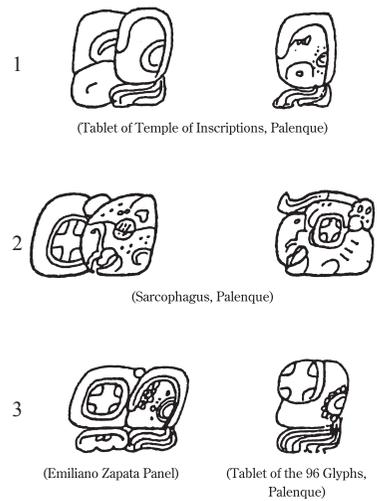


図19 文字の単位 (八杉 2003a: Fig. 11)

順番通りに読むとは限らない。たとえば、アステカ文字のところで示したように、pan-te-tlan-te と書かれていても Tetepantlan を表わすように、音を表わす音節文字にしても、そうである。

日本語の例を挙げると、先に挙げたように、「行う」と「行く」もそうである。「行」のうしろの「う」「く」を見て、前の読みを決めている。

英語の例も挙げてみよう。bow という語は [bóu] であったり [báu] であり、同字異音の異語である。これは文脈がないと読めない。

We play the violin with a bow. 「バイオリンは弓で弾く」

She made a bow to me. 「彼女は私におじぎをした」

このように、文字が書かれた順序どおりに、前から順に読んではおらず、一定の範囲を見て、後ろの語を参照したりして、意味を確かめつつ、すなわち、行きつ戻りつしながら読んでいる。言語を反映して線形に文字が並んでいるからといって、文字言語は、音声言語と同じように時間軸に沿って理解されるものではないのである。

文字の配列法、書字方向

日本語は現在縦書きにされたり横書きにされる。しかし横書きは新しい書き方で、ずっと縦書きであった。縦書きの場合は、右上端から一行ずつ上から下に向かって書かれた行が左に続いている。この書き方はヨーロッパ人には不思議だったようで、おもしろい話がある。キリスト教を日本に伝えたフランシスコ・シャビエル（ザビエル）の通訳であったアンジロウまたはヤジロウは、人間は頭が上にあって足が下にあるから、上から下へ書くのが当然だ、とシャビエルに説明したそうである（土井 1977: 27）。

横書きのときは左上から右端までくると、次の行がその下に続くようになっている。文字は一列に上から下、左から右に書かれていく。ところが、世界の文字には、先ほどミシュテカの絵文書で見たように、左端まで行くと、折り返して右に向かうという牛が畑を耕すような牛耕式の書き方や「ファイストスの円盤」にみられる渦巻き式の外側から内側に向かう書字方向もある。かわったところでは、下から上に書かれるティファナグ文字がある。これは岩壁に文字を下から書き始めて手の届くところまで書いて、次にまた下から書き始めるために起こる書き方だそうである（矢島 1977: 200）。いずれも線状に並んでいる。ところがマヤの書字方向はかわっている。2行を対に左右、左右と上から下へ行く書き方である。こんな不思議な書き方をする例は他にはない。おそらく最初は縦1行に大きな文字で書いていく伝統があったのであろう。しかし、たくさん文字を書く必要があると、どうしても文字を小さくして詰めた

なければならない。その場合、中間から1行を縦2分割した。それを縦1行ずつ読む方法があるが、マヤ人は左右と読んでいった。分割される前の大きな1字1字の段のほうが優先されたものと思われる。2行を対に上から下へ書き、そして読む方式は、とても強い原則となり、たとえば、3行4段のものであれば、まず2行を対に上から下に読み、最後の行は上から下に読むということになった(図20)。

一つに地域に多様な文字体系

中米の文化的中心地であるメソアメリカには、サポテカ文字、マヤ文字、アステカ文字、湾岸低地(ソケ)文字等まったく異なる文字がたくさんあった。一見して系統がたどれないほど、各文字体系は異なる。一つの文化領域に、これほど異なる文字があるということは、世界史的にみても珍しいのではなかろうか。

資料的に長文を刻む湾岸低地文字とマヤ文字を比べてみよう。湾岸低地文字は、いまだにどのように呼んでよいのか、一致した意見がない文字体系であり、湾岸低地文字とかミヘ・ソケ文字、ソケ文字、後オルメカ文字など、いくつかの呼び名があるが、ここでは湾岸低地文字ということにしよう。その一帯で話されているのは、ソケ語とその類縁関係にあるシエラ・ポボルカ語、オルータ・ポボルカ語、サユーラ・ポボルカ語であり、その中でソケ語がもっとも広く分布し、人口も多い。ソケ文字というの

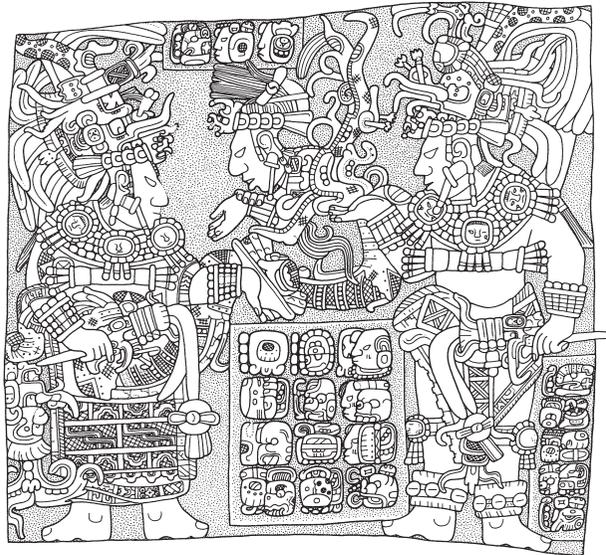


図20 読み順 ヤシュチランのリンテル14号 (Graham and von Ew 1977)

は、そのソケ語にちなんだ名だが、現在話されているソケ語と文字資料との時代的な差が2000年ほどあり、また十分に解読されていないので、言語と結びつけて、文字体系を呼ぶことは慎みたい。いくつかの文字とマヤ文字の比較から、ソケ語の先祖が残した文字の可能性が高いが、面倒でも湾岸低地文字ということにしておく。

先にふれたように、最近紀元前900年と推定された石塊が発見されたが、もしその年代が本当なら、3000年近く前からしるされていた文字ということになる。たいへん幾何的な文字であり、マヤ文字との類似性は少ない。それでもいくつかの文字にマヤ文字と似た文字が見られる。また彼らが使っていた長期暦は、マヤ人が292年から909年までの間に使った長期暦と同じ原理、構造をしたものであり、マヤ人が彼らから受けついだことは間違いない。マヤ文字以前に発達した文字であり、マヤ文字に影響を与えた文字ということが出来るが、それにはマヤ文字と湾岸低地文字の形があまりに違いすぎる。文字という観念をマヤ人は湾岸低地文字から知って独自に文字を作り出していったと想像する以外にない。

メソアメリカの文字状況とまったく逆が漢字文明圏である。周辺諸国の言語は中国語とは異なるが、漢字が共通の文字として機能していた。漢字を使った文の内容が理解できたし、理解される文も書くこともできたのは、漢字が表語文字であったからだろう。それから推測すると、メソアメリカの文字は、他の言語には置き換えできないほど言語に密着したものではなかったかと考えられる。表意性の少ない文字ということになる。しかしマヤ文字は、日本の文字体系と同じように、表語文字と表音文字の混合体系と考えられている。そうすると、他の言語に利用できないほど、言語と強く結びついていたと考えるべきではなかろうか。

260日暦はメソアメリカ全域に用いられた宗教暦で、仕組みは共通している。13の数字と20の日からなる260日が1周期の暦である。しかしそれを構成する20の日の呼び名は言語により異なっている。文字も、マヤ文字とメキシコ中央高原の文字はまったく異なる。しかし中央高原の20の日の文字は共通点が多く、たとえばミシュテカの絵文書とアステカの絵文書には、同じ文字で表わされた日がたくさんある。この場合は漢字と同じように、同じ文字が言語ごとに違った読み方がなされていたに違いない。

まとめ

ここでは文字の常識とされるものがいかに旧大陸の文字体系に基づいた論であるかを示した。(1) 文字はすべて表音文字に進化、(2) 絵による表現から文字による表現

への移行, (3) 文字をもつ文明から文字をもたない文明へ影響, というこれまでの常識に反する例が中米の文字にあることを述べた。さらに, (4) 字形の変化, (5) 単純な形と複雑な形の共存, (6) 音声言語と文字言語の違い, (7) 一つの地域に多様な文字体系ということについても述べた。

一般的には複雑形から単純な形に変化していくものと思われているが, 中米の文字でなくても, 逆の例はたくさんある。単純な形と複雑な形の共存というのも, 一般的にあり得ることだが, 文字体系で考えると, マヤ文字のような, 幾何体と頭字体, さらには複雑な文字の極みともいえる全身の三つの等価な字体が共存する例は珍しいといえるだろう。また一つの文化地域に多様な文字体系があるということも, メソアメリカの特徴として挙げることができる。そうしたこれまでの常識に反する例をたくさんもつ中米の文字体系を基礎に, これから文字にまつわるさまざまな問題を考えていくことにしたい。

3 アルファベットの無理

1987年, グアテマラで, 土着の人々であるインディヘナの諸言語の正書法が, なんと法律で定められた。グアテマラには, インディヘナ言語が22ある。そのうち20がマヤ諸語であり, 残り二つは, ガリフナ語とシンカ語というマヤとはまったく系統の異なる言語である。それらの言語をアルファベットで書きしるすための文字が法律で定められたのである。1960年にゲリラと政府軍の戦いが始まり, 1980年代の初頭には政府軍によって民族大量虐殺が起こったが, そのあとに生まれた民族意識の復興運動の一つが, この正書法の制定である。

法律で定められたということは, 厳密に言えば, それ以外の書記法を使うと法律違反となる。ところが人名や地名はいまだに以前のままである。具体的にいうと, それまではスペイン語の表記法に則って, 地名や人名は書かれていた。スペイン語の正書法を特徴づける書き方に, カキクケコの表記がある。ca, qui, cu, que, co と i と e の前の k 音が qu- で書かれる。それを人名や地名は踏襲している。たとえば, グアテマラの第2の都市ケサルテナンゴ Quezaltenango の冒頭部分の que は ke である。さらにもう一つ例を挙げると, w の音の表記がある。スペイン語で w の文字が使われることは借用語以外にはなく, w はふつう u または v で表わされる。インディヘナのことばによくみられる w の音は, それに加えて, hu または gu という書き方がされてきた。それが地名の表記にそのまま受け継がれている。たとえば, ウェウエテナンゴ

Huehuetenango というグアテマラの第3の都市の名前にみられる hue という綴り字は、we を表わしている。ウェウエテナンゴのすぐ東にある町 Aguacatan の gua も wa を表わす。新しい表記法に従うと、Kesaltenango と書かなければならないし、Wewetenango、Awakatan と書かなければならない。しかし国を支配しているのは、スペイン語を話すラディーノという非インディヘナの人々である。彼らにとって、Quezaltenango を Kesaltenango と直さなければならぬ理由は何もない。さらに人名となると、登録と人物同定という問題が生じてくる。だからおそらくそうした改綴を許すことはありえないだろう。

スペイン語の軀から逃れ、そしてそれを使う人々の支配に屈しないという象徴的な意味をもった正書法の改訂は、こうして大きな障害をもつことになった。

アルファベットは読めるか

アルファベットは表音文字であり、そのためアルファベットで書かれていると、読めると思っている人が多い。しかし先の Quezaltenango というのも、その読み方を知らないとクエザルテナンゴと読んでしまうかもしれない。実際、訳本でそのように書かれているのを見て驚いたことがある。

「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言ひ」という有名な川柳があるが、アルファベットで書かれていても、正確には読めないことがたくさんある。Albuquerque とか Tucson といった地名は知らなければ読めない。スペイン語を知っている人だったら、Albuquerque はアルバカーキとは読まず、アルブケルケと読むに違いない。その人達にとって、アルバカーキとは想像を絶する読みだろう。アメリカの大統領であったレーガンは最初リーガンと呼ばれていたが、レーガンと訂正された。Reagan という綴り字は、リーガンと読んで当然だったと思われる。

伊波普猷という有名な沖縄学者がいたが、ある時オランダから来た日本学者であったファン・ブレイメンさんにその名をどう読むのかと聞かれたことがあった³⁾。

文献ではどんな読み方なのかわからなくてもその漢字を書けばすむ。しかし漢字で書かれたものを、ブレイメンさんのように、アルファベットで書かなければならないときには、どうしても読みを知らなければならぬことになる。だから漢字はだめで、アルファベットにかえるとか、仮名書きにしろという意見が出てきた。しかし逆にアルファベットで書かれている場合でも、それを日本語に直すとなると、どう読むかを知らなければ、仮名で書けない。先の Albuquerque や Brigham Young など、知らなければ読めないのであり、仮名書きができない。もしアルブケルケとかブライア

ム・ヤングと仮名書きすると、きつとどこかわからない人が出るだろうし、知っている人だと間違いだと文句を言うかもしれない。ということは、漢字とあまりかわらない。要するに文字というものは、表音文字であろうと、読み方を知らなければ、読めないということなのである。

アルファベットの限界

マヤのユカテコ語では、たとえば、kan は蛇であり、k'an は黄色を意味する。k にアポストロフィがついた k' は声門閉鎖音を表わす。日本語では、k と g の違い、マヤのことばでは、k と k' の違いが、この二つの語の違いといえる。このように語を区別する最小の音のことを音素という。この区別ができる文字があればよいが、アルファベットは 26 文字しかない。それを超えると、いろいろやりくりして表わさなければならなくなる。

日本語の音素については、人により解釈に差があつて、ここに挙げた音素表とは異なる表ができるかと思うが、参考までに東京方言の音素を挙げておく（早田輝洋 2005: 4）。特殊音素をのぞくと、子音は 14、母音は 5 つ、長母音を数に入れても 24 にしかならない。音素の数は少ない方といえる。だから、十分アルファベットで書きしるすことができる。

表 2 日本語（東京方言）

p	t	k	
b	d	g	
	s		h
	z		
m	n	(ŋ)	
	r		
w	j(=y)		
i	e	a	o u

特殊音素 H（長音） Q（促音） N（撥音） J（2重母音音素の第2要素）

日本語は、子音と母音を組み合わせた単純な音節構造だから、短い語で表現しようと思えば、同音異義語がたくさん生まれることになる。それを避けようと思えば、長い語にならざるを得ない。だから漢字を使うのだが、これについては 4～5 章で扱うことにしたい。

ところが世界には、アルファベットの文字数である 26 よりはるかに多い音素をもつ言語がたくさんある。音素数をもっとも多い言語は、アフリカのコイサン諸語のクン語 !Xū で、141 も音素があるという。そうすると、1 音素を表わすために、いくつかの子音字母をつなげて表わしたり、いろいろな記号をもってきて音を区別して表わ

さなければならなくなる。[dtsh] とか [dkxʰ], [ɔqh] とか [ʌn] とか書かれていても、誰も読めないし、とてもキーボードでもって簡単に表わすことなどできないことになる。

一方もっとも少ないのは 11 音素で、ニューギニアのブーゲンビル島で話されているロトカス語 Rotokas とアマゾンのムラ・ピラハン語 Mura-Pirahã だそうだが、ふつうは 20 から 37 である (Maddieson 1984; Snyman 1970; Firchow and Firchow 1969; Sheldon 1974)。

マヤには現在 30 の言語があるが、子音は 20 から 28、母音は 5 (長短の区別なし) から 12 (中舌音の存在と長短の区別) である (Yasugi 1995)。同じマヤの言語といっても、これだけ差がある。

ともかくも、26 のアルファベットや記号をやりくりすることで、何とかどんな聞き慣れない音でも表わすことができる。しかしアルファベットの連続で書き表わされた音は、クン語の例でわかるように、どんな音なのか想像もつかないものとなりかねない。これではいくら表音文字で表わされているといっても、表音文字の役目を果たすとはいえないだろう。

歴史的な表記法が確立しているところの問題

表3では、マヤ諸語の中からユカテコ語を選んでみた。ユカテコ語は、メキシコのユカタン半島で話されている言語であり、80万人ほどの話者をもつ。16世紀にスペイン人の修道士達により書き方が定められ、その伝統が19世紀まで続いた。その伝統表記法も併せてしるす。括弧にあるのは、アメリカ言語学会が用いる1音素1表記の字母である。

表3 ユカテコ語

p	t	tz(ɛ)	ch(č)	k
p'	t'	tz'(ɛ')	ch'(č')	k' '(?)
b'				
	s	x(š)		h
m	n			
	l			
w	y			
i	e	a	o	u ii ee aa oo uu

古典ユカテコマヤ語

p	t	tz	ch	c
pp	th/th	ɔ	chh/ch	k
b				
	s/z/ç	x		h/h
m	n			
	l			
v/u	y			
i	e	a	o	u

地名や人名は伝統的な表記法に従っている。だからたとえば *Acanceh* と書かれていると、アカンセーではなく、アカンケフでなければならないし、19世紀に採用された *dz* は *tz'* であるので、*Dzibilchaltun* はヅィビルチャルトンではなく、ツイビルチャルトンと書かなければならない。ツの声門閉鎖音は仮名では表わしようがないので、それをヅと書いてもよいが、そうすると、すべての声門閉鎖音は、濁音表記にしなければ体系的にならない。*k'a* はガ、*k'i* はギ、*ch'a* はチャと書かねばならない。ところが、そうすると、*p*, *p'*, *b'* のところで行き詰まってしまう。*p'a* にバをあてはめると、*b'a* が表わしようなくなるからである。だから仮名表記の場合、私は、声門閉鎖音も清音も区別できないとあきらめて、同じ扱いにしているが、ガの濁点をたとえば丸点にして区別すると、より正確に声門閉鎖音と清音の区別は可能である。とはいえ丸点では、*pa* と *p'a* がどちらもパとなり、区別できない。そうすると、黒丸点とか三角点などを使って、新しい文字を作らなければならない。しかし、日本人向けにやっているのに、そんな新しい文字を作っても、誰も読めないのだから、単なる自己満足に過ぎないことになる。先に挙げた *Dzibilchaltun* をヅィビルチャルトンと書くのは、こうしたことに配慮した上でのものではなく、単に *dz* が、英語やドイツ語などに使われてきたアルファベットの「常識」として、ヅと読まれてきたのを利用したに過ぎないものである。かくのごとく、異なる言語間における音の表記は、いずれにしても大きな問題が生じるのがふつうである。

名前や地名は歴史的な表記法に従っている。新しい書き方では、声門閉鎖音は子音 + アポストロフィである。*p'* や *t'* などのように、アポストロフィのついた書き方で自分の名前を書くなんでいやだという人がいたが、確かに慣れ親しんだ自分の名前に ' のような記号が挟まるのは認めがたいに違いない。それも地名や人名を書き換えない理由の一つといえるかもしれない。

1980年にユカタンの言語学者のバレーラ・バスケスが、古典ユカテコ語のほぼすべてを網羅した辞書を出版した。それをコルデメックス辞典と称しているが、その書き方は表4のようになる (Barrera Vásquez 1980)。

表4 コルデメックス辞典

<i>p</i>	<i>t</i>	<i>ts</i>	<i>ch</i>	<i>k</i>
<i>p'</i>	<i>t'</i>	<i>ts'</i>	<i>ch'</i>	<i>k'</i> '
<i>b</i>				
	<i>s</i>	<i>x</i>	<i>h</i>	
<i>m</i>	<i>n</i>			
	<i>l</i>			
<i>w</i>		<i>y</i>		

これまでとの大きな違いは「ツ」の書き方である。tz とは書かず ts を採用している。そのため、たとえば、satsah は sat-sah であるにもかかわらず、サツァフととられかねない事態になった。tz を採用していれば、そのようなことにはならなかったのに残念である（八杉 1985b）。

このように一つの言語においても、歴史が長くなれば、いろいろな表記法がみられ、混乱が生じる原因となる。

通常のアルファベットにない文字を使わなければ表わしがたい音があることは、クン語や古典ユカテコ語の th, ɔ, ch などにみたが、『ポボル・ウーフ』や『カクチケル年代記』をしるした古典キチェ語や古典カクチケル語にもある。

表5 現代キチェ語, カクチケル語

p	t	tz	ch	k	q
b'	t'	tz'	ch'	k'	q' '
s		x		j	
m	n				
	l	r			
w	y				

古典キチェ語, 古典カクチケル語

p	t	tz	ch	k	q
b/pp/bb	tt	4,	4h	4	ε
		ç/z	x	h	
m	n				
	l	r/rr			
u/v/hu	i/y				

4, や 4h, 4, ε などは、アラビア語の文字を利用して、新しく作った文字である。その当時すべて手書きであったために何ら問題はなかった。印刷するにしても、そうした活字を作ればすむことである。しかし現代は、キーボードで入力するのがふつうだから、キーボードにない文字は、かなり問題があることになる。仮に入力が可能であったとしても、第一どのような音を表わしているのか、知らなければ読みようがない。

イシル語は、グアテマラの高地北部で話されている言語である。文字をもたない言語だったが、1960年代に書き方が定められた。それはスペイン語の表記法に則ったものであった。少しでもスペイン語に近い表記法にしたのは、スペイン語が読めれば、イシル語（やその他のインディヘナの言語）も簡単に読めるであろうという配慮であった。ところがその後、民族覚醒運動が盛んになり、その表記法は、支配者側への同化主義の象徴と見なされ、厳しく批判されることになった。そして1987年グアテマラ全体で統一表記法が定められ、表6のような書き方となった。人口は約14万

人で、3つある方言のうち、もっとも音素数の多いチャフル方言をここでは選んでみた。

表6 イシル語 (チャフル方言)

p	t	tz	tch	ch	tx	k	q		
b'	t'	tz'	tch'	ch'	tx'	k'	q' '		
	s		sh	xh	x		j		
m	n								
	l	r							
w	y								
i	e	a	o	u	ii	ee	aa	oo	uu

先に示したように、アメリカ言語学会で使われる音声表記は、原則的に1音素1文字である。たとえば「チャ」は子音のçと母音のaでçaと書く。その声門閉鎖音はçと書く。そうすると声門閉鎖音はçと2文字表記であり、複合音素ということになるが、清音と濁音の対立の関係から類推すると、声門閉鎖音は、清音に対応するものであるから、1音とみて差し支えないはずである。その見方からすると、アルファベット1文字で表わし得ないから2文字(記号)で表わしているということになる。

しかし1音素であっても、「ツtz~ts」や「チch」など、英語などでも2文字で書かれる。その例に従うと、舌先硬口蓋声門閉鎖音tch'などは4文字で表わされていて、とても1音素を表わすように見えないが、1音素が4文字で表わされていても、かまわないことになる。というより、それ以外に方法がないのかもしれない。しかし文字というのは、読むためにあるということから考えると、かなりつらい作業を強いられることになる。

bやd、gなどがキーボードにあるにもかかわらず、まったく利用しようとならないのは、それらの音が濁音を表わすと決めているからであろう。それらをマヤ諸語の場合、声門閉鎖音を表わす文字としても何ら問題ないはずである。それをしないのは、いかに既存の知識に引っ張られているかを示している。

英語にみるアルファベット

26文字で、6000を超すといわれる言語を表わそうとすることには限界がある。国際共通語や国際共通文字を作れという人がいる(たとえば野村1988)。エスペラント語のように世界語を目指した言語がある。とはいえエスペラント語にしてもヨーロッパの言語をもとにしたものであり、我々からみると、複数形などなくてもよいと思うが、そういうことがたくさんある。母語でない言語にはやはり限界がある。エスペラント語のように、どこにも偏しないという人工語の理想は高い。しかし残念ながら、

現在世界語となっているのは英語である。

英語がいろいろ問題多い言語であることは、音韻組織を取り挙げるところで少しふれる。文章でおかしいところもたくさんある。たとえば、疑問文にするとき、doを前に出して、Did John see Peter? とする。なぜ助動詞 do の過去形である did を前に出して、saw は現在形に戻して、最後に? をつけなければならないのだろうか。疑問文を作るのに助動詞の do を前置するなど、世界的に見てもたいへん珍しい(角田1991)。問題が多いことさえわかっておればいいのだが、英語が世界の基準と思っている人が多い。だいたい英語はかなり不規則な言語であるから、それを基準にすると、他の言語は皆おかしい言語という烙印を押されてしまう。

世界文字の理想も高い。これもほぼアルファベットが国際共通文字の役目を果たしている。しかしアルファベットで世界の言語を記述しようとすることは不可能に近い。言語学の世界では、実際にアルファベット万能といってもよいが、すでに述べたように、問題は多い。

なぜ一つに統一することを人間は求めるのだろうか。一つに統一しようとするから問題が起こる。多様な世界をどうして一つに統一しなければならないのか。その必要はないはずである。

さて問題が多いといった英語の音素は表7のようなものである。

表7 英語

p	t	ts	tʃ	k	
b	d	dz	dʒ	g	
f	θ	s	ʃ		h
v	ð	z	ʒ		
m	n				ŋ
l	r				
w		y			
i	ɪ	e	ɛ	æ	ə
		a	ɑ	ʌ	ɔ
					o
					U
					u

これも解釈の違いにより、少し異同がある。英語の母音は、数え方にもよるが、手元にある辞書では、/i/ や /i:/ の他に /ə:r/ や /au/, /ou/ など数にいられて、なんと30も挙げられている(『ジーニアス英和辞典』)。ここでは、その辞書のように長短の区別があるとみるのではなく、緊緩の違いとする解釈を取って13としておく(柴谷・影山・田守1981)。確かに、pull と pool, bit と beat では、口の開け方や緊張の仕方などが異なり、日本語のような長短でないことは確かである。どちらにしても英語の母音は、たいへん不規則というか、日本語やマヤ諸語に比べて非体系的である。世界では5母音体系が一番多いというのだから、日本語の方がまともであり、英語を基準にして論じてはいけないことが音の面からもわかるであろう。子音は日本語よりたくさん

の音素があるが、閉鎖音、摩擦音で日本語と同じように清濁の区別がある。これだけたくさん子音があるのに、26のアルファベットで語を書き表わさなければならないのだから、当然のことながら、とんでもない書き方がなされることが多くなる。アルファベットの数が、英語を表わすために必要な音の数よりはるかに少ないことも原因であろう。

表音文字の難読性と多読性

アルファベットは万能ではない。アルファベットで書かれていても、読めないことがあるし、表わせない音もある。そうした例をいくつか挙げたが、中米でいつも問題になる x と h についてふれておきたい。Mexico, Oaxaca, Taxco, Xochimilco などの地名に x は使われている。メキシコではメヒコであり、オアハカであり、x はハ行で読まれるのがふつうである。タスコのように x が s で読まれることもある。しかし16世紀にスペイン人がやってきたときには、x はシャ行の音であった。だからメシコであり、オアシャカ、タシュコと読んでいた。ところがスペイン語では、16世紀末から17世紀初頭にかけて、摩擦音のハ行にか変わったため、メヒコとかオアハカと読むようになった。スペイン語はそのように音韻変化したのだが、インディヘナのことはそのような音韻変化をしなかったので、x はそのままである。だからインディヘナの言語では必ずシャ、シ、シュ、シエ、ショと読まれる。先に挙げた地名はいずれもナワトル語起源のものだから、Xochimilco はショチミルコといった方がよいが、慣用の方が優先されると、タスコ同様、ソチミルコと読まなくてはならなくなる。さらに発音に合わせて、Mejico と書いたり、逆に Jalapa では、もとの伝統的な綴り字を尊重して、Xalapa と書き換えたりするので、知らないとき正しく読めないということになる。

h の文字もやっかいである。スペイン語に合わせて読まない文字としたり、aha と書いて、ア・アと発音する場合にみられるように、声門閉鎖を表わす文字として用いられったり、先にふれたように hua と書いて wa を表わす場合に用いられったり、ラテン語のように h をそのままハ行で読んだりするので、これまたそれぞれの事情を知らないと、読めないことになる（八杉 1990）。

このように、アルファベットであっても、それが使われている事情を知らないと読めないことがたくさんある。では同じ表音文字の仲間である仮名ではどうであろう。仮名は子音と母音を合わせた文字であり、アルファベットの基準からいうと、一段上の文字である。しかし意味をもたない文字のうちの一つであり、意味をもつことばを

表わそうとすれば、当然のことながら、それらを組み合わせなければならない。しかし一つ一つの字母は音が一定であり、アルファベットのようないろいろ読まれる可能性はない。その分優れているといえるかもしれない。もっとも日本語という1言語だけを問題にしたからであり、仮名を他言語に適用すると、たちまち新しい仮名を創出しなければならないといった問題や読めないといった問題が起こるのである。

文字は異空間の人への伝達ばかりでなく、言語を記録し、残すためにもある。時間を越えた伝達手段である。残るといことは歴史的な文書になるということである。言語は変化する。表音文字の得意な発音のままに書いておれば、100年も経てば、かなり変化しているのがふつうで、発音通りに読んで理解できない文書に出合うことになる。明治のはじめの仮名書き新聞を見てみよう。

ここに挙げた『まいにちひらかなしんぶん』は新潟県立文書館にあったものの一部である。引用は、明治6年11月18日、第205番の最初のところである。

表音文字であるところから、分かち書きがされている。さらに興味深いことに、最初に記号の説明がある。〜ふじ ところ、〈やまがた やくしょ やくめの な、(ゆみはりづきは ひとの など しれ、[かすがひは もののな、}かさは ときあかし、と書かれている。場所や固有名や役名などは、「ふじ」「やまがた」「ゆみはりづき」「かすがひ」「かさ」の記号を用いて、他の普通名詞とは異なることを示す工夫がなされている。それだけ仮名書きには特徴がないということをいみじくも表わしている(図21)。

変体仮名が、「し」、「な」、「に」、「お」などにみられるが、それらを現在使われている平仮名に直して、最初の部分を少ししるしてみよう。

くにうちの はなし

○ないぐわいの まじわり あつき はなし

○ほんげつ いつかの ひ(いはくら) こう ごしそく および ひめぎみ つうじを めしつれられて 〜よこはま〜やまのての 〜あめりか〜〈こうしくわん〉におもむき たまへり、こは かのくに こうし つとめの ねんげん をはりてちかきうち くにに かへるに より、ごさうべつの れいを つくされんとの よし、

これがすんなり読める人はおそらくいないのではなかろうか。特に原文を見ると、「な」は「ふ」のようにみえるし、「に」の変体仮名を読める人は、書道など少しばか

りその方面を勉強した人に限られよう。さらに「ないぐわい」の「わ」が「ね」のように見えるため、「ふいぐねいの」と読んでしまいかねない。全文を見てやっと、「内外」のことかとわかる。「外」が「ぐわい（ぐあい）」と歴史的仮名遣いになっていることも、この語の理解を妨げている。この文を理解するために、自分のもっている日本語の知識を最大限利用して、あれこれ音をはめて前後の意味が通じる語を探していたことがわかる。もし日本語を知らない人であれば、平仮名を学んでも理解できないことであろう。文字はたちどころに理解されてこそ文字として機能するのであり、その点からいうと、考えあぐねた末にやっと理解できるような書記法は実用に適してい

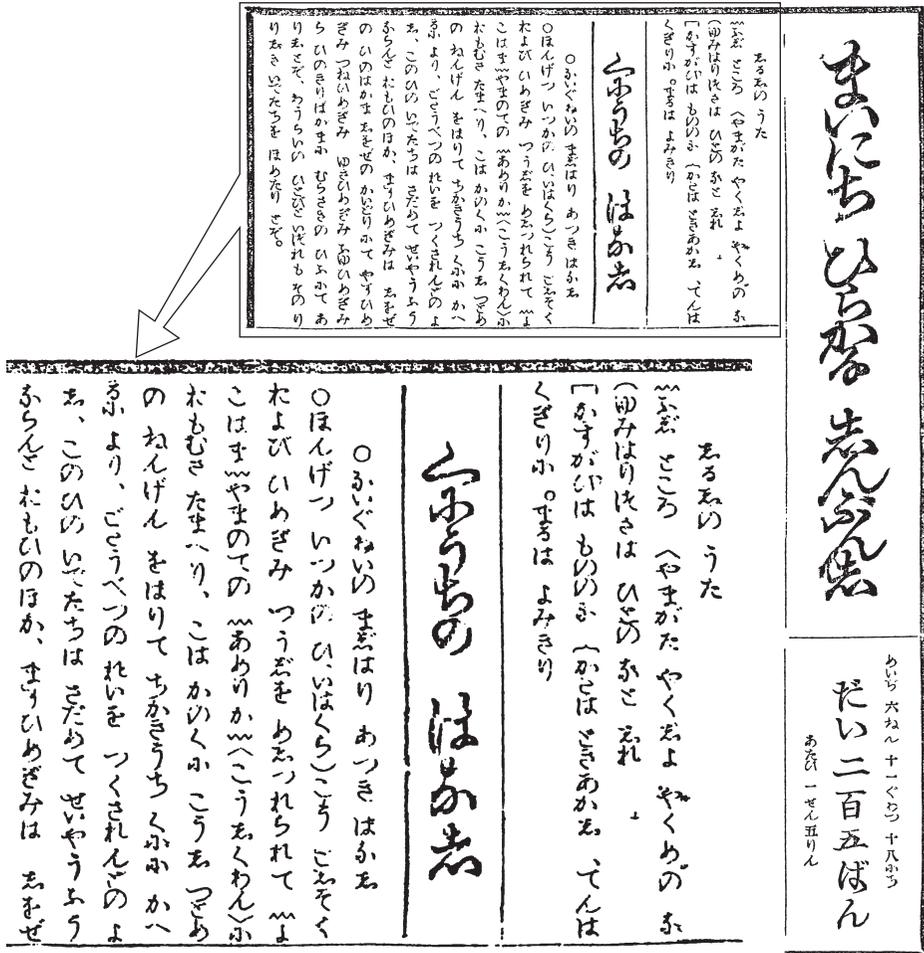


図 21 『まいにちひらかなしんぶん』 明治 6 年 11 月 18 日 第 205 番

るとはいえない。実際、仮名書き新聞はまもなく廃刊になった。

分かち書きは、表音文字では必要なものだが、不可欠なものではない。近世のアルファベットの記録には、分かち書きがなされていないものがある⁴⁾。その場合、おそらく音読みが不可欠であったと思われる。声に出して読むことで、聞き慣れた語が現れてくるからである。ちなみにヨーロッパで分かち書きが生まれたのは、7世紀から12世紀のことで、12世紀には分かち書きと黙読はほぼ定着したそうである (Saenger 1997; 大黒 2009)。この平仮名新聞が分かち書きになっているということは、黙読を前提にしているに違いない。

その区切り方でおもしろいのは、「の」とか「を」といった一語の助詞が名詞にくっついていることである。現代のローマ字表記では、離して書かれているが、このことについては第5章でふれることにしよう。

『まいにちひらかなしんぶん』は仮名で書かれており、しかも活字であるので、何とか読み下すことができた。しかし当時使われていた音節文字でさえ、100年の間にいくつかの文字はかわってしまっており、さらに歴史的仮名遣いをまったく学ばなくなった現代、いかに音節文字で書かれていようとも、理解しがたい文となっている。

常用漢字

戦後の「民主教育」により、当用漢字や教育漢字が制定され、すでに60有余年、難しい漢字は用いないようにした教育の成果があがって、我々はもはや戦前の書を難なく読むことができなくなった。仮名も一つの字体に統一されて、残りは変体仮名と呼ばれて無視され、書道をのぞいて、もはやよほどのことがない限り、それらを見ることもなくなった。その結果、日本人でありながら、日本人が書き残した文書が読めないのであるから、教育というのは恐ろしい。

福沢諭吉は文字を教える書のなかで次のように述べている。

「今より次第に漢字を廃するの用意専一なる可し。其用意とは、文章を書くに、むつかしき漢字をば成る丈け用ひざるよう心掛ることなり。むつかしき字をさえ用ひざれば、漢字の数は二千か三千にて沢山なる可し。」(福沢諭吉 1981: 218)

福沢の願いが戦後になって実現した。その結果、彼の書でさえ、振り仮名がつけられているにもかかわらず、理解できないことばがたくさんあるという皮肉な結果になってしまった。難しいことばを使わないように、難しい漢字は使わないようにという教育は成果を挙げたが、戦前の書に近づくことができなくなってしまった。鷗外、漱石、龍之介さえ読めない事態が到来したのである。

今日流通している文書は、常用漢字の2000字ぐらいで90パーセントくらいまかなえるという。さらに漢字を5000字ぐらいに増やすと、使用漢字の99パーセントを占め、ほぼ実用になろう。何も5万も覚えなくても2000字ぐらいで、ほぼ用を足す。文字という観点からして2000は多いかもしれない。しかしそのほとんどは意味をもつ語である。26文字というアルファベットで語を作るのとはかわらない。何の規則もない綴り字を覚えるという言い過ぎかもしれないが、そんな語の綴り字を覚えるのと同じである。確かに英語にしても、語の発音に近い綴り字である。しかしその多くは不規則なので、いちいち単語の綴り字を覚えなければならない。それも5000語を覚えてもまだ試験問題で知らない語が出てくるのがふつうである。英単語を覚えるのと漢字を覚えるのはほとんど同じである。もちろん日本語で用いられる漢字は2字つなりの語が多いので、単純には2000とはいえない。「発音」や「英語」にしても「単語」にしても2字で1単語である。しかし2000の漢字の意味さえ知れば、2字で1単語の語は容易に理解できる。「発」という意味と「音」という意味を知っていれば、容易に「発音」が音を発することを意味する語であることがわかる。ところが英語であると sound と pronounce や pronunciation というまったく違った語を覚えなければならない。「発音する」pronounce の名詞形である「発音」が pronunciation とはなぜなのであろう。「教育する」と「教育」が educate と education であるのなら、当然 pronounce であれば、pronunciation となっていはいはずだが、そうはならない。規則通りにならないということは、いちいち覚えなければならないということである。発音に近いとはいえ、綴りはけっこう難しい。それでも漢字の方が難しいというのであろうか。

2000 という数字はどうして出したのかよくわからないが、私はたいへん妥当な数字ではないかと感心している。ユカテコ語の歴史的な文書のいくつかをコンピュータに入力して、語の異なり数を数えたことがあるが、いずれも2000語前後であった。だからふつう文書を構成する異なり数は2000語ぐらいで十分なのではと推測している。語と漢字は同じものではないのだが、意味ある単位として漢字をみると、語と同等と扱ってもよいだろう。そうすると、2000字というのはなかなかすばらしい数字である。もちろん2000字のなかに選ばれた漢字を一つ一つ検討すれば問題があるかもしれないが、だいたい90%をカバーするというのであるから、上出来ではなかろうか。

1986年に常用漢字が1945字となった。こうした漢字制限は、前島密が1866年將軍徳川慶喜に奉った漢字廃止に関する建白書がその始まりだといわれる（山田1943；吉田・井之口1950）。学習上困難な漢字の使用をやめてもっぱら仮名を用いることを

説いたわけである。その実践例が先ほど挙げた『まいにちひらかなしんぶん』である。その後漢字は、西洋化の波のなかで非合理的な文字とされ続けた。文字は思想伝達的手段であり、簡便化、合理化して、実生活で役立たねばということになった。そのためローマ字国字論やカナモジ国字論などがさかんに論じられた。しかし文字は知識の蓄積の要であり、伝統を伝えるものでもあるため、そうした漢字制限や撤廃の運動は伝統軽視の非難を受けたことも確かである。

常用漢字のなかには、私自身たぶん一生使うことがない「虞（おそれ）」のような文字も入っている。また、最近よく話題になる「捏造」や「拉致」などは、「捏」や「拉」が常用漢字ではないため、交ぜ書きで「ねつ造」「ら致」と書かざるをえない。そうした語がどうしても出てくる。物事は連続体であり、どこかで線を引かなければならないのがふつうである。これは中心と周縁という問題でもあり、中心部をしっかり決めておけばいいような事柄である。その中心部が1945字である。この1945字というのは、歴史をたどれば、

- 1923年 1962字（臨時国語調査会議決）
 - 1931年 1858字（臨時国語調査会議決）
 - 1942年 2528字（国語審議会答申）
 - 1942年 2669字（閣議申し合わせ）
 - 1946年 1850字（国語審議会答申，内閣訓令・告示）
 - 1981年 1945字（国語審議会答申，内閣訓令・告示）
- （金田一・林・柴田 1988: 338-339）

と少しずつ文字数が異なるが、「国民の望むところを察し、社会の要求するところを見極めて、もって万全の策を講じ」てきた成果であろう（吉田・井之口 1950: 2）。

常用漢字表の前書きで、「1. この表は、法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を示すものである。」とあり、漢字使用の目安というたいへん穏当で賢明な言い方がされている。公的な文書を作る場合は、事実上制限に等しいのだが、それでほぼ十分意をつくす文章が作れるのだから、評価すべきである。「目安」というのは、見方によっては曖昧きわまりない日本人の態度の一つかもしれないが、大きく網をかけ、漏れるものは仕方がないという、連続体をどこかで区切らなければならないときの賢明な解決策の一つであり、日本人の知恵が現れたすばらしい判断だと積極的に評価したい。

もちろん1945字に人名漢字166字を加えた文字だけを覚えればすむわけではない。音と訓がある。1945文字を音訓の有無で分類すると、次のようになる。

音しかない漢字 737 字

音訓ともにある漢字 1168 字

訓しかない漢字 40 字 (林大 1982 『図説日本語』)

常用漢字の音訓の数をみれば、音は 2187 種、訓は 1900 種で、総数 4087 である。これでほぼ十分日常生活に不自由を感じないのだから、すばらしいものといえよう。それぞれの漢字には造語力がある。一つ一つの文字の意味さえ知れば、先ほど挙げた「発音」のごとく、語の意味が容易にわかる利点もある。常用漢字については、欠点がよく挙げられるが、欠点を挙げつらうより、すばらしさをほめる方がいいことではなからうか。

先ほど挙げた「捏造」や「拉致」は、英語で言えば、fabrication であり、abduction というのであろう。こうしたふうに使わないことばは辞書を引いて調べる。それと同じで、「捏造」や「拉致」も辞書を引けばすむものである。難しければルビをふればいい。それらを「ねつ造」とか「ら致」と書くのは、fabrication や abduction を、たとえば fabrication とか $\alpha\beta$ duction と書くのと同じである。それらが認められないように、「ねつ造」や「ら致」も認められないといっていいたいだろう。

2000 字という制限により、戦前の本がすらすら読めなくなったことは確かである。しかし、中学校までの義務教育を受ければ、新聞など日常必要な書き物はすべて読めるし、書くことができる。携帯電話で話をするよりメールでやりとりすることが多くなった最近の伝達形式をみると、中身はどうであれ、漢字仮名交じり文でみんな行なっている。またコンピュータで検索すると、扱っていない事柄がないほど、多様な事項が漢字仮名交じり文で書かれている。それはほとんどすべての日本人が漢字仮名交じり文を自由に扱っている証拠になるだろう。これは 2000 字という制限のお蔭といえる。3300 字ほどになれば、ほぼ漢字の日常の使用量は尽くされるのであるから、それ以上の文字は、自分自身の研鑽努力で増やせばすむことである。

こうした盛んな文字使用の状況をみていると、もはや漢字や仮名やローマ字といったことを論じた国語国字問題は解決ずみのような気がする。メディアというか、技術のお蔭で、入力もできないやっかいな漢字といった問題はなくなった。真剣にその問題を議論していたことが滑稽とさえ感じるほど、技術が思考を変えてしまった。しかしまだに漢字は難しいとか、日本の文字体系は国際化されていないといった議論がなされることがある。そうした問題を次章で考えてみよう。

4 書きとめる工夫——漢字考

私たちはワープロに向かって日本語をアルファベットで打って、それを漢字仮名交じり文に変換する。携帯電話では、日本語を仮名で打って漢字仮名交じり文に変換している。こんな面倒なことをいとも簡単にしている。アルファベットで打つのなら、アルファベットのままでいいではないか。仮名で打つのなら仮名のままのほうが楽ではないか。それなのに漢字仮名交じり文に変換しているのである。いったいなぜそんな面倒なことをしているのだろうか。

裏方のアルファベットに対し、表舞台に立つ漢字仮名交じりの文とすべきであろうか。もっといいたとえはないかと考えているうちに、音という裸状態の日本語に服を着せている感じがしてきた。裸状態のものがアルファベットである。アルファベットで日本語を打っているのだから、そのままアルファベットを使えばいいではないか。それはもっともという気がする。しかし裸の状態を見せるなんて、みっともない。それが私の考えである。つまり、いかにローマ字で入力しても、ちゃんと服を着せて、漢字仮名交じり文にしなければ、ローマ字ではとても日本語の表記としては話にならないと思うのである。

文字にまつわる問題の一つに、文字の究極の目的とは何かということがある。文字の究極の目的とは、表語である。それなのに、それが十分理解されていない。そのため、表語と表音のレベルの混同ということが起こっている。その典型的な例がローマ字化の問題である。この問題に加えて、ローマ字化が国際化の道であるとか、ローマ字化しないから世界標準から後れをとっているといった、書記法とは元来何の関係ないことが、書記法と結びつけられており、問題をややこしくしてきた。

漢字仮名交じりの日本語は、江戸時代から、アルファベットと比較して、その難しさゆえ、呪われてきた。そのため、国字を仮名にしようとかローマ字にしようという運動が明治から続いてきた(川副 1922; 福田 1962 等)。戦後のアメリカ教育使節団の報告書などでも、漢字仮名交じりの書法は批判されている(村井 1979)。しかし、現在では、もう解決済みの感がある。コンピュータのお蔭で、誰もが漢字仮名交じり文をいとも簡単に綴ることができるようになったからである。しかしそれでも時折漢字や漢字仮名交じり書記法が批判されることがある。この章で、アルファベットと漢字仮名交じりについて扱うことにしたのは、ここに日本人特有の考えの癖が如実に表われているからである。

漢字仮名交じり書記法の誤解

漢字仮名交じりの書記法は 1000 年あまり続いてきた。そして現在携帯電話などでも、漢字仮名交じりでメールを交換している。漢字仮名交じりの書記法は、もはや日本人の誰もが行なうことができる書き方であり、いまさらローマ字に直そうという人はほとんどいない。しかしそれでもローマ字書きを主張する人たちがいる。たとえば現代思想界の巨人の一人梅棹忠夫によると、以下のようになる。

「現在おこなわれている日本語の表記法は、いわゆる『漢字かなまじり』である。しかし漢字のように、際限なく字母数がおおく、しかも読み方も一定しない文字をつかっていたのでは、現代のような高度情報化社会にはとうてい適合してゆけないのではないか。このままでは日本語は現代文明社会をささえてゆくことはできないのではないか。いま、おもいきった改革を断行しなければ、二一世紀の人類文明から脱落せざるを得ないだろう。改革の方向としては、カナモジの採用そのほか、いろいろとかがえられるであろうが、わたしは、日本語のローマ字化以外に道はないとかんがえている。」(梅棹 2002: 335-336)

こう主張するのだが、その主張そのものが漢字仮名交じりである。そこでこれをローマ字書きしてみよう。

Genzai okonawarete iru nihongo no hyoukihou ha iwayuru kanji kana majiri de aru. Sikasi kanji no you ni, saigen naku jibo suu ga ooku, sikamo yomi kata mo ittei sinai moji wo tukatte ita node ha, gendai no you na koudo jouhouka syakai ni ha toutei tekigou site yukenai no de ha nai ka. Kono mama de ha nihongo ha gendai bunmei syakai wo sasaete yuku koto ha dekinai no de ha nai ka. Ima omoikitta kaikaku wo dankou sinakereba, 21 seiki no jinrui bunmei kara daturaku sezaruru wo enai darou. Kaikaku no houkou to site ha, kana moji no saiyou sonohoka, iroiro to kangaerareru de arou ga, watasi ha nihongo no roumajika igai ni michi ha nai to kangaete iru.

ローマ字による日本語の書き方にはいくつかあるが、1999年に改正された方式である「99式」で先の文をローマ字化してみた。

漢字仮名交じりの書記法では必要ないのだが、ローマ字で書く場合は、必ず分かち

書きを行なわなければならない。その際もっとも難しいのは、どこで区切るかということである。「おこなう」*okonau* の活用である「おこなわれて」を *okonawarete* とするか、*okonaware te* とするか、*okona ware te* とするか、悩まなければならない。「日本語」にしても「字母数」にしても「高度情報化社会」にしても「現代文明社会」にしても、一語として把握したいことばにもかかわらず、分かち書きをしたほうがよさそうである。分かち書きをすると、字母・数、高度・情報化・社会と区切るほうがよいようである。*koudojouhoukasyakai* と書くとどうしても長すぎて読みにくいという判断が働いてしまう。しかし、どのように分かち書きしても読みにくい。そんなことは慣れですよ、と言われれば、そうかもしれない。文字というのは慣用の賜物であり、慣れ親しむ以外に速くは読めないものだから、先のローマ字式も慣れれば問題ないのかもしれない。しかし本当にそうだろうか。

日本語のローマ字化にヘボン式、訓令式、日本式があるように、ローマ字による書き方にも若干ながら違いがある。特に音素的には *s* に母音がつくサ行や *t* に母音がつくタ行などは、音声的には口蓋化しているために、*si* や *ti* ではなく、*shi* や *chi* と書く場合がある。また *hyoukihou* や *you* にみられるように、音声的には長母音であるにもかかわらず、*ou* と書いて、現行の仮名書きの書き方を踏襲している。ローマ字書きが表音的であると信じられているが、実は、このように決して表音的ではない。表音的だと信じられている書き方を細かにみていくと、いくつか問題が生じてくる。そのために、いくつかの書き方があり、統一できないともいえる。

大きな問題は母音についてである。「多い」という場合や「遠い」という場合などでは、*ooi*, *tooi* と書いて長母音として問題ない。しかし、「お置きになる」の場合では、*ookininaru* とすると、長母音扱いとなりそうである。そうすると、*o'okininaru* というように、*o* の間に *'* を入れるといった工夫がある。同様に、「音韻的」という場合、*oninteki* と書くと「オニンテキ」と読まれてしまう。*on'inteki* と *n* の後に *'* を入れたら、*on-inteki* としなければならない。「多い」や「遠い」は、「表音」や「ように」の場合と同じ、「オー *o:*」という長母音であるにもかかわらず、一方では *oo*、他方では *ou* と書く根拠は、発音に求めることはできそうもない。つまり表音ではないということである。

「東京」とか「大阪」の地名は *Tokyo* と *Osaka* と書かれて、それが一般化している。これはたぶん、*o* を英語式に「オウ」と読むようにしたものではなく、*Tôkyo* とか *Ôsaka* と書かれていたものが、山型記号を書くのが面倒だったのか、視覚的に美しくなかったためか、理由はよくわからないが、省いてしまって、*Tokyo* や *Osaka* でも通

用するようになったのであろう。英語の中にそれらが入ると、oはオと読まずオウと読むだろうから、何ら問題なくその綴り字が受け入れられた面もあるかもしれない。しかし読み通りでないのだから、これはもう表語文字である。文字はもともと語を表わすものであるから理にかなっている。Tokyoと書いてあって、誰もそれを「ときよ」とか「とくよ」とは読まない。Osakaを「おさか」とは読まない。アルファベットで書かれていても全体が一語として機能している。TokyoやOsakaは字面通りに読んではいない。「尾坂」さんや「小坂」さんにとっては困る読み方である。違った見方をすると、それを知らなければ「トーキョー」とは読めないということになる。つまり「東京」と書いてあってもTokyoとかいてあっても、「トーキョー」と読まなければならない。読み方を知らなければならない。これをToukyou, Oosakaのように、仮名で書く方式でローマ字化するのが99方式である。しかし「多い」や「遠い」と同じ[o:]という長母音であるにも関わらず、「東京」のほうは、ouと綴らねばならないのに対し、「大阪」はooである。我々は仮名方式を知っているからいいようなものだが、書き方を知らない人にこの区別をどういう風に理解させたいのであろうか。覚えなければならない規則が加わる。

梅棹の文は仮名が多い。たとえば先の文例では次のような文は仮名が続いている。

「ささえてゆくことはできないのではないか」

sasaete yuku koto ha dekinai no de ha nai ka.

「いろいろとかがえられるであろうが」

iroiro to kangaerareru de arou ga

ふつうであれば、「支えてゆくことはできないのではないか」と書くであろうし、「いろいろと考えられるであろうが」と訓読みの漢字を使うであろう。訓読みのほとんどを排除する理由はなんだろう。それを考えるためにローマ字表記を添えてみた。

ローマ字では分かち書きがなされている。それに対して、同じ表音文字である仮名では分かち書きがなされていない。なぜローマ字では分かち書きがされ、仮名では分かち書きがなされないのであろうか。同じ表音文字であれば、同じような扱いをしなければならないはずである。そうでないから読みにくい。ローマ字は単音文字であるのに対し、仮名は音節文字である。ローマ字は単音文字だから、分かち書きする必要がある。仮名は音節文字であるために分かち書きをしなくてもよいということが成り立つであろうか。分かち書きは、表音文字を表意化する必要があるからで、それが分かち書きの理由である。だから「ささえてゆくことはできないのではないか」は、ローマ字表記にならうと「ささえて ゆく こと は できない の で は ない

か」とする必要がある。しかし自立語でない「は」や「の」などを独立させて書くことには、ローマ字では分けて書いているのにもかかわらず、抵抗がある。膠着語といわれる日本語の特色を生かしている書き方とはいえない。

「ささえてゆくことはできないのではないか」は同じ種類の字体の羅列だから、どこにも語形を際立たせる特徴がなく、読みにくいということも考えられる。そこで「ササえてくことはできないのではないか」のように、同じ表音文字でも字形の異なる片仮名を入れてみた。どうだろう。慣れの問題かもしれないが、やはり何を言っているのか、すぐさまわかるとはいえないだろう。

興味深いことに、ローマ字で日本語を移した最初期の本では、「は」や「を」、「の」などの処理に、すでに2通りの書き方がみられる。『平家物語』では、離して書かれているが(ただし210頁以降は前のことばにつけている)、『伊曾保物語』では、まえのことばにつけて書かれている(福島1976; 1977)(図22)。

F E I Q E.³
MONOGATARI.
Quan daiichi.

DAI ICHI. FEIQE NO XENZO NO
qeiZZu, mata Tadamori no vye no fomareto, Qi
yomori no ysei yeiguanã coto.

MONOGATARI NO NINIV.
VMA NO IO. QIICHI QENGVEO.

V Manojã. Qêgueónobõ, feiqe no yurai ga qi
qitai fõdoni, ara ara riacu xite vo catari arc.
QIICHI. Yafui coto de gozaru: võcata
catari maraxõzu. Mazzu Feiqemonogatari no ca-
qi fajime niua vogori uo qiuanã, fito uomo fito to
vomouanu yõ naru mono ua yagate forobita to yõ
xõjeqi ni, Taitõ, Nippon ni voite vogori uo qiua-
meta fitobito no fareta yõdai uo catõu mõxite
cata, fãte¹ Rõcutãra no nhãdõ² Saqi no Danjõ dai-
jin³ Qiyomori cõ to mõxita fito no guiõgui no fu-
fõna coto uo noxeta monõ de gozaru. Sate sono
Qiyomori no xenzo ua⁴ Quanmu renvõ cudai na
A 3 cã-

DOCVIVNO FITOYE TAIKI
TE XOSV.

Sõyte fitoua mimõnaqi tauamuregotõnita rã
miuo catãnuqe, xinjitno qeõqeuoba qiquni ta-
cut fituni yotte, mimigicaqi corouo atõurte, corõ
monogatariuo fãnni qizamucoto, taroyeba jume-
cuuo aifõruni¹ cotonarazu; sonoyuyeta vyeqiniua
yeqinaqi yedafa vouoxito iyedomo, sono nacari
yoqi ni aruvomotte yedafãuo muyõto vomouanu-
ã gotoqu nari. Carugayuyeni Superiore no võye
vomotte cono monogatariuo Latinyori Nipponno
cocobani yaurague, itoirono xenzacuno nochõ,
fãnni firacaturu nari. Core macotoni Nipponne
cotoba qe cono tãmeni tãyõito naru nominarazu,
yoqi michiuo fitoni voxiye catãsu tãyõitomo rã
rubeqi mono nari.

409.
E S O P O G A X O-
gaino monogatari riacu.
COREVO MAXIMO PLANVDE
zoilã fito Gregõno cotõyori Latinni fon-
yacu xerarexi mono nari.

図22 平家物語(左)と伊曾保物語(右)(福島1976; 1977)

天草版『平家物語』（1592）の最初の部分

……Mazzu Feiqemonogatari no caqifajime niua vogori uo qiuname, fito uomo fito to vomouanu
yō naru mono ua yagate forobita to yū xōjeqi ni…

「……まず平家物語の書き始めには、奢りを極め、人をも人と思はぬようになるものはやがて滅びたという証跡に……」

天草版『伊曾保物語』（1593）の冒頭の部分

sōjite fitoua mimonaqi tauamuregotonia mimiuo catamuqe, xinjitno qeðqeuba qiquni taicut
suruni yotte, mimigicaqi cotouo atçume, cono monogatariuo fanni qizamucoto, tatoyeba
jumocuuu aisuruni cotonarazu

「惣じて人は実もなき戯れ言には耳を傾け、真実の教化をば聞くに退屈するによって、耳近きことを集め、この物語を板に刻むこと、喩えば樹木を愛するに異ならず、」

15, 6世紀の古写本では、文節で区切っているのに、「は」や「を」などは前の語につけるのが理にかなっていないと思われる（中田 1982: 第1章）。それが自然と思われるが、現在の99方式では離して書いている。その書き方は、まさか『平家物語』のような初期のローマ字の書き方を踏襲しているのではないと思うのだが。

400年以上前の日本語の表音表記の例を挙げたのだが、何が書いてあるか理解できないのではなかろうか。ところがそれを漢字仮名交じり文に直したのを見ると、たちどころにわかるのはどうしてだろう。漢字仮名交じり文に慣れているだけではないと思う。mimigicaqiとかfanniとはいったい何かと頭の中の辞書を探し回るのだが、すぐにはそれらしき語が見つからない。ところが「耳近き」とか「板に」という漢字を見れば、たちどころにわかる。それは文字自身が意味をもっているからである。

書記の究極の目的は意味をつかむことだから、表音文字だけだと分かち書きをしなくとも、なかなかわからないことになる。いま示したように、分かち書きをしてもまだわからないということも多々ある。ところが漢字という意味をもつ文字があることで、文字からすぐ意味もわかるし、分かち書きが必要でなくなる。さらに漢字は、ほとんどの場合文節の頭にくるので、文節の区切りを容易にしてくれる。また、表音文字であると一次元的な線形の書き方しかできないのに対し、漢字は二次元的な文字であり、それを利用することで、容易に意味がつかめる。目で見るとき、次元より、二次元のほうが早い。ラジオよりテレビのほうがわかるのはそのためである。聞くより見るほうが早い。だから漢字が混じっている方が読みやすいということになる。

日本語は、目と耳の両方を利用する「テレビ型」の言語になってきている。それに

反してヨーロッパ語を含むほとんどの言語は、いまだに音声に全部情報がある「ラジオ型」の言語で、日本語の方が一步先をいっている、という鈴木孝夫の見方はたいへんすばらしいものではなからうか（橋本・鈴木・山田 1987: 15-16; 鈴木 1990）。

綴り方における問題以上に問題なのが、ローマ字で書いたら、高度情報化社会に適合して、漢字仮名交じりであると、現代社会をささえていけないなどの見方である。ローマ字で書こうと、漢字仮名交じりで書こうと、何の関係もないことが、書き方の問題と一緒にたにされている。特に機械化が進んで、いとも簡単にローマ字入力で、漢字仮名交じり文を書くことができるようになった現在、手書きやカナタイプの時代の不便さは何もなくなっており、多くの論が根拠のないものになってしまった。やっかいな検索も自由となった。漢字仮名交じりが機械化されないから、情報化社会に乗り遅れるといった障害は何もないわけである。

また「漢字のように、際限なく字母数がおおく、しかも読み方も一定しない文字」というが、読み方が一定していなければ読むことも書くこともできないはずである。漢字にはいくつかの読み方があるのならわかるが、読み方が一定していなければ、文字とはいえない。

レベルの混同

際限なく字母数が多いということはよく問題にされる。これはのちに詳しく述べることにしたいが、明らかにレベルの混同を起こしている。比べるなら、英語の単語と漢字を比べるべきである。一つ一つの単語は26の字母からできているが、その組み合わせは、まさに際限なく多い。それと漢字を比べなければ意味をなさない。英語の場合、さらに悪いことに、26文字だというのは見かけであり、アルファベットの多くは一つ以上の読み方がある。漢字は読み方が一定していないということがよく取り挙げられるが、アルファベットにしても読み方は一定ではない。たとえば、aを取り挙げてみると、cap [káɪp], recall [rikó:l], regular [régjulər], air [éər], regularity [régjulærəti], cake [kéik], calm [ká:m], cacao [kəká:ou], reciprocal [risíprəkl] といった例からわかるように、[æ][ɔ:][ə][e][ei][a:][Ø(無音)] などいくつも読み方がある。英語の音節数をはっきり言える人はいないそうだが、一説によると、単音節語だけで3500というのだから（榎垣実による数、鈴木 1988: 56）、それを26文字で表わそうとすると、26文字それぞれがたくさんの音を引き受けなければならなくなるのは当然である。

国際化にもし問題があるとするれば、英語以外の言語を話す人すべてに共通である。ことばの問題であり、書記法の問題ではない。現在、我々が何かを世界に伝えようと

すれば、英語で表現しなければならない。それも英語を母語とする人と同じ程度で表現しなければならない。そんな世界になっている。それがふつうでは不可能であることが問題なのであり、漢字仮名交じりの書記法など何の関係もない。ところが、これからいくつか挙げるように、多くの論はそれを混同して、漢字仮名交じり文のせいにしてきた。

漢字を使っているから、西欧に伍していけないとか、文明社会に乗り遅れる、といった論理は、さかのほれば、江戸時代の新井白石とか本多利明などに、すでにみることができ（川副 1922; 平井 1948; 福田 1962）。

新井白石（1657～1725）は密入国してきたイタリア人宣教師シドッチを尋問して、『采覧異言』や『西洋紀聞』を表わした。

「諸国用ゆる所の字躰、二つあり。一つに、ラテンの字、二つにイタリアの字。其ラテンは、漢に楷書の躰あるがごとく、イタリアの字は、漢に草書の躰あるに似たり。其字母、僅に二十余字、一切の音を貫けり。文省き、義広くして、其妙天下に遺音なし。〈其説（シドッチの説）に、「漢の文字万有余、強識の人にあらずしては、暗記すべからず。しかれども、猶声ありて、字なきあり。さらばまた多しといへども、尽さざる所あり。徒に其心力を費やすのみ」といふ。〉」（新井 1975: 39-40）

ラテンの字とイタリアの字の見本は『采覧異言』に見られる。要するに、20余文字ですべてを表わすことができることに、白石はひじょうな感銘を受けたようである。シドッチの考えに影響を受けた説は、日本語学の基礎を築いたといわれる『東雅』にもみられる。

「それが中、西方諸国のごときは、方俗音韻の学を相尚びて、其文字のごときは尚ぶ所にはあらず。僅に三十余字を結びて、天下の音を尽しぬれば、其声音もまたなを多からざる事を得べからず。中土のごときは、其尚ぶ所文字にありて、音韻の学のごときは、西方の長じぬるに及ばず。我東方のごときは、其尚ぶ所言詞の間にありて、文字・音韻等の学は、相尚べる所にもあらず。」（新井 1975: 112）

「また、我、西方の人にあひて、彼方音を問ふに、其字母わづかに三十三字にして、天下の音として、うつすべからずというものなく、彼人中土の文字多き事を論じて、『支那人はよく記性強しとこそ見えたれ。それらの字ことごとく記し得て、天下の言

に通ぜむ、いと煩わしき事也。我方のごときはしからず』などいひけり。」(「新井 1975: 113)

漢字は単語ごとに一つの文字を作るので、いくら作ってもきりがない。ことばはあるが、それに相当する文字がないことが起こる。本当に頭の良い人しかそれらの文字を暗記できない。漢字を覚えるだけで労力を使い果たしてしまう。なんと煩わしい文字であることかというのである。それに引き替え西洋の文字は、33文字でもってすべてを表わすことができる。なんとすばらしいことか。

かたや何万、かたや20数文字というこの違いの嘆きは、以後現在まで延々と続いている。表語文字と表音文字のレベルを混同した誤った論理である。

江戸後期の経済学者として、また算学者として知られる本多利明(1743～1820)は、『経世秘策』(寛政9年、1797年)の中で、

「天下各国文字ありて、聖人の真意を戴たり、我邦は支那の文字を習て其理を弁ぜり。博学の名あれども、其所知は支那一国の故事来歴に過ぎず。支那は人道立て今を去ること三千余年、エゲフテに比すれば遅きこと三千余年、去るに因て国務に洩闕たること夥く、且支那の文字は字数多くして、国用に不便利なれば外国に通じ難く、漸く朝鮮・琉球・日本の三ヶ国のみ通用せり。亜細亜州の内三、四ヶ国通用すれども、其真意を解し得ることを難しとせり。欧羅巴の国字数二十五、異体ともに八品ありて、天地の事を記るに足れりとせり。最以簡省なり。支那の国字数十萬を記憶せんとせば、生涯の精心是が為に竭とも、いかで得べけんや。大に戻れりと云べし。たとへ暗記する人出来たりとも、支那の故事悉皆日本に模写して、国用に達し益を得んよりは、我邦自然具足の益を取るを簡捷とせり。」(本多 1970: 29)

と論じ、さらにその翌年『西域物語』の中でも、同じような論を展開し、日本の文字体系を批判している(本多 1970: 117-118)。

いまみてきたように、漢字を呪いローマ字をほめる説は古くからあるが、その代表ともいえるのが、田丸卓郎が表わした『ローマ字國字論』(1930)である。それゆえ彼の主張するところを少し取り挙げてみたい。

「今日主として行はて居る国語の書き方は、漢字と仮名とを使ふ方法で、漢字の方

が殊に要用な語を書く用をして居る。然るに、其漢字の読み方には簡単な規則と云ふものがなくて、一字一字別々に読み書きを習はねばならない。否一字の読み方が一つならばまだしもだが、例へば行と云ふ字は、上に孝がつけばコーと読み、上に苦がつけばギョーと読み、ユクと読み、ヤルと読み、オコナウと読み、人名になるとツラと読んだり、行脚行燈になるとアンと読む。生という字には読み方が二十幾通りかあると云ふことである。かういふことは行や生に限つたことでなくて、凡ての漢字が、多少の差こそあれ、皆いろいろ異つた読み方を持つて居る。又書く方でも同じことで、例へば「みる」と云ふ一つの日本語を書くのに、見か覧か観か看かなどなど考へなければいけない。これ等のことについては次の節で尚論ずるが、とに角漢字日本語の読み書きの複雑さは実に不可思議といふ外なく、これほど煩はしい読み方書き方は世界中日本以外どこにもないのである。」(田丸 1980: 1-2)

田丸をはじめ、文字を扱う人のほとんどが、レベルの違いを認識できていない。そのために上のような誤解が生じるのである。読み方と語がはっきりと区別されていないといってよい。文字の本質は語を表わすことである。先の例でいえば、「孝行」、「苦行」、「行く」などは語である。わかりやすくするために英語でいってみよう。辞書によると、「孝行」は *filial piety*, 「苦行」は *asceticism* [əsétisizm], 「行く」は *go*, 「やる」は *send*, 「おこなう」は *do/act* などとなる。英語を理解しようと思えば、それぞれの単語を覚えなければならない。それと同じことである。「孝行」も「苦行」も、*filial piety* や *asceticism* ということばを覚えなければならないのと同じように、覚えなければならない。まさに苦行である。日本語では二つの文字の組み合わせ、英語の方は *f, i, l, a, p, t, y, c, e, s, m* を組み合わせせて作る。いくらアルファベットが 26 だから簡単だといっても、その組み合わせはほとんど無限である。その組み合わせの仕方を覚えなければならないのである。さらに、組み合わせの仕方ばかりでなく、発音の仕方まで覚えなければならない。たとえば、*piety* の *pie* の部分は、*pie* だけだと [pái] であるが、*piece* となると [pí:s] である。ところが *piety* では [páiəty] であり、おなじ *pie* という綴り字であっても、それぞれが異なる読み方をしなければならない。

アルファベットは、いうなれば、横棒や縦棒などを組み合わせせて作られる漢字の横棒や縦棒などに当たるといい。それなのに、漢字と一緒にしたら、漢字の方が難しいに決まっている。漢字と比べるなら、26 のアルファベットのいくつかを組み合わせせて作られる語の形と比べなければならない。その組み合わせの複雑さと漢字の複雑さのどちらが複雑かと問うてはじめて同等な比較がなりたつ。さらに 26 のアル

ファベットだけで問題ないかという、そうではない。asceticism という単語を見ればわかるように、同じ s という発音でも、sc とか c と書き分け、最後に現れている s は、send と同じ s が使われているにもかかわらず、音は z である。見かけは 26 字だが、実際にはそれ以上の文字を使っているといってもいい。しかも同じ文字が違った読み方をされるのだから始末が悪い。それを知らなければ、いくらアルファベットでもあっても書けないし、読めない。

視点の違い

もう一つの問題は、たとえば「みる」という一つの日本語を書くのに、見か観か観か看かなどを考えなければいけない、と書かれていることについてである。確かにどの漢字を使うか、悩むことがある。しかしこれは中国語と日本語の表現の仕方の違いによるものであって、何も中国語のやり方をまねる必要はない。日本語では「観」は「じっくりみる」とか「念入りにみる」というように、「みる」という動詞に副詞句をつけて表現する。日本語では、ギョロギョロとかマジマジとかいった繰り返しの表現が発達している。そちらの方に発展したのであり、中国語のように語 = 字でもって違いを区別するような発展の仕方をしたのではない。動詞が豊かになったのではなく、それを修飾する語が発達したのである。表現の仕方が違うのだから、わざわざ中国語のように、見方の違いを 1 語で表わす必要は何もない。

「みる」という動詞だけ取り挙げたら、中国語の場合は、ひじょうに具体的に「みる」という動作を動詞の語彙として区別する言語ということが出来る。一方日本語では、どのように見ようと、動詞としての「みる」は同じであり、ひじょうに抽象度の高いことばとなっている。抽象度の高いほど発達しているとすると、日本語はかなりのものである。そんなばかげた比較はしたくないが、日本語の語彙の多くは抽象度が高いことを心にとめておく必要がある。もちろん、逆の見方もできないわけではない。語彙が少なく、原始的という見方も可能である。しかし、どのようにこの周りの世界を語彙化するかは、言語によって違いがあるに過ぎない。人間の多様性を示してくれるおもしろいところである。

日本人はうまく外のものを取り入れてきたはずである。合わないものは取り入れる必要はない。見る、観る、視るなど、見方の区別は、じっくり見るとか、じっと見るとかといえばすむものである。だから漢字一つで区別するというを取り入れる必要などない。もちろん書きたければ書けばよい。文の感じを変えることが必要なら、観察とか熟視ということばにしてもよいであろう。同じようなことは、英語でも行なわ

れている。see, look, observe などを見ればわかるように、ゲルマン系のことばに加えて、ラテン系のことばを使うことで、学問的な表現や高尚な表現を得てきたといわれている。豊かな表現をするとき、そうするのも一手段である。こういう例を思い浮かべれば、複雑きわまりない漢字をいちいち覚えなければならないと漢字を呪うのは、おかしいということがわかるであろう。

漢字を呪うことに忙しく、漢字のよさを認識し損なっている場合もある。たとえば先の see, look, observe は、形態からその関係は何も類推できない。それはすべて覚えなければ使えないということの意味している。漢字の場合は、見る、観る、視るなど、いずれも見の字が入っていて、たとえ読めなくても「見る」に関係する語であることが類推できる。さらに「見」の字には「目」が入っていて、目を使う行為であることがわかる。そういう意味の類推は、see, look, observe ではできない。意味がわかるということは、文章の理解に大切な要素である。

読めなくても意味がわかるということを我々はよく経験する。これがアルファベットの羅列ではうまくいかない。ところがアルファベットで書かれていると読めると思っている人が多い。しかしアルファベットで書かれていても、その語や文法を知らなければ読めないことが起こる。特に英語の場合はそうである。確かに、ラテン語やスペイン語の場合だったら読める。しかし語の意味や文法を知らなければ、読めるといっても、何の役にも立たない。ただ発音しているだけにすぎない。意味がわからなければならない。意味がわかるようになるためには、単語を覚え、文法を理解しなければならない。それでも誤訳がいつもあるように、言語というものは曖昧な部分をたえずもっているのである。

私はメキシコのユカタン半島のある村に入って暮らしているとき、いま述べたことを体験したことがある。ある時主人が新約聖書をもってきて見せてくれた。それで読めるのかと聞くとまったく読めないという。私はというと、アルファベットの読み方を知っているので、字を拾いながら読んでみた。すると彼らはウム、そんなことが書いてあるのかという顔をして、いちいち納得して頷く。私の読んでいることがわかるのである。しかし読んでいる当人は、まだユカテコ語を学び始めたばかりだったので、何が書いてあるかさっぱり理解できなかった。ただ発音しているだけで、何の役にも立たない経験をしたわけである。

いかにアルファベットが読めないか、例を挙げてみよう。英語の辞書のどこをとっても次のような例に似たものを挙げることができる。

deice [di:áís] 「～の防水をする」

deictic [dɛɪktɪk] 「直示的な」

deify [dɛɪˈfaɪ] 「を神にまつる」

deign [dɛɪn] 「もったいなくも～してくださる」

deism [dɛɪzɪzəm] 「理神論」

いずれも dei の綴り字をもつ語である。これらを正しく読める人はほとんどいないのではなからうか。これはどういうことかということ、一つのまとまり、つまり語を表わすために、アルファベットが羅列されていることを示している。音の規則よりも、全体で、他と区別する形をこしらえている。つまり漢字とかわるところがない。漢字は、音を表わす部分（音符）と意味を表わす部分（意符）を結合させたものが多い。そのぶん救われる。アルファベットの羅列には、それが無い。つまり結合の仕方を全部覚えなければならない。中学校から英語の綴り字を覚えることに努力を払い続け、高校を卒業しても、まだ英語がすらすら読めない。英語の試験に、必ず発音の問題が出るのは、語が規則正しく書かれていないことを示している。つまり、すべて覚えなければ、正解を得ることはできない。「漢字日本語の読み書きの複雑さは実に不可思議というほかに、これほど煩わしい読み方書き方は世界中日本以外どこにもない」のではなく、英語やフランス語も似たようなものである。

田丸が次のように言うのは、何も漢字だけの話ではない。英語でも同じである。

「このように複雑極まる漢字一字一字の稽古や読み分け使い分けは、現在の書き方が行はれる以上、どうしても一々我々の学ばねばならないことで、我々の学校教育の大きな部分をその為に使つて、大学を卒業する程になっても、まだ覚えきれなかつたり、幾度も骨を折つて覚えたことも思い出せなくて急の間に合わなかつたりするのである。」(田丸 1980: 2)

複雑な書き方は何も漢字だけではない。我々はふつう中学から英語を学ぶ。大学に入っても学び続けるのがふつうである。そしていつまでたっても英語の辞書を引き続けなければならない。またひとかどの学者であっても、その草稿を見ると、綴りの間違いや使い方の間違いなどが見られるのがふつうである。何も日本語だけが骨を折つて覚えなければならないのではない。だから教育がなければ文盲ということが問題になる。このことへの理解が十分でないため、このような誤解が生じるのである。

5 音を表わす文字——仮名とローマ字考

文字というのは苦勞して学ぶ。教育を受けなければ文盲となる。漢字は難しいけれど、アルファベットであると簡単に学べると思っている人がたくさんいるが、前章で示したように、アルファベットであっても綴り方を覚えなければならないのであり、漢字と同じように、覚える手間暇はかかる。

日本語は漢字仮名交じりで表わされる。それを棄てて表音文字にすると、その時点では読めるだろう。しかし時が経てば、言語は変化するものだから、英語やフランス語でわかるように、綴り字と発音が合わなくなる。それを発音通りに変えていたのでは、いつまで経っても正書法が成り立たないことになる。さらに悪いことに、先人が残してきた漢字仮名交じり文がいつまで経ても読めないことになる。伝統を棄てる代償は、捨て去ったときにしか気づかないものなのだろうか。しかしそのときにはもう遅いのである。前章では漢字について考えたので、ここでは仮名から入っていくことにしよう。

仮名には平仮名と片仮名がある。平仮名は主として万葉仮名を崩してできた文字で、片仮名は万葉仮名である漢字の一部をとって作られた文字である。万葉仮名というのは、日本語の1音1音を漢字で表わしたものである。若干1字2音や2字1音の場合もあるが、ふつうは1字1音である。漢字の意味を捨てて、音だけを利用したものである。

江戸時代はおろか明治まで、いわゆる変体仮名が用いられていた。変体仮名とは異なる漢字からできた同音異字の仮名である。江戸時代、庶民は寺子屋で読み書きそろばんを習った。だから庶民は難なく読めたはずである。その変体仮名が我々にはほとんど読めない。変体仮名を使って印刷されたものさえ読むのが困難になっている。

ここに示したのは平田篤胤の『^{かなひふみ}神字日文伝』の最初のページである。初版は1819年だが、手元にある和綴本は明治3年（1870年）のものである（図23）。神代文字を調べていたときに出合ったものだが、印刷本にもかかわらず、最初の一行目から読めないことにショックを受けたことをいまでも思い出す。なぜ読めないのかといえば、知らない文字がたくさん使われているからで、当たり前といえば当たり前である。知らない文字とは、学校で習わなかった変体仮名である。現在なら同じ音には同じ仮名を使うのだが、この時代は、同じ音を表わす場合でも、まだいろいろ異なる字体の文字が使われていた。この頁のなかにも、たとえば、「と」は「登」を崩してできた変体仮名と現在と同じ形の「と」で書かれているし、「る」も「流」と「る」で書かれ

神字日文傳
 平篤胤謹輯考
 人門
 越後國 高橋國彦
 筑前國 相田饒穂
 出羽國 佐藤信淵
 校 同

○まぢ取を考へて云べき事ども

齋部、廣成、宿禰の古語拾遺也。上古之世未有文字。云々書れ
 むれど然らば實ハ神世ノ文字有しよと此論ひ也。古史徴の
 開題記。神世字此論といふ條よ。委く徴し論予依が如く。を
 日^ニ文^ヲの考へ、彼、條をなく見^レたきて後^ニ見^レる。然^レらで^テは、
 已^レ得^ルと^シた事^ノ多^ク有^リ。但^シ彼、條を見^レた^ルも、亦^ニ不^レお
 そく信^ズ得^ズま^シと論^ヒ直^ニ依^リ鬼^ノ心^ヲ奪^ハれ^ル。只^シ不^レお^レあ^リき
 居^ル人^モあ^リと^シ、其^ノ依^リ鬼^ノ心^ヲ奪^ハれ^ル人^ノま^シあ^リき

○神字日文傳上 一

図 23 神字日文伝

ている。また、「つつ」が「都々」と連綿で、言い換えれば、続け字で書かれている。仮名は大きさが異なるのがふつうだったが、このテキストでは、文字の大きさはほぼ同じで、均一化の傾向を示している。

日本語の活字印刷は、巡察師ヴァリニャーノ（1539 生、1579～1582、1590～1592、1597～1603 滞在、1606 死）が2度目に来日した1590年に、印刷機を将来したことから始まる。ヴァリニャーノはかの有名な天正遣欧使節を企画した人であり、一行の帰国に伴って、活版印刷術がヨーロッパからもたらされた。印刷された本は、キリシタン版と呼ばれ、ローマ字のものと国字で印刷されたものの二つがある。前章

ではローマ字で印刷された『平家物語』と『伊曾保物語』の例を挙げた。ここでは印刷された年が1598年とはっきりしている国字本の『落葉集』の最初の頁を挙げてみよう。これまた最初の行から全然読めない(図24)。活字でありながら、手書きと同じように、連綿が使われている。2字を続けて1活字にしたものである。連綿体となっているところに線を引いて、1行目を書いてみた。

「是つらの字書世にふりておほしといへどもあるは字のこゑ」

我々が活字と印刷に対してもっているイメージは、わかりやすく、1字1字別になった活字を線形に配列して文章にして印刷するというものである。規格化された大量の本が生み出されるのが印刷であると思っているので、規格化されていないさまざまな形の文字があることにびっくりしてしまう。しかし16世紀末に活字を作った人たちは、1字1字同じ大きさにするというこだわりなどなく、それまで行なわれていた手書き文書に近い形を再現するというものであったようで、どうも我々の思っている印刷活字と違う。

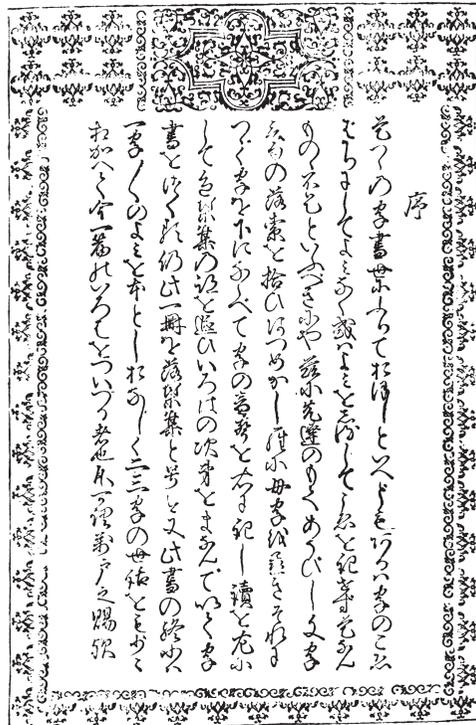


図24 落葉集(土井1962)

1598年後期の日本耶蘇会年報によれば、この年に新たに備えつけられた字母は2000というが、『落葉集』には、漢字の活字のみでもそれより多くのものが使用されているようである（土井1962:6）。『落葉集』は辞書であるので当然といえば当然である。

ところが、活字になった文字はいかにもたくさんあるように見えるが、『ドチリナ・キリシタン』と『ぼうちすもの授けよう』という漢字仮名交じりで書かれたキリシタン文書の異なり数を数えたものによると、漢字の数は189と167字であり、仮名文字は80と79、濁点を使った仮名文字は両者とも22ということである。そして2文字続き字は、「たまふ（玉ふ）」と「たる」しかない（山口1992）。2文字続きの活字を多用した『落葉集』とはかなり異なる。この二つの文書は、いつ出版されたか不明だが、加津佐と天草で、1591年と1592年に出版されたとみられている。1591年ははじめて加津佐でローマ字本の『サントスの御作業の内抜書』が印刷された年である。その年にもう漢字と仮名の活字ができていたとはにわかに信じがたいことだが、その活字の異なり数の少なさをみると、あり得ないことではない。

サビエルがはじめて教義を伝えた年から4年目の天文22（1553）年に周防の山口で行なわれた降誕祭では、「アダムから世の終わりまで六つの時期について、日本語で書いた書物を交互に読みはじめた」（岡田1967:43）とあり、それが漢字仮名交じりの文なのか、ローマ字で書かれたものかは不明だが、もうその頃にはキリスト関係の書物は当たり前であったと推測される。

「キリシタンの文学活動は、日本布教とともに始まった。記録的には1548（天文17）年、ゴアにおいてヤジロウがマテオ福音書を翻訳したことに始まる、と云える。それ以来教理書・祈祷書など、まず布教に直接必要なものが訳編せられ、すでに1550年代には辞典文典や、聖人伝などの編集もなされ、1590年出版事業が始められるまでに、数十種に上る訳書や創作などが作られたことが推定される。しかし、それらは火災にあって草稿が失われたり、後年の迫害のために焼却抹殺されてしまったりして、現在伝えられるものは殆どない。わずかに1565（永禄8）年パアデレ・モンテ（Giovanni Battista de Monte）の書翰集に『デオ パアデレ（天主）ヒイリヨ（聖子）スピリツサント（聖霊）三つのペルソウナ（三位一体）一つのススタンシヤ（本体）御力をもってはしめ奉る。』という「クルスの文」がローマ字で伝えられている他は、前掲『貴理師端往来』や、その他内外人の邦人書簡類があるにとどまる。」（海老沢1958:71-72）。

「現在知られる初期のローマ字綴りは、さきに掲げたモンテによる祈祷文断片、そ

の他イエズス会士の書簡類に散見する人名地名の綴りなどから推すと、まだ一定したものではなかったが、キリシタン版出版のころになると、ほぼ一定の言語学的根拠にたつキリシタン式またはポルトガル式ローマ字とも呼ぶべきローマ字綴りを作りあげている。それはヘボン式や日本式などの、現行行われているものよりも、遙かに厳密忠実に発音を表示するものである。」(海老沢 1958: 77)。

このように 50 年あまりの蓄積があったからこそ、印刷術が伝えられるやいなや、『サントスの御作業の内抜書』や『ドチリナ・キリシタン』などの印刷本ができあがったに違いない。『平家物語』や『伊曾保物語』がローマ字による日本語でしるされ、1595 年には、『羅葡日対訳辞書』というラテン語、ポルトガル語、日本語の三言語対訳の辞書もでた。しかし、1613 年の禁教令、そして翌年の追放令により、20 年ばかりでキリシタン版はなくなる。禁教により失われたものが相当あるに違いないが、所在がわかっているものは 31 種 73 本という(松田 1979)。

キリシタン版は、思ったより意外にも少ない活字で、日本語を表わしている。だから、読めないのは、我々にとって見慣れない手書きに近い活字を使っているからに違いない。

アルファベットで書かれていても、手書きで手紙などをもらうと、なかなか読むのに苦労した経験を誰もがもっているのではなからうか。10 年ほど前に、グアテマラを征服したペドロ・アルバラードがコルテスに宛てた手紙を調べたことがある。ここに挙げたのは第 1 書簡の最初の部分である(図 25)。アルファベットで書かれていても、一字も読めないことに、これまたショックを受けた。だからいくら活字であっても、活字を手書きに近いものにする、表音文字でも読むのに苦労するのは、仮名であろうとローマ字であろうと、あまりかわらないのかもしれない。

ついでながら、ヨーロッパから活版印刷術がもたらされたちょうど同じ時期、朝鮮

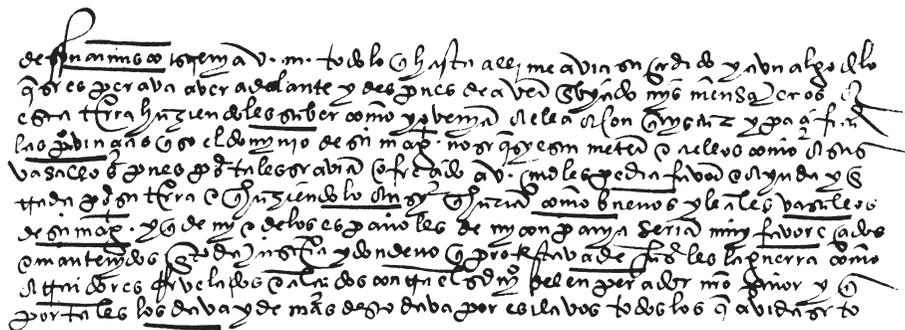


図 25 ペドロ・アルバラードの書簡 (Codex Vindobonensis S.N.1600)

からも金属活字がもたらされた。秀吉が朝鮮に出兵して手に入れた李朝銅活字である。その後家康が、1606年から16年にかけて11万あまりの銅活字（一部木活字）を作った。後世駿河版活字といわれるものである。しかし活字は家康死後再び鑄造されることなく、寛永年間（1624～1644年）を過ぎると消滅してしまい、整版に逆戻りして、印刷技術は西洋に後れを取ることとなった。増刷の際の組版の面倒さに比べれば、簡単に増刷できる整版の方がよかったのであろう（参考：印刷史研究会編2000；西野編1996；印刷博物誌編集委員会編2001等）。

以前チョコレートのことを調べていたとき、明治11年に出版された『特命全權大使米歐回覧寔記』（久米1878）の一部を読んだことがあるが、そこに「ㄱ」や「ㄷ」といった文字が出てきて驚いたことがある。辞書を引いてもでていないし、どう読むのか文脈から考えた。「コト」「トモ」という読み方がされる二合仮名というのだが、これに加え、「ㄱ」（トキ）「ㄷ」（シテ）も使われているのを見たことがある。これらは、明治7年に出た『小学入門』にあるようで、小学校でも教えていた、読めて当たり前の文字だったのである（春日1982: 175-176, 183-184）。

しかし明治33（1900）年に公布された小学校令施行規則によって平仮名や片仮名の字体が統一され、そうした字は排除されることとなった。さらに昭和21年の「現代かなづかい」、昭和22年の戸籍法の施行規則によって、変体仮名の使用が禁止された（築島1981: 352-353）。そのため、定型的な、規格化された文字に慣れてしまい、先祖達によって書き継がれてきた文書が印刷本でさえ読めないことになった。少なくともこうした変体仮名があったという教育が学校でなされておれば、私もこんなに惨めな思いをすることはなかったのかもしれない。

といっても、学校教育で変体仮名や歴史的仮名遣いを教えろというのではない。「歴史仮名遣の廃棄は、文字どうり、わが国の歴史の廃棄に他ならないといふことを忘れてはならない。……歴史仮名遣の廃棄論は国語の軽視ということが原因であつて、さふいふ論者は、心から国語を尊敬してゐない徒輩である。一体、歴史仮名遣が面倒であるとか面倒でないといふのが、国語を敬愛しないことを示してゐるのであつて、真実に国語を尊重するものであるなら、これを面倒がることは毫もないのである。」（藤田1943: 181-182）といったことはもはや考えることもできないし、望みようもないことである。変体仮名や歴史的仮名遣いはもう教養の一つであり、必須の知識ではないのである。

先に挙げた『現代かなづかいの実施に関する件』には、「国語を書きあらわす上に、従来のかなづかいは、はなはだ複雑であつて、使用上の困難が大きい。これを現代語

音にもとづいて整理することは教育の負担を軽くするばかりでなく、国民の生活効率をあげ、文化水準を高める上に、資するところが大きい。」と書かれている（倉島 2002: 38）。

教育の負担軽減、文化水準の向上、便利に、効率よく、といったことはその後もずっと現在まで続いている。まさに高度成長期のうたい文句であった。そしていま教育にまで効率性が問われている。暗記したり、辞書を引くといった地道な努力こそ大切なのに、そうしたことが軽んじられるようになってしまった。いろいろ問題が噴出してきている原因の一つになるのではなかろうか。

以前は歴史的仮名遣いがされていたが、現在は「現代仮名遣い」に基づいている。これは 1946 年 11 月に告示された。そして 1986 年には改訂版の「改訂現代仮名遣い」が告示された。その根本的な考えは、「現代語の音韻に従って書き表わすことを原則とする」ということと、「公用文や新聞・雑誌といった、一般の社会生活において、現代の用語を書き表わす」場合の規則としていることである。賢明なことに、一般の口語文に限っており、専門分野や個々人の表記は対象外となっている。しかし、一般によく目に触れる文章はこの規則に則っているため、言語の多数決の原理により、ほとんどの人が、その規則に準じた書き方をすることになった。

音韻に従って書き表わすことが原則であるが、助詞に使う「へ」「は」「を」は「え」「わ」「お」と発音するけれど、「へ」「は」「を」として、原則からはずれている。それを問題にする人がいるが、文の理解という点からみれば、場所や対象を示す語が「へ」の前にあるとか、取り立ての名詞が「は」の前にあるとか、目的語が「を」の前にあるとか、文法的な情報が一目瞭然となり、文がより早く理解できる利点がある。何も原則一本槍でする必要はないわけで、文がよりよく理解できる方策の一つとみればよいのではなかろうか。

「じ、ぢ、ず、づ」は四つ仮名と呼ばれる。原則として「じ、ず」が使われる。例外は、「ちぢむ」「つづく」などの連呼と呼ばれる場合と、「なはぢ」のような鼻と血の二語からなる場合である。ずっと以前高知出身の学生に「富士」と「藤」を読んでもらったことがある。見事に二つは区別して発音され、「藤」には [dʒi] の発音、すなわち「ぢ」となる音で読まれた。こうした四つ仮名が区別できる方言をもっている人も、それに気づくことなく、「じ、ず」を使うことになってしまった。区別のできない人間にとっては、「じ、ず」を使えというのだから、簡単である。「世界中」は「せかいじゅう」、geography はジオグラフィと書くことになる。「せかいぢゅう」と書いたり「ヂオグラフィ」と書くと、逆に古くさく思えるから、いかに目に触れる量が

大事か、多数決の原理が働いているかがよくわかる。

仮名の体系性

万葉仮名では清濁の区別がなされた。しかし万葉仮名からできた仮名には濁音がしるされなかった。万葉仮名はいくつあるのか気になり、いくつかの文献に当たってみた。すると研究者により、その数が異なった。正確な数字を出すのが難しいのだろう。たとえば、『日本書紀』を取り挙げてみよう。数え間違いがあるかもしれないが、573 (山田孝雄 1937), 494 (大野晋 1958), 742 (鶴 1977) といった具合である。万葉仮名と呼ばれている文字の全数は、大野晋によると 973 である (小松茂美 1968)。大野透の挙げた文字をざっと数えると 1453 になった (大野透 1977)。主要な文献を概観すると、主要仮名は、次のようになる。

『推古遺文』の主要仮名	134	
『古事記』の主要仮名	282	
『日本書紀』の主要仮名	742	
『万葉集』の主要仮名	693	
『続日本紀』宣命の主要仮名	229	
『日本後紀』宣命の主要仮名	145	
『続日本後紀』宣命の主要仮名	126	(鶴 1977)

『日本書紀』や『万葉集』は巻も多いので、自ずと使われる漢字も多いのかもしれないが、その時代が量としてもピークであり、やがてよく使われる字に統一化されていったのが伺われる。よく使われる常用、準常用仮名は 200 弱であったようである (大野透 1977)。仮名文字が頂点に達した 11 世紀半ばに、字体の数は 300 くらいに統一され、一人一人の使用字数は 100 字から 200 字であったようである (小松茂美 1968: 214-215)。変体仮名の字数はふつう 200 字前後が挙げられるので、そのくらいの字が仮名として使われていたということができる。

「平安初期に成立した仮名は、連綿や墨継ぎ、あるいは、文字の大小や濃淡の違いなど、毛筆の特性を生かした分かち書きによって日本語の文章を綴るための文字であった。」(小松英雄 2000: 165)。

仮名では清濁をなぜ書き分けなかったのか不思議なことだが、大和ことばには本来濁音で始まる語がなかったから、また分かち書きによって、十分語中の濁音も理解できたから、仮名では清濁の区別が必要ではなかったのであろう。

「仮名は、本来、和歌を書くために形成された文字体系であり、散文体の和文は韻

文体の和歌と基盤を共有していたから、やはり、洗練された語句で美的な内容の文章を綴る書記文体であった。」(小松英雄 2000: 71)。

清濁を書き分けない仮名であったからこそ、たった 31 文字の和歌のなかに複線構造の表現技巧が生み出されえたという小松英雄の説には、目を開かれる思いであった。

かかりひの かけとなるみの わびしきは なかれてしたに もゆるなりけり
(古今・恋 1・530)

この歌の意味は、「川の水面にうつる篝火の影は侘びしい。また、相手に立派な恋人がいて、その影になって存在さえ不確かな自分の立場も侘びしい。侘びしさの共通点は、『なかれて』下に燃えることなのだ。すなわち、篝火の影は川の水とともに流れて下の方で燃えており、自分は、ひとりでに泣けてきて、密かに恋の炎に燃えていることなのだ」という意味だそうだが、「清濁の仮名を書き分けない仮名の特性を利用して、『なかる』という一つの仮名連鎖に『ナガル』(流る)と『ナカル』(泣かる)の二つの語句を重ねて表現するような複線構造の表現技巧が生み出された」という(小松英雄 2003: 15)。

濁音がしるされた最初は 9 世紀末のことで、最初は片仮名に限られていたが、平仮名にも濁音がしるされるようになったのは鎌倉時代以降のことだという。しかし濁音点は、文字の左上や下などにつけられ、現在のように右肩に濁音点が固定されるようになったのは、江戸時代になってからだそうである(築島 1977: 第 4 章; 小松英雄 1981)。

字形の体系性

仮名文字は漢字から作られたので、それぞれの字形のつながりはない。文字はそれぞれ異なり、何の原理原則もない。だから一つ一つ覚えなければならない。面倒といえるかもしれない。しかし字形が異なる文字は一度覚えれば、なかなか忘れない。特に意味と音が結びついている漢字の場合はそうだという。しかし音節文字であるエチオピア文字やインドで用いられているインド系文字などでは字形的なつながりがある。それをアルファベットで示すと、よくわかる。

a i u e o あ い う え お
ka ki ku ke ko か き く け こ

あいうえおの文字は仮名もローマ字もまったく一字ずつ形が異なる。しかし「か行」を比べると、ローマ字書きでは k がすべてに現れて規則的であるのに対し、仮名は一

字一字別で、何の体系性もない。だから文字を覚えるのが大変だということになる。しかし濁音を考えてみると、どうだろう。

ga gi gu ge go が ぎ ぐ げ ご

k と g には何の似通いもない。ところが仮名では点が二つついて清音と濁音の関係が体系的に示されている。万葉仮名には清濁の区別があったのだから、たとえば、我や疑、具などから、ガ、ギ、グの音をもつ仮名が作られてもよかったはずである。ところが仮名は清音だけになり、のちに、二つ点をつけることによって濁音を表わすようにしたのである。よって仮名に体系性がなく、すべて覚えなければならない、というのは間違っている。清濁の区別においては体系的になっている。このことに気づくと、どこに人間は目を向けているのか注意しなければならないことがわかってくる。体系化の観点が違うだけであり、日本人は自分たちが使っている文字が何も非体系的な字形と卑下する必要はない。無声と有声の差を実に体系的に表現している。一方アルファベット系の文字では、子音と母音の結合において体系性を示しているに過ぎない。何度も言うが、見方、考え方、取り方が違うだけである。どちらかが優れていて、どちらかが劣っているというような問題ではない。

訓の理解

仮名に関して問題を挙げると、訓と送り仮名がある。送り仮名は主に動詞や形容(動)詞の活用形の場合にみられるが、両者は密接に関係している。では訓とは何だろうか。訓とは読み方の一つとみられているので、日本語における書記体系は、音と訓があって複雑きわまりないということになっている。確かにその通りに違いないが、訓とは読み方とと思っていることに問題があるのではなからうか。長い間私もそう思っていたが、あるとき訓とは漢字の意味だということに気がついた。たとえば山や川の訓は、「やま」であり、「かわ」である。これを英語の mountain と river に置き換えてみるとよくわかる。mountain は「やま」で、river は「かわ」というのは、それらの単語の意味をいっているのである。そうなら、山や川を「やま」「かわ」というのは、読みではなく、意味とっていいだろう。mountain の読みはマウンテンで、意味は「やま」ということだから、山の読みは「サン」で、意味は「やま」というのと平行であり、英語と日本語の関係から、中国語と日本語の関係がよりよくわかってくる。つまり音とは中国語の日本語なまりの読み方であり、訓とは意味なのである。それを読みとして学んできたから、そここのところになかなか気づけなかったのである。

中国語と日本語は類型論的に異なる。語順の異なる中国語を日本語の語順に合わせ

るために返り点をつけて、「読み」として訳していったのだから、古代の日本人は、何と器用なことをしたのかと思う。漢文という独特のジャンルができたので、テキストとしてしるされている中国語が外国語の一つという意識をもてないし、英語を日本語に訳すような気持ちにはどうしてもなれない。

訓はもともと意味を表わすものといっていいのだが、一定の日本語を与え、固定化していき、読みとなったわけである。一定の日本語が、「山」の場合のように、一つであれば読みとして安定するわけだが、漢字の、言い換えれば、中国語の意味と日本語の意味を一对一に対応させることは無理なので、いくつもの訓ができたわけである。そこに日本語の書記体系が難しいといわれる原因の一つがあるともいえる。しかし意味を表わすのだから、ふつう英語の一つの単語にいくつもの意味が辞書に挙げられているように、一つの漢字にいくつもの訓があるのは当然なことである。たとえば、runは「走る」だが、そのほかにも、「流れる」「続く」「経営する」などたくさんの意味が辞書にある。「生」は「生まれる」「生きる」「なま」など、たくさんの「読み」があるというが、runの例にならうと、意味がたくさんあるといってもいいわけである。日本語ではまったく異なる単語を同じ漢字を使って表現しているのである。「生まれる」「生きる」「なま」というのを英語で何というのか考えれば、それぞれ違う単語であり、それぞれを異なる単語として覚える必要があるのを思い浮かべれば、納得できるのではなかろうか。むしろ日本語の場合、ある種の意味のつながりがあるところに、英語より覚えやすさがあるといえるかもしれないし、逆に混乱が生まれる原因になるといえるのかもしれない。

送り仮名

送り仮名は漢字の「読み」すなわち意味を確定するためにあるのだが、よく送り仮名が一定でなく、日本語の書記法が曖昧だという批判を受ける元凶のように言われている。確かに「読み」という面からみればその通りかもしれない。「生る」とあれば、「うまれる」のか「いきる」のかわからないため、「生まれる」「生きる」のように送り仮名をつけなければならない。しかし「生れる」と送り仮名をつけても「うまれる」と確実に読むことができる。そのため表記が一定しないという批判を受けることになる。

送り仮名の原則は、活用語の活用語尾だけを送るということである。しかし誤読が生ずる場合には、それを避ける配慮がある。たとえば、「あらわす」は、私のワープロでは、「表す」と出てくる。しかし「敬意を表す」といった場合「ひょうす」であ

り、それを避けるためには活用語尾以上の送り仮名をつける必要があり、「表わす」と書いた方がいいということになる。知行合一を説明するのに「知ったときにはすでに行っている」と書いた場合、何とか「おこなっている」とわかるが、「いつている」と読むかもしれない。「行う」の場合は「おこなう」と読めるが、「行って」の場合は、「いつて」と読みかねない。すると「おこなって」とワープロで打つと「行って」と出るのが、面倒でも「行なって」と書いた方がよいことがわかる。「しるす」もワープロで打つと、「記す」となるが、「きす」と読むかもしれない。そうすると、「記るす」と書いた方がよいことになるが、そうするぐらいだったら「しるす」と開いた方が簡単であろうということになる。

このように送り仮名の問題は面倒なのだが、読み間違いがないような配慮と、テキスト中の一貫性があればそれでよいのではなかろうか。同一テキスト中で、「生まれる」と書いたり「生れる」と書く不統一を避ければそれでいいわけである。それを正書法が確立していないとって批判することはない。前章で英語の a や dei の読み方についての例を挙げたが、一般に文字は多読であり多義である。人間はどうも一つにまとめ上げたい欲求をもっている。しかし一つである必要は何もないと思えば、もう少し学ぶことや生きることが楽になるのではなかろうか。

西洋基準の不適切性

日本語では正書法が確立していないとよく言われる。これもどうも西洋の基準に照らして日本語表記法をみた偏見のように思える。表音文字であると、たとえば、foot と food のように、一字変えただけで、意味はもちろんのこと、前の母音の音質もかわる。これを fut とか fuud と書くわけにはいかない。一字たりとも間違いないようにしないと、指し示したい語が同定できなくなる。ところが日本語の表記の場合はどうであろうか。たとえば、「打ち合わせ」、「打合わせ」、「打ち合せ」「打ちあわせ」、「うちあわせ」など幾様にも書ける。どれも問題なくわかる。これを表記の揺れがあり、明確な書記法が定まっていないうい加減なものとするのは、表音文字で語を形成する場合のゆるがせにできない基準をもってきて判断しているからにほかならない。もっと我々独自の基準を設けてもよいはずである。

見てすぐわかるのが文字に大切な基準である。そして見た目に美しいこと。漢字と仮名がバランスよく配置されていると、とても美しい。漢字が多すぎたり、仮名が多すぎると、たいへん読みにくい。そうした基準はその人の美意識に関係する。そうした美意識も判断の基準に入れていい。自由なる精神の表われとみると、なんとすばら

しい表記法かと思うようになるのではなかろうか。

訓読みの煩わしさを避けるため、音読みだけ漢字を使い、訓読みの場合はすべて仮名書きするという原則に従って、日本語を書く人もいる。それはそれでよいかと思うが、語根と語尾という日本語の特徴を生かすなら、語根を漢字で、語尾を仮名で書く方が、字面に変化があって読みやすいのではなかろうか。

「文字は書くためにあるのではなく読まれるためにあるのです」と「文字はかくためにあるのではなくよまれるためにあるのです」とどちらが読みやすいか、一目瞭然であろう。日本語の文法に文節という、ひじょうに有効な単位がある。文節の始まりの多くが漢字で書かれることで、文の意味が取りやすくなっているのである。

文字は読まれるためにあるといっても、たとえば「上手はどのように読むかは文脈によって定まる」という文では、誰も「上手」という字を読みはしないだろう。文字の形を見るだけである。声を出して読む場合を想定するならば、「この文字をどう読む」「上と手と書いた文字をどう読む」という言い方をして、「上手」という文字そのものは読まない。文字の読み方が定まっていなと考えるのは、ひじょうに浅はかな考えである。文脈が与えられれば確実に読める。「舞台の上手から」とあれば、間違はなく、「カミテ」と読むだろうし、「上手にできたね」といえば「ジョウズ」と読むであろう。「一枚上手だね」といえば、「ウワテ」と読むだろう。英語の *bow* や *desert*, *lead* などと同じ、同綴異音異義語である。

音の多層性

日本漢字音には、「呉音」(六朝期以前)、「漢音」(唐代中期)、「新漢音」(唐代末期)、「宋音(鎌倉期唐音)」(宋代)「唐音(江戸期唐音)」(明・清代)の五種類の漢字音が区別できるという。このうち新漢音、宋音、唐音は限られた仏教社会でのみ使用されたものであって、それらの読みをもつ語彙も限られており、あまり日本語への影響はない(沼本 2005)。6, 7世紀頃百済を経由して移入された呉音よりも古い「古音」(五世紀以前に朝鮮半島で用いられていた字音)と呼ばれるものも知られている(佐々木 2006, 沖森 2006)。それらの異なる読みは、漢字を受容した時代が異なるからである。それぞれの時代の異なる物事を表わしている。つまり「陀羅尼」とか「行脚」とか「普請」など、語としてまるのまま覚えなければならないものである。ちょうど英語で新しい単語の綴り字を苦心して覚えるのと同じである。

こうした異なる時代の音をそのまま受容したために、たいへん複雑な様相を見せている。しかしそれも語として一つ一つ覚えるという英語の勉強を思い出せば、何の間

題もないはずである。

文字に対する誤解

いずれにしても、文字というのは苦勞して覚えなければならないものである。だから教育がなければ、文盲ということになる。書記法の問題が容易に文化や社会発展の問題と結びつけられるのも、社会制度に関係するからではなからうか。

田丸卓郎は、文字の重要性が本当にわかっていたのだろうか。

「さて、これを知つた処で何の役に立つかと云ふに、只人に笑はれずに読み書きが出来ると云ふことの外に何の役にも立たない。字の読み分け使い分けを知つて居ても、道徳上の修養にもならず、数学理学のやうな実用上の知識の足しにもならない。

一体、語は人の思想を表はす為の道具で、字はその道具を写すだけのものである。知識思想は無論大事であるし、又語は各国民に固有のものであり且つ国民の思想感情と極めて親密な関係のあるものだから、それは勝手にかへられないものであるが、字となると、其語を写す為めに人為的に作つたものに過ぎないから、どうでなければならぬと云ふものではない。」(田丸 1980: 3)

何とひどいことを言うのであろうか。文字を知っているから先の田丸のいうことがわかるのである。役に立っている。文字で表わされている深い思想や道徳、気の利いた会話など、文字が読めるからわかるのであり、役立つのである。中身を伝えるところの文字がどのような文字で書かれていてもかまわない。たまたま日本では漢字仮名交じりであるだけの話である。一つ一つの単語を覚えなければ、英語だって、何語だって理解できない。それに暇どるのは当たり前である。毎日の努力を怠れば、英語であろうと何語であろうと読みこなせない。漢字を覚えるのは英語の単語を覚えるのと何らかわりはない。

「手近な一例を挙げて見るに、専門家の話によると、日本の小学校六年間の読本の材料をドイツあたりの小学校の同年限の読本の材料に較べると、僅かに六分の一位しかないといふことである。日本の子供が一の知識を得る間にドイツの子供は六の知識を得るといふのである。国民一人一人が盡く此通りの不利益を受けて居るとして国家全体のことを考へると、外国に較べて差の余りにも大きいことに驚かされるではないか。こんなことで我々は外国人にまけないで行けるであらうか。

先年日本を視察に来た米国の実業家が向ふへ帰つての報告の中で『日本が漢字を使つて居るうちは恐れるに足りない』と云つたそうだが、実際それに相違ない。」(田丸 1980: 4-5)

確かにアメリカの教科書に比べて日本の教科書の薄いこと。こんなことでいいのだろうかと思うことしきりである。しかしそれは漢字仮名交じりと何の関係もない。それを漢字仮名交じりのせいにするのは大間違いである。みんなが教育を受け、当たり前のことになりすぎているためか、このところ教育の大切さに対する認識が甘くなってしまっているのではなからうか。

その当時ヨーロッパ列強に比べて、日本が劣っていたことを漢字のせいにはならない。現在多くの点で欧米列強と比較しても引けをとらないし、むしろ優れているところが多い。「追いつけ追い越せ」と勉強し、研究を重ねたのは漢字仮名交じりの本によっているのであって、遅れていたのは漢字仮名交じりのせいではないことは明らかである。逆に追いついたのは漢字仮名交じりのお蔭だと言ってもいい。

漢字を覚えることで無用な時間を浪費しているのではない。英語にしても中高六年たくさんの英語の単語を覚える。それも 6000 語以上覚えても、まだ辞書を引かなければならない。まだすらすら読めない。それと同じである。何度も言うようだが、英単語を覚えるのと、漢字を覚えるのとかわらない。もちろん漢字がそのまま単語になるわけではない。しかし、常用漢字は 2000 あまりである。それで十分、新聞やふつうの書物は読める。それに対して、英語ではそうはいかない。日本語の場合、漢字が出てこなければ、仮名で書くことができる。小学生でも仮名をつかえば十分自分の言いたいことが書き表わせる。ところがアメリカの小学生は単語の綴り字を知らないことには書き表わせない。

「上のような心細い有様を救う方法は何にあるかといへば、日本語を書く方法を簡単にするより他にない。即ち漢字を止めて、書いてあるものは必ず読めるような字即ち音文字を使ふことにするより他にない。学問の年限短縮なども、それによつて最も容易な解決を得ることは明らかである。音文字という点では、仮名とローマ字とが略同等な立場にあるが、第三章で十分に述べる理由に依て、吾々はローマ字を使ふことが最良の方法であることを信ずるのである。」(田丸 1980: 6)

日本語を書くのにローマ字を使うのがいいという見解はすでに 16 世紀にみられる。

先に触れた巡察師ヴァリニャーノは、1583年頃すでにローマの耶蘇会総長への書信中で、日本文字は数限りなく、その印字の製造はまことに至難きわまりないので、日本の児童に対して課する日本語の読み書きは、ローマ字綴りを用いるのが便利であると述べている（新村 1973: 12; 木下 1929: 342）。

ローマ字で書くと、確かに少ない部品ですべての単語を表わすことが可能である。仮名であると、子音と母音の組み合わせだから、当然ローマ字より多くなる。しかし音を表わすことにはかわりはないのだから、意味を表わしうる漢字より、当然少ない数ですむ。しかしその部品の組み合わせの規則を覚えなければ書けない。スペイン語のように、ほとんど音声と文字が一致している書記法においても、bとvの区別やsとc, ç, zの区別ができないと、たくさん間違った語を書くことになり、判読するのが難しくなる。実際、マヤのフィールドに出て、インディヘナの人ばかりでなく、ラディーノ（非インディヘナ）の人の書くものに出くわしたり、手紙をもらったりすると、きちんと区別して書かれているものはほとんどなかった。これが英語になると、相当な教育を受けなければ、たくさん綴り字間違いを犯すことになる。一つ一つ不安な綴り字は辞書を引いて確認しなければならない。そうしないと、判読することが難しくなるし、意味が通じないことが起こったりする。日本語を漢字仮名交じりで書くのも、それと同じである。一つ一つ単語の綴り字を覚えるのは、漢字を覚えるのと同じ作業である。要は単語にあたるものが、一次元式に左から右に並んでいるか、二次元式に書かれているかの違いにすぎない。読む場合、二次元式に、縦横をうまく利用した漢字のほうが認識しやすいに決まっている。これは人間の視覚認識が一次元ではないからである。

表語文字である漢字の利点

日本語には同音異義語が多い。その原因が漢字にあることは確かである。「公園で講演することを後援した」という文は漢字があるからわかる。これをローマ字で書いてみよう。

Kouen de kouen suru koto wo kouen sita

意味を理解することがなかなか難しいが、だからといってわからないわけではない。しかし漢字仮名交じりに比べれば、その優劣ははっきりしている。漢字仮名交じりのほうが優れていると思うのは、単にそれに慣れているからだけではない。

しかし日本語をローマ字で書くことにすると、どうしたらいいのだろう。「こうえん」という同音異義語を言い換えるしかない。公園を何と言い換えたらいいのだろ

う。すぐにはいいことばが思いつかない。「おおやけの園」「みんなが休んだり遊ぶところ」とでも言うのであろうか。講演を何と言い換えたらいいいのであろうか。「堅苦しい眠気を催すお話」とでも言うのであろうか。日本語の音素は少ないので、どうしても長いことばになってしまう。それはすでに『古事記』の作者太安万侶が「全以音連者、事趣更長」と指摘している。

これが次のような文であると、置き換えることさえ難しくなる。

Hasi de hasi no hasi wo tukamu

箸で箸の端をつかむ。

端で箸の端をつかむ。

橋で橋の端をつかむ。

まだまだいろいろ組み合わせの文ができるが、とりあえず3つだけにしておこう。日本語は高低の違いで語を区別する。それでアクセント記号を入れて、

hási de hási no hasí wo tukámu

とすると、最初の文になる。しかし関西弁では、アクセントの位置がずれているので、意味の違った文になる。これが漢字仮名交じりの文であると、そのような方言の違いを超えて理解可能になる。方言の違いを許す豊かな表記である。ローマ字で書くと一つの方言に限定されてしまい、アクセント（ピッチ）の違う方言では、理解不能になったり、違う意味にとられかねない。たくさんある豊かな方言を殺すことになってしまう。これは中国語でも同じである。声調の違いが語の違いとなる。漢字はそれをうまく包み込んで、方言の違いにもかかわらず、理解を可能にしている。中国でもローマ字入力で漢字変換をしている。裸のままのローマ字で、声調の違いを表現するより、漢字変換のほうがはるかに語の認識が早いし、わかりよいし、方言の違いも克服できる。だから漢字を捨てることがあるとしたら、大きな損失となろう。

ローマ字は遺産の継承を否定

英語では学術語はフランス語、ラテン語、ギリシャ語に由来するものが多い。それに当たるのが漢語である。興味深いことに、借用された語の割合は、英語の場合も日本語の場合も約50%で同じだそうである。日本語の場合、音韻数の少なさのため、同音異義語が多くなったという不幸な歴史があるが、いちいちこれまで使ってきた語を違う大和ことばに置き換えることはできないし、その必要もないだろう。誤解を生む場合だけ言い換えをする。これはどんな言語でもあり得ることであり、漢字仮名交じりのせいではない。辞書があるのは、言い換えができるという言語の一大特徴を顕

著に示している。だから誤解を招いたり、聞いてわからないときに、言い換えをすればいいのであって、ローマ字で書くことがすべてを解決することにはならない。

日本語をローマ字で書くということは、それまでの伝統を全部否定することである。漢字仮名交じりを学んだ我々はいい。しかしローマ字しか学ばない子供たちが育つとする。すると、我々の先祖が営々と築いてきた伝統は、もう子供たちに引き継がれることはなくなる。自分たちの伝統の否定であり、自分たちで自分たちの伝統を殺すということである。

それはたとえば韓国で起こっていることと同じである。数年前、韓国の学生が我が家にホームステイに来たことがある。私は、漢字文化圏であるので、少しは漢字がわかるであろうと思っていた。漢字で風呂と書いて通じるわけではないが、風呂に入るときには風呂という漢字を書けばいいだろうくらいに簡単に考えていたのである。というのも、外国で中華レストランに入って粥と書いたところ粥が出てきたという話を聞いたことがあるからである。ところが学生たちはいっさい漢字が理解できなかった。英語もできないので、会話がまったく成り立たず、たいへん困ったことになった。漢字を使ってきた先祖の遺産がいっさい理解できない世代が生まれているのである。ローマ字を使うと確実にそうなる。これと同じようなことが日本で起きてほしくないと願うのは私だけではないはずである。ローマ字論者は、そうなってもいいと思っているのであろうか。

「要するに、世の中がローマ字の世の中になつても、古典的の文学は専門家の手に於て永久に保存研究される。保存されて居るから、専門家でなくても、己の修養または娯楽の為にそれを研究しようと云ふ人には差支ない。そして一般の人にも、相当に長い年月の間は中学校や小学校の上級で今迄よりも少い程度に教へられる。これで、昔の文学歴史との連絡の断たれるといふような心配は更でない。」(田丸 1980: 30)

これまで営々と築かれてきた古典を一部の専門家に任せろということは、先祖が営々と築いてきた文化の否定である。1000年以上の間、文字を学び、慈しんできた人々に対する冒瀆である。文盲がほぼなくなり、文字が民主化されてきたのを否定して、一部のエリートの手にもう一度返せということである。誰もが、思い立てば、古典を読めることこそ肝心なのではなからうか。

田丸が書いた当時より、また我々団塊の年代より、現在でははるかに古典に割く時間が少なくなった。我々にとって古典を読むのはとてもしんどい作業なので、いまの時

代の学生にとってはもっとたいへんだろう。文字というものは、学ぶのに手間暇がかかるものである。それを厭ってはいけない。一度手放したら、そう簡単には戻らないものである。いまの世の中は、どうも簡単、功利に流れすぎている。

ローマ字入力，漢字仮名交じり文変換

しかしながら、現在この文もそうだが、ローマ字で入力して、漢字仮名交じり文に変換している。これはどういうことを意味するのだろうか。少し考えてみたい。入力と出力が異なっていることをどのように評価するかということである。我々はふつう「読み書き」と一つの熟語のように扱っているが、読むことと、書くことは違うレベルのものではなからうか。同じレベルとと思っていることが、実は大いなる錯覚ではないか。実際に、脳においても、分担する分野が異なり、読む領域と書く領域が違うことから、読むことと書くことは、実は違うものであることを認識すべきである。

読むことと書くことが異なることを示すよい例に点字がある。点字は点筆でボツボツと穴をあけるがごとく打っていき、凸面を読む。打つときは凹面の文字を作っているのだから、読むときの逆に打たなければならない。打つこと、それは書くことと同じ行為だが、読む場合と逆に書かなければならない。文字が逆であるばかりか、書く方向も逆になる。読む場合が左から右であると、書く場合は右から左である。点で作られた文字は、日本語の場合は仮名、英語の場合はアルファベットと同じになるので、分かち書きが必要となる。分かち書きをすることは表語のためである。

読むことは、表語的に読みを進めることであり、一つ一つの音にこだわっているのではない。だから早く読める。いくらローマ字で書いていても、表音であると思うのは大間違いである。一つ一つローマ字を拾って読んでいたのでは、とても早く読めない。ひとかたまりを見て判断しているのである。それは表語、表句文字として読んでいるということである。文字の羅列を一つの形としてみなければ、早く読めるわけではない。形を判断するのは、横並びの一次元の書き方より、漢字のような二次元のほうが早いに決まっている。

日本語は19のアルファベットの文字でこと足りる。つまり、区別する音が少ないということは、同音異義語が増えるということであり、そうしないようにしようと思えば、長い語が増えてくるということである。公園を「公の園」と和語で読んだとする。それをローマ字で表わすと、kouen と ooyakenosono となる。かくのごとく長い語となってしまう。短い語であると、同音異義語が増えるから、それは仕方のないことである。だから漢語が入ったともいえる。短い語で言い表わすことができるというこ

とは、読む場合にはひじょうに都合がよいわけである。

ローマ字入力により、日本語も簡単にコンピュータで検索できるようになった。索引も簡単にできるようになった。機械化の問題は、技術者の努力により、何の問題もなくなった。あとはローマ字が読みやすいかどうかということである。これは慣れの問題ともいえるが、文字の究極の目的は表語という観点からみると、二次元的な表記法である漢字仮名交じりのほうが一次元的なローマ字表記よりはるかに効率がよいということになる。書くのはローマ字で書いても、漢字仮名交じりで書いても同じかもしれないが、ワープロの場合は、ローマ字入力のほうがはるかに効率がよい。限られた部品を効率よく組み合わせるのが、機械であるからである。

山と書くのと、mountain とどちらが簡単かとかいっても仕方がない。では「簡単」と simple はどうだということになってしまうからである。ある単語は漢字のほうが簡単だが、違う単語では英語の綴り字のほうが簡単である。要は単語を比較する必要がある。これはきっと勝負がつかない問題となるに違いない。

機械的には少ない部品で一次元的に書けるローマ字のほうが優れている。漢字は二次元的な構成であり、それぞれの部品である偏や旁はローマ字の数の何倍もある。だから我々はローマ字入力をしている。しかし読む方は漢字仮名交じりのほうが二次元的だから読みやすい。だから漢字仮名交じりに変換している。なんと日本人は優れた機械を発明したことかと、改めて思う。語根を漢字で、活用する語尾を仮名で書き分けた古代の人々の工夫は、日本語の性質に合ったものだった。だから千数百年の長きにわたって使われてきたのである。それをいまワープロでいとも簡単に打てるようになった。それは、古代の日本人の創意工夫をいまの時代に合わせて伝えるものと言っていい。

ローマ字にしたから国際化ができると思うのは大間違いである。ローマ字で日本語を学ぶ方が日本語を母語としない人にとっては学びやすいかもしれない。しかしそれは最初の2、3年の話にすぎない。それ以後は、どの言語を学ぶにしても、同じであり、言語学習の高い壁が立ちはだかってくる。12、3歳までに学ばなければ、ほとんど母語と同じような言語能力を得ることは難しいといわれているのであって、語学学習の高い壁は、たとえローマ字で日本語が書かれていようとそんなにかわらない。

6 おわりに

文字というのは、単に言語を表記するためにあるのではなく、たいへん文化的なも

のである。世界には6000を超す言語があるというのに、文字の種類は、有史以来300あまりしかない。ほとんどの民族が文字をもたずに生活をしてきたといっても過言ではない。文字は人間の生活に直接必要なものではなかったのであり、だからこそ文化の凝縮物といわれるのである。そのため、日本の文字を論じると、必ず、漢字は効率が悪いとか、近代化の妨げになるとかいったことと結びつくようである。効率が悪いから、漢字を制限しようとか、漢字は中国のものであるので、日本に生まれた仮名文字だけにして日本固有の文化を大切にしようといった国粹的な運動や、ローマ字で日本語を表記しようという社会運動となってきた。どうもそこには文字に対する日本人のコンプレックスばかりでなく、日本そのものに対するコンプレックスがみられるように思われる。

文字は近代国家に必要な不可欠のものである。それは多様な言語を一つの標準語にまとめていく作業と同じといってもいい。そういう観点からみると、江戸まで、もっと正確に言えば、小学校令施行規則が出る明治33(1900)年までは、決して近代とは言えないわけである。その年に1字1音という規則が制定されたのだが、それは、その前に、相当活字の統一が計られていたからこそ可能であったに違いない。活字が統一されるということは、均質な制度に統一するということであり、それまで変化に富んでいた平仮名は変体仮名と呼ばれるようになり、書道の世界を残し、抹殺されてしまった。しかし変体仮名も印刷されていたし、連綿体と称される続き文字でさえ印刷のための活字が作られていた。そうした変体仮名で印刷された書物がいまの我々には読めない。印刷は定型化する作業であるにもかかわらず、読めない。その代わり、漢字の字数を制限し、仮名も1音1字にして、能率の上がる書記法を獲得した。そのお蔭か、日本は近代化に一直線に進み、世界に冠たる経済大国になった。

仮名はいろいろな漢字から生まれたため、たくさん異なる種類があった。しかし現在の教育では「あ」という文字は一つしかない。その文字は「安」から生まれた。しかし「阿」や「愛」「悪」などから生まれた「あ」の字もある。そうした異なる「あ」の字をすべて捨て去り、「あ」一つにしたのは、読み書きの便利を考えてなされた字の統一であり、お蔭で、簡単に学習ができるようになった。しかし字を統一して、活字を作るということは、一つの基準を押しつけることである。画一化した思考が当たり前と思う人間を作り出すことでもある。

基準を統一する、画一化するということを人間は往々に行ないがちである。中央に統一するということをやりがちである。こうも考えられるけど、あも考えられるということをおお切にして、それを評価する社会にしなければならない。一つに絞ら

なければならないこともあるが、複線ということのを忘れないようにしなければならない。それはバックアップの思想といってもよい。不要なものを抱え込むように思いがちだが、結局はそれが安全であり、得をするという認識をもつことが必要である。

表語文字と表音文字を交ぜて使う日本の書記法は、現在、世界で二つとない珍しい人間の英知の結晶である。もっとも過去には、同じような書記法があった。マヤ文字や楔形文字がそうであるし、かつてのハンゲルがそうである。だから決して世界に類をみない書記法ではない。しかし漢字と仮名という異なる体系の文字を混ぜて使うことは、日本語の性質に合った書記法といってい。漢字でも書けるし仮名でも書けるというのは複線化の一つである。

この人間の英知の結晶ともいべきものをいとも簡単に放棄して何とも思わないのだろうか。日本語を捨てて英語やフランス語に乗り換えようという意見さえあった。たとえば小説の神様と称せられた志賀直哉は、国語をフランス語にしようと主張した(志賀直哉 1946)。放棄してもいいという人たちは、他の文化の研究をしているときは、その土地の文化や伝統が急速に消えていくことを必ずといっていいほど嘆く。それなのに、自分たちの文化、伝統が消滅していくことに対しては、一顧だにしない。世界の貴重な言語が消滅している。貴重な草花や動物が消滅している。そうしたものは何とか絶滅しないように保護しなければならないと言いながら、自分たちのことになると、いまたくさんの方言がなくなっていることにさえ、ほとんどの人は気づいていない。消滅しようがしまいが何ともないような鈍感な人間になるのはなぜだろう。自国軽視の状態になるのはなぜだろう。日本に対する愛着、愛国心に欠けているということなのだろうか。この 100 年あまりの間に醸成された西洋に対する劣等意識がなせるわざなのだろうか。我々は世界に二つとない日本の書記法を大切に保存していく使命があるはずである。

吉田松陰は、『武教小学序』で、次のように言っている。

「異国の書物を読めば、とかく異国のことのみを良いと思ひ、わが国をかえつて賤しんで、異国をうらやむようになっていくのが学者が一般におちいりやすいあやまりである」(吉田松陰 1973: 140)

異国をうらやむといっても、それは以前は中国だったが、いまは西洋のことといってい。日本人は西洋に基準をおきすぎている。それは主体性がないということの裏面ともいえる。

日本の書記法をアルファベットにかえるということは、欧米の基準に合わせることである。自分たちの名前が姓一名という順になっているのに、欧米の名前の順に合わせて、名一姓として何の違和感をもたない。むしろハイカラと感じたのではないか。こんな発想をするのは日本人の特徴の一つである。アルファベットでなければ国際化ができないというもおかしな見方である。

書記法では、アルファベットがもっとも進んだ段階だという迷信がある。表語文字から音節文字にいき、アルファベットになったというのは、進化思想の一つである。ちょうど一神教が多神教より進んだ段階にあると思うのと同じである。しかし、文字の本質は表語であり、音節文字も単音文字も同じ表音文字に過ぎない。進化思想があるから、アルファベット以外は遅れた段階にあるということになる。繰り返すが、英語の綴り字を見てわかるように、文字の本質は表語にある。へんな綴りを発音に合わせて変えないのは、変えると語として認められなくなるからである。そういう融通の利かない基準を日本の文字体系に適用するから、日本語には正書法がないという誤った見方を生むのである。

アルファベットだと26字覚えればすむのに、漢字であるとは千も覚えなければならないというのは、表音と表語のレベルを混同した誤った見方である。アルファベットで書かれていると読めると思うのも誤っている。英語の例を第4章でいくつか挙げたが、読めない語が多い。数千の音節があるという英語をたった26のアルファベットで表音的に表わすこと自体無理な話である。どうしてもアルファベットのの一つ一つに1音以上の読み方を与えねばならない。だからsが[s]や[z]であったりして、不規則きわまりない綴りができて、読めなくなるのである。

俗に「読み書き」といって、「読むこと」と「書くこと」を対にして考えがちである。そのため、書記法の考察も、両者を違うものとして認識してこなかったように思われる。しかし「読むこと」は、いわば受動的、消費的な行為に対して、「書くこと」は、能動的、生産的な行為であり、おそらく脳の分担域も異なる。国字ローマ字論は、主に書くことに焦点を置いたものであった。なるほど書くのは便利である。しかし文字の本質は表語、すなわち意味ある言語単位をいかに表わすかということにある。その観点からみると、ローマ字より漢字仮名交じり表記の方が優れている。むしろ文節という単位を明示的に示すことができるすばらしい表記法といってよい。それを難しい、世界に通用しないものとするのは、ローマ字が国際的に用いられているという基準に従った判断に過ぎない。いくら一つ一つのアルファベットが読めたからといって、意味ある単位は、言語を習得しなければ、何にもならない。それは難しいと言わ

れる漢字を覚えることと何らかわりはない。

世界に二つとない漢字仮名交じりの書記法を、世界に通用しないローカルなものと考えて、かけがいのない人類遺産とみるか。日本語の書記法にたえずつきまどっていた、入力もできない、検索もできないといった難問も、コンピュータのお蔭で解決した。あとは、漢字仮名交じりの書記法を、人類のかけがえのない英知の結晶の一つとしてしっかり認識して、我々自身がさらに磨きをかけていく意志をもつことが大切であろう。

謝 辞

本稿のきっかけは、恩師梅棹忠夫が最近著作や新聞で改めてローマ字国字論を展開されているのを目にしたことによる。日頃の学恩に感謝するとともに、自由な研究環境と国字問題の良質なコレクションが民博にあった幸運に感謝したい。日本の書記体系の歴史や国字問題については専門外であるが、西洋の基準にあまりにとらわれていることや、文字についての「常識」などについて検討した。不適切な点が多々あることと思うが、それらのいくつかを改めることができたのは、3人の査読者のお蔭である。そのほかの至らぬ点は筆者の責任である。ご批判を待ちたい。

註

- 1) 文字との出会い、文字使用の歴史として、次のような年数を挙げておきたい。「貨泉」や「金印」が最初の漢字の遺品とすると、漢字との出会いから約2000年となる。帰化人が集団で来朝した4世紀頃、漢字・漢文を学び始め、本格的漢字学習が始まったのが5世紀というので、それを基準にすると約1600年である。平仮名が平安王朝文学に使われるようになったのが10世紀なので、1100年弱ということになるが(大島2006; 沖森2003; 春日1982; 小松茂美1968; 築島1981等)、本論では、それを基準にして、区切りのいい1000年以上という表現にしている。
- 2) 固有名詞の音仮名表記は5世紀から、一般名詞の音仮名表記も7世紀前半には確認されている。それらは日本語を表わすために必要な漢字の習得が十分なされたことを意味する。1音1字の音仮名表記、いわゆる万葉仮名表記による歌謡表記は、『古事記』以前に、7世紀末から奈良時代初頭にかけてのものと思われる木簡などに確認されている。やがて草仮名(9世紀前半)を経て平仮名が誕生する。年代の確定している最古の平仮名資料は「教王護国寺千手観音像胎内檜扇墨書」(877年)というが、字体が固定化したのは10世紀である(沖森2003: 179-211)。
片仮名は、漢文の訓点記入から生じたもので、創始期には、万葉仮名と、その草体と、その省画体の3者が未分化の状態で使用されていた。字体や用法は時代とともに変遷し、省画体だけが残って、片仮名として発達し、12世紀後半には現在の片仮名と同じ字体の体系が成立した(築島1981: 95, 216)。
現在我々は漢字仮名交じり文を使っている。それは平安時代に生まれた。平安時代の漢字仮名交じり文には、(1)平安初期(9世紀)以降、訓点資料の書入れなどにみられる漢字片仮名交じり文、(2)奈良時代(8世紀)以来の宣命書の中で万葉仮名の部分が崩され次第に平仮名となり、さらにまた、万葉仮名を片仮名に置換えることもあって生じた漢字仮名交じり文、(3)平安中期(10世紀)以降盛んになった変体漢文において、次第に平仮名や片仮

名を添加するようになり、その結果生じた漢字仮名交じり文の3種があるという（築島 1981: 282）。

文字の実例を豊富に載せた文字史としては、石川（2001）を挙げておきたい。

- 3) 民博の客員教官であったプレーメンさんは、不治の病におかされ、2005年に尊厳死を選択された。追悼の意味を込めて、あえてここに名を挙げさせてもらった。
- 4) 歴史をおって変化する文字テキストが簡単に見られる本として、『文字の博物館』（矢島文夫監修 1984）を挙げておきたい。

文 献

- Barrera Vásquez, Alfredo (ed.)
1980 *Diccionario Maya-Cordemex*. Yucatán, México: Ediciones Cordemex.
- Calnek, Edward E.
1978 The analysis of prehispanic Central Mexican historical texts. *Estudios de Cultura Náhuatl* 13: 239–266.
- Caso, Alfonso
1964 *Interpretación del Códice Seden 3135 (A.2)*. México: Sociedad Mexicana de Antropología.
1965 Zapotec writing and calendar. In Gordon R. Willey (Vol. ed.), *Handbook of Middle American Indians*, Vol. 3, *Archaeology of Southern Mesoamerica*, Part 2, pp. 931–947
Austin: University of Texas Press.
- Codex Vindobonensis S.N.1600
1960 *Cartas de relación de la conquista de la Nueva España: Escritas por Hernán Cortés al Emperador Carlos V y otros documentos relativos a la conquista, año de 1519–1527: Codex Vindobonensis S.N.1600*. Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt.
- Coe, Michael D.
1976 Early steps in the evolution of Maya writing. In H.B. Nicholson (ed.), *Origins of Religious Art and Iconography in Preclassic Mesoamerica*, pp. 107–122. Los Angeles: UCLA Latin American Center Publications, University of California.
- Ethnologue
<http://www.ethnologue.com> (16. July 2008)
- Firchow, Irwin and Jacqueline Firchow
1969 An abbreviated phoneme inventory. *Anthropological Linguistics* 11 (9): 271–276.
- Flannery, Kent V. and Joyce Marcus (eds.)
1983 *The Cloud People: Divergent Evolution of the Zapotec and Mixtec Civilizations*. New York: Academic Press.
- Graham, Ian and Eric von Euw
1977 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions, Volume 3, Part 1, Yaxchilan*. Cambridge: Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.
- Jones, Christopher and Linton Satterthwaite
1982 *The Monuments and Inscriptions of Tikal: The Carved Monuments*. Tikal Report No. 33, Part A. Philadelphia: The University Museum, University of Pennsylvania.
- Maddieson, Ian
1984 *Patterns of Sounds*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rodríguez Martínez, Ma. del Carmen, Ponciano Ortíz Ceballos, Michael D. Coe, Richard A. Diehl, Stephen D. Houston, Karl A. Taube and Alfredo Delgado Calderón
2006 Oldest writing in the New World. *Science* 313: 1610–1614.
- Saenger, Paul
1997 *Space between Words: The Origins of Silent Reading*. Stanford: Stanford University Press.
- Sheldon, Steven N.
1974 Some morphophonemic and tone perturbation rules in Mura-Pirahã. *International Journal of American Linguistics* 40: 279–282.

- Snyman, J. W.
 1970 *An Introduction to the !Xū (!Kung) Language*. Cape Town: A.A. Balkema.
- Taube, Karl
 2000 The writing system of ancient Teotihuacan. *Ancient America* 1. Barnardsville, N.C. and Washington, D.C.: Center for Ancient American Studies.
- Winfield Capitaine, Fernando
 1988 La estela 1 de La Mojarra, Veracruz, México. *Research Reports on Ancient Maya Writing* 16. Washington D.C.: Center For Maya Research.
- Yasugi, Yoshiho
 1995 *Native Middle American Languages: An Areal-Typological Perspectives*. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 新井白石
 1975 『新井白石』(日本思想大系 35) 東京: 岩波書店。
- 石川九揚
 2001 『日本書史』名古屋: 名古屋大学出版会。
- 印刷史研究会編
 2000 『本と活字の歴史事典』東京: 柏書房。
- 印刷博物誌編集委員会編
 2001 『印刷博物誌』東京: 凸版印刷。
- 梅棹忠夫
 2002 『行為と妄想—私の履歴書』東京: 中央公論新社(中公文庫)。
- 海老沢有道
 1958 『南蛮文化—日欧文化交渉』東京: 至文堂(日本歴史新書)。
- 大黒俊二
 2009 「古文学から史料論へ」齋藤晃編『テキストと人文学—知の土台を解剖する』pp. 36-49, 京都: 人文書院。
- 大島正二
 2006 『漢字伝来』東京: 岩波書店(岩波新書)。
- 大野 晋
 1958 『岩波講座 日本文学史第2巻 古代 仮名文字・仮名文の創始』東京: 岩波書店。
 1982 『仮名遣と上代語』東京: 岩波書店。
- 大野 透
 1977 『萬葉仮名の研究—古代日本語の表記の研究』(新訂版) 東京: 高山本店(初版は1962年, 東京: 明治書院)。
- 岡田章雄
 1967 『南蛮史談』東京: 人物往来社。
 1975 『キリシタンの世紀』(図説日本の歴史 10) 東京: 集英社。
- 沖森卓也
 2003 『日本語の誕生—古代の文字と表記』東京: 吉川弘文館。
 2006 「万葉仮名」平川南・沖森卓也・榮原永遠男・山中章編『文字と古代日本 5』pp. 318-333, 東京: 吉川弘文館。
- 春日政治
 1982 『仮名発達史の研究』(春日政治著作集第1冊) 東京: 勉誠社。
- 樺島忠夫
 1979 『日本の文字—表記体系を考える』東京: 岩波書店(岩波新書)。
- 亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著
 1988-1993 『言語学大辞典』(1-5巻) 東京: 三省堂。
- 川副佳一郎
 1922 『日本ローマ字史』東京: 岡村書店。
- 木下奎太郎
 1929 『えすばにあ・ぼるつがる記』東京: 岩波書店。
- 金田一春彦・林 大・柴田 武編
 1988 『日本語百科大事典』東京: 大修館書店。

久米邦武編修

1878 『特命全權大使米歐回覽寔記』東京：博聞社。

倉島長正

2002 『国語 100 年—— 20 世紀, 日本語はどのような道を歩んできたか』東京：小学館。

河野六郎

1977 「文字の本質」大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語 8 文字』pp. 1-22, 東京：岩波書店。

1994 『文字論』東京：三省堂。

河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著

2001 『言語学大辞典別巻 世界文字辞典』東京：三省堂。

小松茂美

1968 『かな——その成立と変遷』東京：岩波書店（岩波新書）。

小松英雄

1979 『いろはうた——日本語史へのいざない』東京：中央公論社（中公新書）。

1981 『日本語の音韻』（日本語の世界 7）東京：中央公論社。

2000 『日本語書記史原論』（補訂版）東京：笠間書院。

2003 『仮名文の構文原理』（増補版）東京：笠間書院。

佐々木勇

2006 「古代漢字音の受容と展開」平川南・沖森卓也・榮原永遠男・山中章編『文字と古代日本 5——文字表現の獲得』pp. 299-317, 東京：吉川弘文館。

佐竹昭広・木下正俊・小島憲之

1963 『万葉集本文篇』東京：塙書房。

志賀直哉

1946 「国語問題」『改造』pp. 94-97。

柴谷方良・影山太郎・田守育啓

1981 『言語の構造 音声・音韻篇——理論と分析』東京：くろしお出版。

新村 出

1973 「南蛮文学」『新村出全集第 7 卷』東京：岩波書店（初出は 1935 年）。

鈴木孝夫

1988 『私の言語学』東京：大修館書店。

1990 『日本語と外国語』東京：岩波書店（岩波新書）。

田丸卓郎

1980 『ローマ字國字論』東京：岩波書店（初版は 1930 年）。

築島 裕

1977 『国語の歴史』東京：東京大学出版会。

1981 『仮名』（日本語の世界 5）東京：中央公論社。

1986 『歴史的仮名遣い——その成立と特徴』東京：中央公論社（中公新書）。

角田太作

1991 『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版。

鶴 久

1977 「万葉仮名」『岩波講座 日本語 8 文字』pp. 209-248, 東京：岩波書店。

土井忠生

1962 「落葉集解題」京都大學文學部國語學國文學研究室編『慶長三年耶蘇會板落葉集, 京都：京都大學國文學會。

1977 『国語史論攷』東京：三省堂。

中田祝夫

1982 『日本の漢字』（日本語の世界 4）東京：中央公論社。

西田龍雄

1981 「世界の文字」西田龍雄編『講座言語 第 5 卷 世界の文字』pp. 5-41, 東京：大修館書店。

西野嘉章編

1996 『歴史の文字——記載・活字・活版』東京：東京大学総合研究博物館。

沼本克明

2005 「漢音系字音」北原保雄監修・林史典編『朝倉日本語講座 2 文字・書記』pp. 187-

- 200, 東京：朝倉書店。
- 野村雅昭
1988 『漢字の未来』 東京：筑摩書房。
- 橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇
1987 『漢字民族の決断—漢字の未来に向けて』 東京：大修館書店。
- 林大監修
1982 『図説日本語』 東京：角川書店。
- 林史典編
2005 『朝倉日本語講座 2 文字・書記』 東京：朝倉書店。
- 早田輝洋
2005 「諸言語の音韻と日本語の音韻」 北原保雄監修・早田輝洋編 『朝倉日本語講座 1 世界の中の日本語』 pp. 1-22, 東京：朝倉書店。
- 久松潜一
1976 『万葉秀歌 1-5』 東京：講談社（講談社学術文庫）。
- 平井昌夫
1948 『國語國字問題の歴史』 東京：昭森社。
- 平田篤胤（高橋国彦・相田饒徳・佐藤信淵編）
1870 『神字日文傳』
- 福島邦道・解説
1976 『天草版平家物語（上下）』 東京：勉誠社。
1977 『天草版伊曾保物語』 東京：勉誠社。
- 福田恆存
1962 『国語問題論争史』 東京：新潮社。
- 福沢諭吉
1981 「文字之教端書」 富田正文編 『福沢諭吉選集第2巻』 東京：岩波書店。
- 藤田徳太郎
1943 「国語問題と國語政策」 日本國語會編 『國語の尊嚴』 pp. 163-231, 東京：國民評論社。
- 古瀬幸広
1992 「ワープロ発明者の知られざる末路」 『新潮 45』 2: 110-127。
- 本多利明
1970 『本多利明・海保青陵』（日本思想体系 44） 東京：岩波書店。
- 松田毅一
1979 「キリシタンの学校」 遠藤周作編 『大航海時代の日本 6 受容と屈折』 pp. 41-52, 東京：小学館。
- 村井 実
1979 『アメリカ教育使節団報告書』 東京：講談社（講談社学術文庫）。
- 本居宣長
1978 『本居宣長』（日本思想大系 40） 東京：岩波書店。
- 八杉佳穂
1984 「文字と言語文化」 『現代の人類学 3 —言語人類学』 pp. 157-170, 東京：至文堂。
1985a 「メソアメリカの文字」 『文化人類学 1』 pp. 227-259, 東京：アカデミア出版会。
1985b 「ユカテクマヤ語の正書法の歴史—マヤ人の文字使用との関連において」 『国立民族学博物館研究報告』 10(1): 93-110。
1990 「アルファベットの無理」 『民博通信』 49: 8-15。
2001 「メソアメリカの文字」 河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著 『言語学大辞典別巻世界文字辞典』 pp. 1012-1028, 東京：三省堂。
2003a 「マヤ文字」 『神秘の王朝マヤ文明展』 pp. 234-242, 東京：TBS。
2003b 『マヤ文字を解く』 東京：中央公論新社（中公文庫）。
2004 「マヤ人は何をしるしたか—マヤ文字」 八杉佳穂編 『マヤ学を学ぶ人のために』 pp. 97-120, 京都：世界思想社。
2005 『マヤ文字を書いてみよう読んでみよう』 東京：白水社。
- 矢島文夫
1977 『文字学のたのしみ』 東京：大修館書店。

矢島文夫監修

1984 『文字の博物館』東京：白水社。

山片蟠桃

1976 『富永仲基・山片蟠桃』（日本思想体系 43）東京：岩波書店。

山口忠男

1992 「初期キリシタン版の国字大字本について——「ばうちずもの授けやう」の印刷面を中心として」『ビブリア』98: 16-50。

山下芳太郎

1920 『国字改良論』大阪：假名文字協會。

山田孝雄

1937 『國語史文字篇』東京：刀江書院。

1943 「國語の傳統」日本國語會編『國語の尊嚴』pp. 103-137, 東京：國民評論社。

吉田澄夫・井之口有一共編

1950 『國字問題論集』東京：富山房。

吉田松陰

1973 『吉田松陰』（日本の名著 31）東京：中央公論社。

ヴァリニャーノ

1973 『日本巡察記』（東洋文庫 229）松田毅一他訳，東京：平凡社。

